

第九條 帝國大學總長ニシテ一級俸ヲ受ケタル者又ハ管理局長タル鐵道院理事ニシテ一級俸ヲ受ケタル者ニハ年功ニ依リ特ニ五百圓以内ノ加俸ヲ給スルコトヲ得(大正二年第二
第九條ノ二 傳染病研究所長ニシテ五年以上高等官二等ニ在リ功績顯著ナル者ハ特ニ高等官一等ニ陞叙スルコトヲ得(明治四十四年第十九號ヲ以テ改正)

第九條ノ三 賞勳局總裁、樞密院書記官長、專賣局長官、會計検査院部長、行政裁判所評定官部長貴族院書記官長又ハ衆議院書記官長ニシテ五年以上高等官一等ニ在リ且五年以上最高俸ヲ受ケ功績顯著ナル者ニハ特ニ五百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得
前項ニ掲ケタル各官ニ付テハ其ノ高等官一等ニ在リテ最高俸ヲ受ケタル年數ハ相互ニ之ヲ通算ス

高等官一等ノ本官ニ在リタル者ヲ第一項ニ掲ケタル各官ニ任用シタル場合ニ於テハ其ノ高等官一等ニ在リテハ第一項各官ノ最高俸給額以上ヲ受ケタル年數ハ第一項各官ノ在職年數ニ之ヲ通算ス(大正二年第二十七號ヲ以テ改正)

第九條ノ四 内閣統計局長、印刷局長、各省局長、造幣局長、維新史料編纂事務局長、特許局長又ハ爲替貯金局長ニシテ五年以上高等官二等ニ在リ功績顯著ナル者ハ特ニ高等官一等ニ陞叙シ五百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得
前項ニ掲ケタル各官ノ在職年數ハ相互ニ之ヲ通算ス

高等官一等ノ本官ニ在リタル者ヲ第一項ニ掲ケタル各官ニ任用スル場合ニ於テハ高等官一等ニ叙スルコトヲ得

高等官一等ニ叙スルコトヲ得ル官ノ高等官二等ノ本官ニ在リタル者ヲ第一項ニ掲ケタル各官ニ任用シタル場合ニ於テハ其ノ在職年數ハ第一項各官ノ在職年數ニ之ヲ通算ス
前二項ノ場合ニ於テ年功加俸ノ給與ニ付テハ高等官二等以上ニ在リテ第一項ニ掲ケタル各官ノ俸給額以上ヲ受ケタル年數ヲ第一項各官ノ在職年數ニ通算ス

高等官二等ニ叙スルコトヲ得ル官年功ニ依リ高等官二等ニ叙ノ高等官二等ノ本官ニ在リタル者ヲ第一項ニ掲ケタル各官ニ任用シタル場合ニ於テハ其ノ在職年數ノ二分ノ一ヲ第一項各官ノ在職年數ニ通算ス但シ年功加俸ノ給與ニ付テハ高等官二等ニ在リテ第一項各官ノ俸給額以上ヲ受ケタル年數ノ二分ノ一ヲ第一項各官ノ在職年數ニ通算ス

(大正二年第二十七號ヲ以テ本條追加)

第十條 總領事、大林區署長タル山林事務官若ハ山林技師、鑛務署長、航路標識管理所長臺灣總督府臺北醫院醫長、關東都督府通信管理局長又ハ關東都督府醫院醫長ニシテ三年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ大林區署長タル者ハ二人ヲ、鑛務署長、臺灣總督府臺北醫院醫長、關東都督府通信管理局長又ハ關東都督府醫院醫長ハ一人ヲ限リ高等官二等ニ陞叙スルコトヲ得(明治四十三年第三百七十七號同四十四年第七十五號)
(第二百七十七號及大正二年第二百十四號ヲ以テ改正)

陸軍教授、海軍教授又ハ商船學校教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ各一人ヲ限り高等官二等ニ陞叙スルコトヲ得

文部省直轄諸學校教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ二十七人ヲ限り高等官二等ニ陞叙スルコトヲ得但シ各校二人ヲ超ユルコトヲ得ス

東北帝國大學附屬醫學專門部、工學專門部教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ各部ヲ通シテ二人ヲ限り高等官二等ニ陞叙スルコトヲ得(明治四十五年第六十七號ヲ以テ本項ヲ追加)

東北帝國大學農科大學附屬大學豫科、土木工學科、水産學科教授ニシテ五年以上高等官三等ニアリ功績アル者ハ各科ヲ通シテ二人ヲ限り高等官二等ニ叙スルコトヲ得

(大正二年第二百十四號ヲ以テ改正)

第十一條 各廳ニ於テ勅任技師ヲ置クコトヲ要スルモノハ官制ニ於テ之ヲ定ム

第十二條 奏任文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表各號ノ一ニ依ル

同一ノ官ニシテ官等ニ依リ其ノ俸給ヲ異ニスルモノハ別表第三表ニ依リ各其ノ官等ニ相當スル俸給ヲ給ス

第十三條 別表第二表第一號ニ依ル官ノ官等ハ高等官三等乃至七等、同第二號ニ依ルモノ

ハ高等官四等乃至八等、同第三號ニ依ルモノハ高等官五等乃至八等、同第四號ニ依ルモノハ高等官六等以下、同第五號ニ依ルモノハ高等官二等以下トス

第十四條 別表第二表第一號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當スル諸官左ノ如シ

内閣書記官

内閣總理大臣秘書官

法制局參事官

賞勳局書記官

馬政局書記官

鐵道院參事

鐵道院總裁秘書

樞密院書記官

各省參事官

各省大臣秘書官

各省書記官

土木局書記官(明治四十四年第四百四號追加)

理財局書記官(大正二年第二百十四號改正)

專賣局部長

專賣局參事

大藏事務官(大正二年第二百十四號改正)

稅關事務官

稅務監督局長

稅務監督官(大正二年第二百十四號追加)

理事

主理

帝國圖書館長

山林局書記官

水産局書記

特許局事務官

山林事務官大林區署(大正二年第二百十四號改正)長タル者

鑛務署長(大正二年第二百十四號改正)

製鐵所理事(明治四十四年第二百六號改正)

製鐵所參事(明治四十四年第二百六號追加)

臨時博覽會事務官(大正三年第七十七號追加)

爲替貯金局事務官(大正二年第二百十四號改正)

臺灣總督府參事官

遞信局事務官(同前)

臺灣總督府秘書官

通信事務官(大正二年第二百十四號追加)

臺灣總督府警視

朝鮮總督府參事官(明治四十二年三月十七號改正)

臺灣總督府事務官

朝鮮總督府秘書官(同前)

臺灣總督府專賣局事務官

朝鮮總督府警務官(同前)

臨時臺灣總督府工事部事務官

朝鮮總督府警務官(同前)

關東都督府參事官

朝鮮總督府鐵道局參事(同前)

關東都督府秘書官

朝鮮總督府遞信局書記官(大正二年四月號改正)

關東都督府通信局局長

朝鮮總督府臨時土地調查局書記官

行政裁判所評定官

朝鮮總督府稅關長(明治四十二年三月十七號改正)

貴族院書記官

朝鮮總督府道事務官(同前)

衆議院書記官

第十五條 別表第二表第一號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當セサル諸官左ノ如シ

判事

帝國大學書記官

檢事

檢査官

會計檢査院書記官

朝鮮總督府判事(明治四十三年第三百七十七號改正)

朝鮮總督府檢事(同前)

臺灣總督府醫院醫長

樺太廳警察部長(同前)

臺灣總督府醫學教授

樺太廳醫院醫長(明治四十四年第五號改正)

臺灣總督府法院判事

警視廳官房主事(大正二年第二百十四號追加)

臺灣總督府法院 察官

警視廳保安部長(大正二年第二百十四號追加)

臺灣總督府稅關長

警視廳衛生部長(同前)

臺灣總督府廳長

北海道廳內務部長(同前)

關東都督府醫院醫長

北海道廳警察部長(大正二年第二百十四號追加)

關東都督府法院判事

北海道廳拓殖部長(同前)

關東都督府法院檢察官

北海道廳土木部長(同前)

第十六條 別表第二表第二號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當スル諸官左ノ如シ

內閣統計官(大正二年第二百十四號改正)

稅關副事務官(大正二年第二百十四號改正)

鐵道院副參事

稅務副監督官(同前)

造神宮主事

專賣局副參事(同前)

釀造試驗所事務官
 千住製絨所事務官
 監獄事務官
 山林事務官(大正二年第二百十四號改正)
 鑛務官(同前)
 製鐵所副參事(明治四十四年第二百六號改正)
 農務局事務官
 爲替貯金局副事務官(大正二年第二百十四號改正)
 遞信局副事務官(同前)
 通信副事務官(同前)
 朝鮮總督府事務官(明治四十三年言十七號改正)
 朝鮮總督府視學官(明治四十四年言十七號追加)
 朝鮮總督府鐵道局副參事(四十二年言十七號改正)
 第十七條 別表第二表第二號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當セサル諸官左ノ如シ
 外務省翻譯官
 防疫官(明治四十五年第三百三號追加)

朝鮮總督府遞信事務官(四十五年第四十五號改正)
 朝鮮總督府營林廠事務官(四十二年言十七號改正)
 朝鮮總督府平壤鑛業所事務官(同前)
 臺灣總督府視學官
 臺灣總督府稅務官
 臺灣總督府稅關事務官
 臺灣總督府稅關監視官
 臺灣總督府鐵道部事務官
 臺灣總督府通信事務官
 臺灣總督府作業所事務官(大正二年言四號追加)
 臺灣總督府阿里山作業所事務官
 關東都督府通信事務官
 稅務鑑査官(大正二年第二百十四號改正)
 陸軍編修

陸軍通譯官

海軍編修

海軍通譯官

典獄(大正二年第七十八號追加)

圖書官(大正二年第二百十四號改正)

帝國大學事務官

帝國大學學生監

帝國大學司書官

京都帝國大學醫科大學附屬醫院藥局長

九州帝國大學醫科大學附屬醫院藥局長

保險事務官

特許局審査官

水産講習所教授

植物檢査官(大正三年第九十三號追加)

第十八條 削除(大正二年第二百十四號ヲ以テ削除ス)

第十九條 別表第二表第二號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當セサル諸官左ノ如シ

高等海員審判所審判官

高等海員審判所理事官

地方海員審判所審判官

地方海員審判所理事官

朝鮮總督府編修官(四十四年第一百三十七號追加)

朝鮮總督府通譯官(四十二年言十七號改正)

朝鮮總督府道慈惠醫院醫官(同前)

臺灣總督府海事官

臺灣總督府警察官及司獄官練習所教官

臺灣總督府防疫事務官

臺灣總督府防疫醫官

臺灣總督府稅關鑑定官

警視廳消防部長(大正二年第二百十四號改正)

北海道廳支廳長(函館支廳長タル者)

稅務監督局事務官(大正二年第二百十四號追加)
 司稅官(同前)
 陸軍監獄長
 海軍監獄長
 副檢査官
 朝鮮總督府警視(四十二年第三百七十七號改正)
 朝鮮總督府臨時土地調查局事務官(同前)
 朝鮮總督府醫院教官(同前)
 朝鮮總督府稅關事務官(同前)
 朝鮮總督府稅關監視官(同前)
 朝鮮總督府稅關鑑定官(同前)
 朝鮮總督府港務官(同前)
 朝鮮總督府獸醫官(四十五年第四十五號改正)
 朝鮮總督府典獄(四十二年第三百七十七號改正)
 朝鮮總督府郡守(同前)
 臺灣總督府典獄

臺灣總督府警察官及司獄官練習所舍監
 臺灣總督府醫學校助教
 臺灣總督府醫學校舍監
 臺灣總督府專賣局翻譯官
 臺灣總督府廳事務官
 臺灣總督府廳警視
 臺灣總督府編修官
 臺灣總督府翻譯官
 臺灣總督府醫院醫官(大正三年第六十四號改正)
 臺灣總督府醫院藥局長
 關東都督府警視
 關東都督府翻譯官
 關東都督府典獄
 關東都督府醫院醫員
 關東都督府醫院藥局長
 樺太廳醫院醫員

北海道廳支廳長

第二十條 別表第二表第四號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當スル諸官左ノ如シ

鐵道院參事補
 帝國圖書館司書官
 山林事務官補(大正二年第二百十四號改正)
 爲替貯金局事務官補(同前)
 遞信局事務官補(同前)
 通信事務官補

朝鮮總督府鐵道局參事補(四十五年四十五號改正)
 朝鮮總督府遞信事務官補(同前)
 朝鮮總督府醫院事務官(四十二年三百七十七號改正)
 臺灣總督府通信事務官補
 臺灣總督府醫院事務官
 關東都督府通信事務官補

第廿一條 別表第二表第四號ニ依リ其ノ俸給官等ニ相當セサル諸官左ノ如シ

專賣局參事補(大正二年第二百十四號改正)
 副司稅官(同前)
 裁判所書記長
 典獄補(大正二年第七十八號追加)
 商船學校教諭
 朝鮮總督府通譯官
 警察官署
 勤務ノ者
 朝鮮總督府濟生院主事(四十五年第四十五號改正)

朝鮮總督府鐵道局通譯官
 朝鮮總督府臨時土地調查局監査官
 朝鮮總督府醫院藥劑官
 朝鮮總督府醫院副醫官(大正五年第五十八號改正)
 朝鮮總督府港務醫官
 朝鮮總督府通譯官(同前)
 朝鮮總督府裁判所書記長(同前)

朝鮮總督府裁判所通譯官(同前)

臺灣總督府法院通譯官

第廿二條 別表第二表第五號ニ依ル諸官左ノ如シ

各廳技師

陸軍教授

海軍教授

山林技師(大正二年第二百十四號改正)

鑛務技師(大正二年第二百十四號追加)

通信技師

文部省直轄諸學校教授

東北帝國大學附屬醫學專門部、工學專門部教授

臺灣總督府法院書記長

關東都督府法院通譯官

東北帝國大學農科大學附屬大學豫科、土木

學科、水産學科教授

臨時教員養成所教授

商船學校教授

朝鮮總督府遞信技師(明治四十五年第

朝鮮總督府醫院醫官(同前)

臺灣總督府通信技師

關東都督府通信技師

第廿三條 別表第二表第一號、第二號及第五號ニ依ル職員ハ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ

至リ功績アル者ニ限リ五百圓以上ノ年功加俸ヲ給シ其ノ第二號ニ依ル職員ニ在リテハ高

等官三等ニ陞叙スルコトヲ得

第三號及第四號ニ依ル職員ハ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ三百圓

以內ノ年功加俸ヲ給シ第三號ニ依ル者ニ在リテハ高等官四等ニ、第四號ニ依ル者ニ在リテハ高等官五等ニ陞叙スルコトヲ得

第五號ニ依ル諸官及奏任技術官ハ各廳事務ノ繁閑ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトヲ得

東北帝國大學附屬醫學專門部、工學專門部教授ニシテ主事ニ補セラレタル者ニハ當分ノ內年俸三千七百圓迄ヲ給スルコトヲ得(明治四十五年第六十七號ヲ以テ本項追加)

第廿四條 在外公館職員タル高等文官ノ年俸ハ別ニ定ムルモノノ外別表第四表ニ依ル但シ高等官三等ニ叙セラレタル領事及貿易事務官ノ年俸ハ三千圓トス

第廿五條 前數條ニ依ルモノヲ除クノ外高等文官ノ年俸ハ別表第五表ニ依ル但シ別段ノ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第廿六條 左ニ掲クル諸官ニシテ一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ハ五百圓以內ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

稅關長

帝國大學各分科大學教授

府縣各部長

(大正二年第二百十四號改正)

第廿七條 千住製絨所長、朝鮮總督府各局長、朝鮮總督府營林廠長、朝鮮總督府平壤鑛業

所長及朝鮮總督府道長官ニシテ高等官三等ニ在ル者ノ年俸ハ三千圓トス

(明治四十三年第二百七十七號ヲ以テ改正)

第廿八條 領事又ハ貿易事務官ニシテ三年以上高等官四等ニ在リ功績アル者ハ高等官三等ニ陞叙スルコトヲ得

樺太廳北海道廳府縣理事官ニシテ五年以上高等官五等ニアリ功績アル者ハ特ニ高等官四等ニ陞叙スルコトヲ得(大正二年第二百十四號及同第三百一十一號ヲ以テ改正追加)

第廿九條 削除(大正二年第七十八號ヲ以テ削除ス)

第三十條 陸海軍武官ノ俸給ニ關シテハ別ニ定ムル所ニ依ル

現役武官ニシテ高等文官タル者其ノ武官トシテ受クヘキ俸給額カ文官トシテ受クヘキ俸給額ヨリ多キトキハ武官ノ俸給額ヲ其ノ所屬廳ニ於テ給スルコトヲ得

第卅一條 高等文官死亡シタルトキハ在職最終年俸三分ノ一ノ額ニ相當スル死亡賜金ヲ其ノ遺族ニ給ス(大正二年第二百一號ヲ以テ本條改正)

前項遺族ト稱スルハ配偶者、子、父母、孫、祖父母及兄弟姉妹ニシテ同一戸籍内ニ在ル者ヲ謂フ

第一項ノ死亡賜金ヲ受クヘキ遺族ノ順位ハ前項ニ掲ケタル順序ニ依リ同順位内ニ在リテハ家督相續人ハ其ノ他ノ者ニ、男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ

終身官ニ付テハ其ノ在職中死亡シタル場合ニ限リ前三項ノ規定ヲ適用ス

第卅二條 年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ支給ス

第卅三條 俸給ハ新任増俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

休職又ハ待命ヲ命セラレ年俸金額ヲ給セサル場合ハ減法ト看做シ前項ノ規定ヲ適用ス

第卅四條 廢官退官退職及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシ當月分ノ全額ヲ給ス

第卅五條 休職廢官退官ノ者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ受ケ事務ニ從事スル場合ニ於テハ其ノ間仍從前ノ年俸ヲ給ス

第卅六條 病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ超ユル者及私事ノ故障ニ依リ執務セナルコト

三十日ヲ超ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者及特旨ニ由リ賜暇休養スル者ハ此ノ限ニ在ラス

第卅七條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附 則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス

明治二十四年勅令第九十六號

明治二十四年勅令第九十八號

府縣立師範學校長官等及俸給令
 明治二十七年勅令第十八號
 明治二十九年勅令第六十一號
 技術官俸給令
 明治三十二年勅令第九十四號
 明治三十二年勅令第二百二十八號
 明治三十二年勅令第二百六十八號
 在外公館職員官等令
 陸軍所屬特別文官俸給令
 警視廳高等官俸給令
 明治三十三年勅令第二百五十九號
 帝國圖書館高等官官等俸給令
 臺灣總督府職員官等俸給令
 港務部高等官俸給令
 典獄俸給令
 北海道廳高等官俸給令

地方高等官俸給令
 統監府及理事廳高等官官等令
 關東都督府職員官等給與令
 明治四十年勅令第二十八號
 樺太廳職員官等給與令
 統監府所屬官署技師官等給與令
 統監府營林廠職員官等給與令
 明治四十年勅令第一百四號
 統監府特許局職員官等給與令
 關東都督府中學校職員官等俸給令
 旅順工科學堂高等官官等俸給令
 統監府司法廳職員官等給與令
 統監府裁判所書記長、統監府裁判所通譯官、統監府裁判所書記、統監府裁判所通譯生
 及統監府監獄職員官等給與令
 統監府警視警部官等給與令
 本令施行ノ際現ニ左表上欄ノ俸給額ヲ受クル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ官等ニ

拘ラス各其ノ相當下欄ノ俸給額又ハ之ニ相當スル級俸ヲ給スルモノトス

現行俸給	改正俸給
五、〇〇〇	六、〇〇〇
四、五〇〇	五、五〇〇
四、〇〇〇	五、〇〇〇
三、六〇〇	四、五〇〇
三、五〇〇	四、二〇〇
三、三〇〇	四、〇〇〇
三、〇〇〇	三、七〇〇
二、八〇〇	三、五〇〇
二、六〇〇	三、二〇〇
二、五〇〇	三、〇〇〇
二、四〇〇	二、七〇〇
二、二〇〇	二、五〇〇
二、〇〇〇	二、二〇〇
一、八〇〇	二、〇〇〇
一、六〇〇	一、八〇〇
一、五〇〇	一、七〇〇
一、四〇〇	一、六〇〇
一、三〇〇	一、五〇〇

二、〇〇〇	一、五〇〇
一、〇〇〇	一、三〇〇
一、〇〇〇	一、二〇〇
一、〇〇〇	一、〇〇〇
九〇〇	一、〇〇〇
八〇〇	一、〇〇〇
七〇〇	八〇〇
六〇〇	七五〇
五〇〇	七〇〇
四五〇	六〇〇
四〇〇	五五〇
三〇〇	五〇〇
三〇〇	四〇〇

年功加俸、加勤加俸、加俸、在勤俸、職務俸ハ前項上欄ノ額ニ算入セス
 現ニ各種ノ加俸ヲ受クル者本令ニ該當スル場合ニ於テ別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ
 其ノ加俸ノ額ハ従前ノ額ニ依ル
 舊俸給令ニ依リ一級俸又ハ各官ノ最高俸ヲ受ケタル年數ハ第三十三條第一項第二項、第二
 十六條及第二十八條第二項ノ年數中ニ通算ス但シ舊俸給令ノ一級俸又ハ各官ノ最高俸カ第
 三項ノ規定ニ依リ改正二級俸以下ニ對當スル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス
 舊俸給令ニ依ル各官ノ最高俸以下ノ俸給カ第三項ノ規定ニ依リ改正一級俸ニ對當スル場合
 ニ於テハ第二十三條第一項第二項ノ年數ハ在職者カ其ノ官ノ最高官等ニ達シタルトキヨリ

起算ス

舊俸給令ニ依ル各官ノ最高俸以下ノ俸給カ第三項ノ規定ニ依リ改正一級俸以上ノ額ニ對當スル場合亦前項ニ同シ但シ本俸ト年功加俸トノ總額ハ改正一級俸ト第二十三條第一項第二項ノ規定ニ依ル年功加俸トノ總額ヲ超ユルコトヲ得ス

本令ニ依リ従前ノ官等ニ變更ヲ加ヘタル場合ニ於テ現ニ本令ニ存セサル官等ニ在ル者ハ本令施行ノ際ノ在官者ニ限リ其ノ官等ヲ存スルモノトス

現ニ最低額以下ノ俸給ヲ受クル者、休職中ノ者及本俸全額ヲ給セラレサル待命中ノ者ノ俸給額ハ従前ノ額ニ依ル

本令公布前ニ公布セラレタル勅令ニ於テ高等官官等俸給令第七條又ハ第八條ヲ援用シタルモノハ本令第四條又ハ第五條ヲ援用シタルモノト看做ス

附 則(大正二年勅令第七十八號附則)

本令施行ノ際現ニ典獄ノ職ニ在ル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ現ニ受ケル俸給額ニ相當スル級俸ヲ受クルモノトス但シ加俸ヲ受タル者ニ付テハ當分ノ内其ノ本俸ト加俸トノ總額ヲ以テ俸給額トス

附 則(大正二年勅令第二百十四號附則)

本令施行ノ際第八條ニ掲ケタル諸官ニ在ル者ハ現ニ受クル俸給額ニ相當スル給俸ヲ受クル

モノトス

本令施行ノ際稅務監督官補又ハ稅務官ニシテ現ニ二級俸ヲ受クル者稅務監督局事務官又ハ司稅官ニ任セラレタルトキハ其ノ俸給額ハ従前ノ額ニ依ル

本令施行ノ際道廳府縣事務官補ニシテ道廳府縣理事官ニ任セラレタル者又ハ廳府縣警視ノ官ニ在ル者ノ俸給額ハ其ノ従前ノ額ニ依ル

附 則(大正二年勅令第二百十一號附則)

樺太廳支廳長ニシテ本令施行ノ際樺太廳理事官ニ任セラルル者ノ官等俸給ニ付テハ其ノ前官等俸給ニ依ルコトヲ得

(別表略ス)

●判任官俸給令

勅令第三百三十五號 明治四十三年三月二十六日

判任官俸給令

第一條 判任官ノ月俸ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表ニ依ル

第二條 陸海軍准士官及下士ハ判任トシ其ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三條 判任文官ハ每級在職一年以上ニ至ラサレハ増給スルコトヲ得ス但シ六級俸以下ノ者ハ此ノ限ニ在ラス

第四條 判任文官ニシテ一級俸ヲ受ケ五年ヲ超エ事務練熟優等ナル者ハ特ニ百二十圓迄ヲ給スルコトヲ得

第五條 判任文官ノ俸給ハ月俸四十圓未滿ノ者ニ限リ級俸ニ拘ラス適宜ノ金額ヲ定メ之ヲ支給スルコトヲ得但シ各所定ノ最低俸給額ヲ下ルコトヲ得ス

第六條 各廳技手ハ判任トシ各廳事務ノ繁閑ニ依リ別表最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第七條 警視廳、北海道廳、府縣及監獄判任官並稅務監督局屬、稅務署屬、專賣局書記及朝鮮總督府航路標識看守ニハ別表最低額以下八圓迄ノ月俸ヲ給スルコトヲ得但シ港吏、港務醫官補、港務獸醫官補、港務調劑手及府縣通譯ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 稅關監吏、朝鮮總督府稅關監吏、臺灣總督府稅關監吏及臺灣總督府稅務吏ノ月俸

ハ八十二圓以上四十圓以下トス(明治四十二年第三百七十八號ヲ以テ改正)

第九條 警部補、臺浸總督府警部補、關東都督府警部補及樺太廳警部補ノ月俸ハ十五圓以上三十圓以下トス

第十條 森林主事ノ月俸ハ十二圓以上三十圓以下トス(大正三年第卅八號ヲ以テ改正)

第十一條 左ニ掲クル者ノ月俸ハ十圓以上三十圓以下トス
爲替貯金局書記補

遞信局書記補

通信書記補

朝鮮總督府遞信書記補

朝鮮總督府臨時土地調查局書記補

朝鮮總督府臨時土地調查局技手補

臺灣總督府通信手

關東都督府通信書記補

第十二條 前四條ノ判任文官最上級俸ヲ受ケ三年ヲ超エ事務練熟優等ナル者ハ特ニ月額五

圓以內ヲ加給スルコトヲ得

第十三條 判任官死亡シタルトキハ在職最終月俸三月分ノ額ニ相當スル死亡賜金ヲ其ノ遺

族ニ給ス(大正二年第三百二號ヲ以テ本條改正)

前項遺族ト稱スルハ配偶者、子、父母、孫、祖父母及兄弟姉妹ニシテ同一戶籍內ニ在ル

者ヲ謂フ

第一項ノ死亡賜金ヲ受クヘキ遺族ノ順位ハ前項ニ掲ケタル順序ニ依リ同順位內ニ在リテ

ハ家督相續人ハ其ノ他ノ者ニ、男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ

第十四條 月俸ハ每月下旬之ヲ支給ス

前項ノ外俸給ノ支給ニ關シテハ高等官官等俸給令ノ例ニ依ル第十五條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附 則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス

- 明治二十六年勅令第百八十二號
 - 明治三十一年勅令第百十五號
 - 明治三十二年勅令第百六十四號
 - 明治三十二年勅令第百五十七號
 - 明治三十二年勅令第百七十二號
 - 臺灣總督府警部補俸給令
 - 明治三十六年勅令第百六十三號
 - 明治三十九年勅令第百十六號
 - 明治三十九年勅令第百三十號
 - 明治四十年勅令第百六十二號
- 本令施行ノ際現ニ左表上欄ノ級俸又ハ俸給額ヲ受ケタル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキ

ハ各其ノ相當下欄ノ級俸又ハ俸給額ヲ給スルモノトス

現 行 俸 給	改 正 俸 給
一 級 俸	一 級 俸
二 級 俸	二 級 俸
三 級 俸	三 級 俸
四 級 俸	四 級 俸
五 級 俸	五 級 俸
六 級 俸 又ハ 三十五圓	四 十 三 圓 俸
三十圓 以下	現俸ニ七圓ヲ加ヘタル額
二十七圓 以下	現俸ニ六圓ヲ加ヘタル額
二十三圓 以下	現俸ニ五圓ヲ加ヘタル額
十九圓 以下	現俸ニ四圓ヲ加ヘタル額
十五圓 以下	現俸ニ三圓ヲ加ヘタル額
十一圓 以下 六圓 以上	現俸ニ一圓ヲ加ヘタル額

在勤加俸、在勤俸ハ前項上欄ノ額ニ算入セス
舊俸給令ニ依リ一級俸ヲ受ケタル年數ハ第四條ノ年數ニ通算ス

本令施行ノ際舊俸給令ニ依リ特別俸ヲ受タル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ月額百圓ヲ受クルモノトス
 舊俸給令ニ依リ五級俸以上ノ各級ニ於テ經過シタル年數ハ第三條ノ年數ニ通算ス
 本令施行ノ際舊俸給令ノ五級俸以上ヲ受タル者第三項ノ對當級俸以下ノ級俸ヲ給セラレタル場合ニ於テモ亦前項ノ規定ヲ準用ス
 現ニ最低以下ノ俸給ヲ受クル各廳技手及休職中ノ者ノ俸給額ハ從前ノ額ニ依ル
 地方稅ノ支辨ニ屬スル判任文官ノ俸給ハ從前ノ例ニ依ル但シ臺灣總督府小學校教諭及臺灣總督府公學校教諭ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

(別表)

級	一	二	三	四	五	六
俸	九	七	六	五	五	四
月	十	十	十	十	十	十
額	五	五	五	五	十	五
	圓	圓	圓	圓	圓	圓

級	七	八	九	十
俸	四	三	三	二
月	十	十	十	十
額	五	五	十	五
	圓	圓	圓	圓

●文官俸給支給細則

大藏省令第十一號 明治二十五年十二月二十三日

文官俸給支給細則左ノ通り相定メ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

但明治二十三年當省令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官俸給支給細則

第一條 高等文官及判任文官ノ俸給ハ各廳左ノ日割定日ニ於テ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ順延トス

每月二十一日

外務省及其所管經費ニ屬スル官廳

內務省及其所管經費ニ屬スル官廳

大藏省及其所管經費ニ屬スル官廳

每月二十二日

陸軍省及其所管經費ニ屬スル官廳
海軍省及其所管經費ニ屬スル官廳
司法省及其所管經費ニ屬スル官廳
每月二十三日

文部省及其所管經費ニ屬スル官廳
農商務省及其所管經費ニ屬スル官廳
逓信省及其所管經費ニ屬スル官廳

「拓殖務省及其所管經費ニ屬スル官廳」

第二條 非職廢官退職及死亡ノ時ハ當月分ノ俸給全額ヲ其際支給スルモノトス
高等官官等俸給令第十七條ニ依リ殘務調理ヲ命セラレタル者其調理翌月以降ニ涉リ全月分ヲ支給スルモノハ第一條ノ支給定日ニ依ル但最後ノ月ハ日割ヲ以テ調理結了ノ日迄ヲ其際支給ス

第三條 轉住者ノ俸給ハ其發令ノ當日迄ヲ甲廳ノ負擔トシ翌日以降ノ分ハ乙廳ニ於テ之ヲ支給スルモノトス

第四條 他廳へ轉任シタルモノハ第一條ノ支給日ニ拘ラス日割計算ヲ以テ發令ノ當日迄ニ

係ル俸給ヲ其際支給ス

第五條 他廳へ轉任ノ際俸給過渡アルトキハ前任廳ニ於テ其際之ヲ追徴スヘシ

第六條 俸給支給定日後他廳ヨリ轉任シ來リタルトキハ後任廳ニ於テ其月ノ殘日數ニ對スル俸給ヲ其際支給スルモノトス

第七條 高等官官等俸給令「第十八條」ニ依リ減給ノ者非職廢官退職及ヒ死亡ノ時ハ其減給ニ係ル當月分ノ全額ヲ支給スルモノトス

第八條 傷痍忌引若クハ特旨賜暇ノ場合ハ病氣若クハ私事故障ト連續スルモ減俸トナルヘキ關勤日數中ニ算入セス又病氣ト私事故障ト連續スル場合ニ於テハ之ヲ通算セス

第九條 俸給ヲ支給スルニ當リ計算上錢位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨ルモノトス
日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ルヘシ(明治三十八年第二十號改正)

●月俸三十圓未滿ノ判任官待遇者ノ俸給ノ件

勅令第二百四十四號 明治四十年六月二十五日

朕月俸三十圓未滿ノ判任官待遇者ノ俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判任官俸給令第五條ノ規定ヲ受クル者ノ俸給ニ之ヲ準用ス(明治四十三年第百卅六號改正)

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●判事檢事官等俸給令

勅令第五百十三號 明治三十二年四月十八日

判事檢事官等俸給令

第一條 削除(明治四十二年第五百二十二號ヲ以テ削除)

第二條 判事檢事ノ各職ニ付人員ヲ定ムルコト左ノ如シ (大正二年第七十一號及同三年第七十四號改正)

大審院長ハ一人 大審院部長ハ四人 大審院判事ハ二十一人ヲ以テ定員トス

檢事總長ハ一人 大審院檢事ハ七人ヲ以テ定員トス

控訴院長ハ七人 控訴院部長ハ十六人 控訴院判事ハ五十一人ヲ以テ定員トス

檢事長ハ七人 控訴院檢事ハ二十二二人ヲ以テ定員トス (大正三年第七十四號改正)

地方裁判所長ハ五十人 地方裁判所部長ハ六十人 地方裁判所判事及區裁判所判事ハ通シテ

六百八十八人ヲ以テ定員トス (同前)

檢事正ハ五十人 地方裁判所檢事及區裁判所檢事ハ通シテ二百九十九人ヲ以テ定員トス

第三條 判事檢事ノ各職ニ付其ノ俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院

長 親任 俸(大正三年第七十四號改正)

部長 勅任三級俸

判事

奏任三級俸乃至勅任四級俸

大審院檢事局

檢事總長 勅任一級俸(大正三年第七十四號改正)

檢事 奏任三級俸乃至勅任三級俸

控訴院

長 東京 勅任二級俸

部長 其ノ他勅任三級俸

判事 奏任四級俸乃至奏任一級俸

奏任七級俸乃至奏任四級俸

控訴院檢事局

檢事長 東京 勅任三級俸又ハ勅任二級俸

其ノ他勅任四級俸又ハ勅任三級俸

檢事 奏任七級俸乃至奏任一級俸

地方裁判所

長 東京 奏任一級俸乃至勅任四級俸

大阪 奏任一級俸乃至勅任四級俸 (大正二年第百七十一號改正)

京都 奏任一級俸乃至勅任四級俸 (大正二年第百七十一號改正)

名古屋 廣島 熊本 福岡 札幌 樺太 奏任三級俸乃至勅任六級俸 (大正二年第百七十一號改正)

其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸
部長 奏任七級俸乃至奏任三級俸

判事 豫審判事奏任十級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至六級俸

地方裁判所檢事局

檢事正 東京 奏任一級俸乃至勅任四級俸
大阪 奏任一級俸乃至勅任四級俸

京都 奏任一級俸乃至勅任四級俸
其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸
其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸
奏任十級俸乃至奏任三級俸

區裁判所

判事 司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ監督判事奏任八級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至奏任五級俸(大正二年第七十一號改正)

區裁判所檢事局

檢事 司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ監督檢事奏任八級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至奏任五級俸(大正二年第七十一號改正)

東京及大阪控訴院ノ部長及檢事ハ各一人ヲ限リ初任ト爲シ六級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪地方裁判所ノ部長及檢事ニハ各一人ヲ限リ奏任二級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪區裁判所ノ豫審判事ニハ各一人ヲ限リ奏任三級俸ヲ給スルコトヲ得
東京及大阪區裁判所ノ監督判事及上級檢事ニハ奏任二級俸以下ヲ給スルコトヲ得

勅任六級俸ヲ受クヘキ勅任地方裁判所長及檢事正ニシテ其ノ職ノ最上俸級ヲ受ケ五年ヲ
超エ功績アル者ハ四級俸迄ヲ給スルコトヲ得

區裁判所監督判事及上級檢事ニシテ其ノ職ノ最上俸級ヲ受ケ五年ヲ超エ功績アル者ハ各
一級ヲ進ムルコトヲ得(明治卅八年第百十七號四十年第七十九號四十二年第九十號四十
三年第百五十二號大正二年第百七十一號及三年第七十四號改正)

第四條 削除(同前)

第五條第六條 削除(明治卅八年第百十七號ヲ以テ削除ス)
第七條 豫備判事及豫備檢事ニハ七百圓以内ノ年俸ヲ給ス(明治卅八年第百十七號及四
十三年第百五十二號改正)

第八條 司法官試補ハ奏任ノ待遇トス(明治卅五年第九十三號改正)
司法官試補ニハ六百圓以内ノ年俸ヲ給スルコトヲ得(明治四十四年第三百五十二號改正)

第九條 判事檢事各職ノ進級ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フ
第十條 判事檢事ノ裁判所内ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ
俸給同シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附 則

第十一條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セサル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セラ
ルモノトス

第十二條 明治廿七年^{二月十日}勅令第十七號判事檢事官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

附 則(明治四十二年第五百五十二號附則)

太令中第二條改正規定ハ明治四十三年三月三十一日ヨリ其ノ他ハ明治四十三年四月一日ヨ
リ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ第四條ノ規定ニ依リ加俸ヲ受クル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ
其ノ加俸ノ額ハ從前ノ額ニ依ル

第四條ニ掲ケタル判事又ハ檢事其ノ各職ニ付最上級俸ヲ受ケタル年數ハ第三條第七項ノ年
數ニ通算ス

判事檢事ノ各職ニ付定メタル俸給ノ最下限ハ當分ノ内其ノ規定ニ依ラサルコトヲ得但シ高
等官官等俸給令所定ノ最低俸給額ヲ下ルコトヲ得ス

附 則(大正二年六月第七十一號附則)

本令施行ノ際現ニ勅任五級俸ヲ受クル者ハ勅任六級俸ヲ受クルモノトス
別表(明治四十二年第五百五十二號ヲ以テ削ル)

●陸海軍所屬待遇官ニ俸給令

令第五百五十號 明治四十三年三月二十八日

陸海軍所屬待遇官吏俸給令

第一條 理事試補又ハ主理試補ニシテ軍法會議ノ構成員ヲ命セラレタル者ハ六百圓以内ノ
年俸ヲ給ス

第二條 陸軍監獄看守、陸軍警守、海軍監獄看守及海軍警査ノ月俸ハ十二圓以上二十五圓
以下トス

附 則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セラレサル者ハ現ニ受クル俸給額ヲ受クルモノトス

●府縣高等官加俸ノ件

勅令第二百十八號 大正二年六月十三日

府縣高等官ハ左表ノ加俸ヲ受ク

東京府、京都府、大阪府、神奈 川縣、兵庫縣	知事	內務部長	警察部長	港務部長	港務官
長崎縣、新潟縣、愛知縣、宮城 縣、廣島縣、福岡縣、熊本縣	四〇〇	三〇〇	二〇〇	二〇〇	一〇〇
	六〇〇 ^円	五〇〇 ^円	四〇〇 ^円	三〇〇 ^円	二〇〇 ^円

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●文部省直轄諸學校教官俸給支給ノ件

勅令第百五十四號 明治四十三年三月二十八日

第一條 文部省直轄諸學校教官ノ俸給ハ其ノ授業ノ時間又ハ學科ノ難易輕重ニ依リ最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第二條 文部省直轄諸學校教官ニシテ一校又ハ數校ノ教官ヲ兼任スル者ニハ本官及兼官ニ於ケル授業ノ時間又ハ學科ノ難易輕重ニ依リ其ノ俸給額ヲ分割シテ各學校ヨリ給スルコトヲ得

第三條 文部省直轄諸學校ノ囑託講師ニハ教官俸給額ノ中ヨリ相當ノ手當ヲ給スルヲ得
第四條 前三條ノ規定ハ東北帝國大學附屬醫學專門部、工學專門部、東北帝國大學農科大學附屬大學豫科、土木工學科、林學科、水産學科又ハ臨時教員養成所ノ教授又ハ講師ニ之ヲ準用ス(明治四十五年第六十八號改正)

附 則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

文部省直轄諸學校高等官官等俸給令、明治三十五年勅令第百一號及明治四十年勅令第二百

三十八號ハ之ヲ廢止ス

●公立學校職員俸給令

勅令第百六十六號 明治三十六年三月二十七日

公立學校職員俸給令

第一條 本令ニ於テ職員ト稱スルハ公立ノ專門學校、師範學校、中學校、高等女學校及實業學校ノ職員ニシテ奏任文官又ハ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ヲ謂フ

第二條 奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル專門學校及實業專門學校ノ職員ノ年俸ハ第一號表ニ依ル

第三條 奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル師範學校、中學校、高等女學校及實業專門學校ノ職員ノ年俸ハ第二號表ニ依ル

第四條 判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル職員ノ月俸ハ第三號表ニ依ル

第五條 官吏ニシテ在官ノ儘職員ニ任セラレタル者ノ俸給ハ等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

第六條 一級俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ特ニ功勞アル職員ニハ本俸三分ノ一以下ノ加俸ヲ給スルコトヲ得

第七條 教員ニシテ含監、主事ヲ兼ヌル者ニハ相當ノ加俸ヲ給スルコトヲ得

第八條 教員ノ俸給ハ其ノ教授時數ニ應シ等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

第九條 二校以上ノ職員ヲ兼スル者ニハ其ノ俸給ヲ分割シテ關係學校ノ經費中ヨリ之ヲ支給スルコトヲ得

第十條 陸軍給與令又ハ海軍軍人俸給令ニ依リ俸給ヲ受クル職員ニハ其ノ間俸給ヲ支給セズ但シ其ノ俸給額職員ノ俸給額ヨリ寡少ナルトキハ其ノ不足額ヲ給スルコトヲ得

第十一條 俸給ハ每級在職一年以上ニ至ラサレハ増給スルコトヲ得ス但シ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル職員ニシテ年俸五百圓以下ノ者及判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル職員ニシテ月俸三十五圓以下ノ者ハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 名稱又ハ待遇ノ異ナリタル職員若ハ種類ノ異ナリタル學校ノ職員ニ轉住スル場合ニ於テ支給スル俸給ハ前職ノ俸給額ニ相當スル俸給以下トス若シ相當額ナキトキハ其ノ最モ近キ上級ノ俸給以下トス但シ前職等級在職一年ヲ踰エタル者ニ在リテハ一級ヲ進ムルコトヲ得

第十三條 退職後一年以内ニ再任セラルル場合ニ於テハ其ノ俸給ハ前職ノ俸給以下トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ前職等級在職一年ヲ踰エタル者ハ前職ノ等級ニ一級ヲ進ムルコトヲ得

前二項ノ規定ハ年俸六百圓以下又ハ月俸四十圓以下ノ俸給ヲ支給スル場合ニハ之ヲ適用セス

退職後一年以内ニ名稱又ハ學校ノ異ナリタル職員若ハ種類ノ異ナリタル學校ノ職員ニ任セラルル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ準用ス

第十四條 前三條ノ俸給額ニハ加俸ヲ算入セス

第十五條 休職者ニハ俸給ヲ支給セス但シ戰時若ハ事變ニ際シ召集セラレタルカ爲休職トナリタル場合ニハ俸給ノ一部、其ノ他特別ノ事情アル場合ニハ其ノ三分ノ一以下ヲ給スルコトヲ得(明治二十七年第五十三號改正)

第十六條 特別ノ事情ニ依リ第十一條乃至第十三條ノ規定ニ依リ難キ場合ニ於テハ地方長官ハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第十七條 高等官官等俸給令第十三條乃至第十八條ハ奏任文官ト同一ノ俸給ヲ受クル職員ニ關シ判任官俸給令第五條及第六條ハ判任文官ト同一ノ俸給ヲ受クル職員ニ關シ之ヲ準用ス

第十八條 俸給支給ニ關スル細則ハ地方長官之ヲ定ム

第十九條 本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 第廿條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ受ケサル者ハ現ニ受クル俸給額ニ相當スル等級俸ヲ受ク
 現ニ本令ニ規定スル俸給額ニ相當セラル俸給ヲ受クル者ハ當分ノ内現在ノ儘支給スルコ
 トヲ得但其ノ者ノ取扱ニ關シテハ其ノ俸給ニ最モ近キ上級ノ俸給ヲ受クルモノト看做ス

第一號表

舍 監	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級	十三級
	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	

第二號表

學校長	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級	十三級
	二千圓	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千四百圓	千三百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	

第三號表

教諭ニシテ十三級俸又ハ十四級俸ヲ給スル者ハ女子ニシテ教諭タル者ニ限ル

教諭	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千四百圓	千三百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓		
專門學校助教諭	七十七圓	七十六圓	七十六圓	七十六圓	七十五圓	七十五圓	七十四圓	七十四圓	七十三圓	七十三圓	七十二圓	七十二圓	七十五圓
專門學校書記	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓
師範學校助教諭	五十七圓	五十七圓	五十六圓	五十六圓	五十五圓	五十五圓	五十四圓	五十四圓	五十三圓	五十三圓	五十二圓	五十二圓	五十五圓
師範學校訓導	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十三圓	五十三圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓
師範學校書記	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓
中學校校長	七十七圓	七十六圓	七十六圓	七十六圓	七十五圓	七十五圓	七十四圓	七十四圓	七十三圓	七十三圓	七十二圓	七十二圓	七十五圓
中學校教諭	五十七圓	五十七圓	五十六圓	五十六圓	五十五圓	五十五圓	五十四圓	五十四圓	五十三圓	五十三圓	五十二圓	五十二圓	五十五圓
中學校助教諭	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十三圓	五十三圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓
高等女學校舍監	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓	五圓

學校書記	實業學校長	學校教諭	助教諭	訓導	舍監	專業	專除	門
五十四圓	五十七圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓
五十四圓	五十六圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓
五十三圓	五十六圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓
五十三圓	五十五圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓	五十三圓
五十二圓	五十四圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓
五十二圓	五十四圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓
五十二圓	五十三圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓
五十七圓	五十三圓	五十七圓	五十七圓	五十七圓	五十七圓	五十七圓	五十七圓	五十七圓
五十四圓	五十三圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓	五十四圓
五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓	五十二圓

學校長又ハ教諭ニシテ十一級俸ヲ給スル者ハ女子ニシテ教諭タル者ニ限ル
 保母ノ俸給ハ最下級以下十圓迄ヲ給スルコトヲ得(明治四十二年第三百三十三號追加)

●市町村立小學校教員俸給ニ關スル件
 勅令第二號 明治三十年一月四日

市町村立小學校教員俸給ニ關スル件

第一條 市町村町村學校組合及其ノ區ハ第三條ノ月俸平均額ニ基キ小學校ノ教員定數ニ應
 スル金額ヲ支出スルノ義務アリ但シ市町村町村學校組合及其ノ區ハ土地ノ情況ニ依リ本
 項ノ義務額ヲ超エタル金額ヲ支出スルコトヲ得

第二條 地方長官ハ前條ノ金額以內ニ於テ各本科正教員ノ俸給額ヲ定ムヘシ
 地方長官ニ於テ必要ト認ムルトキハ市町村町村學校組合及其ノ區ノ同意ヲ得テ前條ノ義
 務額ヲ超エ各本科正教員ノ俸給額ヲ定ムルコトヲ得但シ區ニ區會若クハ區總會ノ設ナキ
 トキハ其ノ經費ヲ議決スル市町村又ハ町村學校組合ノ同意ヲ得ヘシ

義務額ヲ超エテ俸給ヲ支出スル場合ニ於テハ地方長官ノ許可ヲ受クルニアラサレハ其ノ
 俸給額ヲ減スルコトヲ得ス

第三條 市町村立小學校ノ本科正教員月俸ノ平均額ハ人口十萬以上ノ市ニ在リテハ二十四
 圓其ノ他ノ市及市ニ準スヘキ町村ニ在リテハ二十圓其ノ他ノ町村ニ在リテハ十六圓トス
 前項市ニ準スヘキ町村ハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ定ム(四十年第二
 百十六號改正)

第四條 本科正教員ニ代リ一時教授スル准教員ノ俸給額ニ關シテハ第二條ヲ適用ス
 第五條 專科正教員及補助教授スル教員ノ俸給額ハ地方長官ニ於テ市參事會町村長町村學
 校組合長ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムヘシ但シ本條ニ依リ一旦定マリタル俸給額以內ニ於テ任
 用スル教員ノ俸給額ニ關シテハ市參事會町村長町村學校組合長ノ意見ヲ聞クノ限ニアラ
 ス(明治四十年第二百十六號改正)

第六條 本科正教員及准教員ノ月俸ハ左表ノ金額ヲ下スコトヲ得ス(同前)

本科正教員 准教員

尋常小學校	女	男	女	男
	八	十	十	十
	圓	圓	圓	圓
	六	七	七	九
	圓	圓	圓	圓

第七條 本令施行ノ際既ニ義務額ヲ超エテ教員俸給ヲ支出スル場合ニ於テハ第二條ノ手續ヲ經タルモノト同視ス

第八條 本令中町村町村學校組合及其ノ區ニ關スル規定ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學校設置區域ニ適用シ町村長ニ關スル規定ハ島司郡區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者ニ適用ス

本令中市及市參事會ニ關スル規定ニシテ特ニ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ適用スルノ必要アルトキハ文部大臣之ヲ定ム此ノ場合ニ於テ市參事會ノ職務ハ區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フ

附 則

第九條 本令ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

第十條 明治廿三年勅令第二百十五號小學校令第六十條第二項ハ本令施行ノ日ヨリ削除ス

●市町村立小學校教員加俸令

勅令第三百三十三號 明治三十三年三月三十一日

市町村立小學校教員加俸令

第一條 府縣ハ市町村立小學校教育費國庫補助法第三條第二項ノ下附金ヲ以テ市町村立小學校教員加俸資金トナシ特別會計ヲ設置スヘシ(大正二年第二百八十七號改正)

第二條 市町村立小學校教員加俸資金ヨリ生スル收入ハ之ヲ資金ニ編入スヘシ

第三條 小學校教員ニシテ五年以上同一府縣内ノ市町村立小學校ニ勤續シ地方長官ニ於テ成績佳良ナリト認メタル者ニハ年功加俸ヲ給ス

年功加俸ハ本科正教員ニ在リテハ年額二十四圓乃至六十圓トシ專科正教員及准教員ニ在リテハ年額十二圓乃至二十四圓トス但シ年功加俸ヲ受ケタル後勤續五年ヲ加フル毎ニ本科正教員ニ在リテハ年額十八圓乃至三十六圓專科正教員及准教員ニ在リテハ年額十二圓乃至十八圓ヲ加フルコトヲ得(明治四十四年第四十九號改正)

第四條 兵役ニ服スル爲其ノ職ヲ去リタル者兵役ヲ終リタル後九十日以内更ニ就職シタルトキハ前後ノ在職年數ヲ勤續年數ニ通算ス學校ノ廢止若ハ學校編製ノ變更ニ因リ退職シタル者六十日以内更ニ就職シタルトキ亦同シ

第五條 道廳府縣視學、島廳郡視學及師範學校訓導ニ在職シタル年數ハ之ヲ勤績年數ニ通算ス(大正二年第二百八十七號改正)

第六條 年功加俸ヲ受クル者懲戒處分ヲ受ケタルトキハ年功加俸ノ一部又ハ全部ノ支給ヲ停止スルコトヲ得

年功加俸ヲ受クル者ニシテ地方官ニ於テ成績佳良ナラスト認メタルトキハ年功加俸ノ支給ヲ止ム

第七條 市町村立尋常小學校ノ本料正教員ニシテ單級學校ニ勤務スル者ニハ年額六十圓以下ノ特別加俸ヲ給ス(明治四十四年第四十九號改正)

市町村立尋常小學校ノ本料正教員ニシテ多級學校ノ一學年ヨリ四學年、五學年又ハ六學年ニ至ル兒童ヲ以テ編制シタル學級ヲ擔任スル者ニハ年額四十八圓以下ノ特別加俸ヲ給スルコトヲ得(同前)

僻地ノ市町村立尋常小學校ニ勤務スル本料正教員ニハ年額三十六圓以下專科正教員及准教員ニハ年額十八圓以下ノ特別加俸ヲ給スルコトヲ得但シ前二項ニ依リ特別加俸ヲ受クル者ハ此ノ限ニ在ラス(大正二年第二百八十七號改正)

同一府縣内ニ於テ僻地ノ市町村立尋常小學校ニ五年以上勤績スル者ニハ前三項ニ依ル特別加俸ノ外本料正教員ニ在リテハ年額三十六圓以下專科正教員及准教員ニ在リテハ年額

十八圓以下ヲ加給ス(同前)

第八條 小學校令ヲ施行セサル地方ニ於ケル訓導及訓導ノ資格アル學校長ハ本令ニ於テハ本料正教員ト看做ス

第九條 市町村立小學校教員加俸給與ニ關スル細則ハ地方長官之ヲ定ム(大正二年第二百八十七號改正)

第十條 本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十一條 市町村立小學校教育費國庫補助法第六條第一項ニ依リ支給ヲ受クル者ニシテ本令第三項ニ依リ年功加俸ヲ受ケ其ノ額同法ニ依リ受クル額ヨリ寡キトキハ同一學校ニ勤績スル間其ノ差額ヲ加給ス

● 巡查俸給支給規則

內務省令第十三號 大正元年十一月十六日

巡查俸給支給規則左ノ通之ヲ定ム

巡查俸給支給規則

第一條 巡查ノ月俸ハ毎月末日ヲ以テ支給ノ定日トス但シ廳府縣長官土地ノ狀況ニ依リ必要アリト認ムルトキハ毎月二十五日以後ニ於テ適宜支給日ヲ定ムルニトヲ得
前項支給ノ定日休日ニ相當スルトキハ順次繰上トス

第二條 月俸支給方ハ別ニ規定スルモノノ外文官俸給支給細則ノ例ニ依ル

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●陸軍戰時給與規則

勅令第三百三十三號 明治二十七年八月一日

陸軍戰時給與規則

第一條 戰時若クハ事變ニ際シ各部、各隊及軍人軍屬ノ給與ハ本規則ニ依ル但本規則ニ明文ナキモノハ平時給與ノ規程ヲ適用ス

第二條 戰時編成ノ部隊及特ニ設置シタル部隊ノ給與ハ第六條第一項第二項及第四項ノ期間ヲ除クノ外必要ニ應シ明治二十三年法律第二十七號ニ依リ部隊長ニ其ノ經理ヲ委任ス其ノ部隊及給與ノ種類ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第三條 本規則ニ於テ俸給ト稱スルハ陸軍給與令第一表ノ俸給隊長加給ニ上級ノ職務心得俸ヲ除ク加算シタルモノ、給料ト稱スルハ同令第三表ノ給料ニ加俸北海道臺灣島及澎湖島在勤加俸除クヲ加算シタルモノヲ云フ(明治四十二年第四百六十六號及大正二年第二百三十二號改正)

第四條 動員シ又ハ臨時ニ編成シタル聯隊又ハ獨立隊ノ隊長ノ職ニ在ル佐官ニハ陸軍給與令第一表ノ隊長加給俸ヲ給セス(大正二年第二百三十二號改正)

隊長加給俸ヲ受クル者第六條ノ増給ヲ受クルトキハ増給起算ノ月ノ翌月ヨリ増給停止ノ月ノ前月マテ其ノ支給ヲ停止ス(同前)

第五條 見習士官、見習主計、見習醫官、見習藥劑官、見習獸醫官ニシテ士官ノ勤務ニ服スル者ノ給料ハ月額十八圓トス

第六條 戰地ニ出發ノ者ハ其ノ出發ノ日ヨリ歸著ノ日又ハ給與停止ノ前日マテ准士官以上軍屬ニハ俸給五分ノ二、下士以下ニハ給料四分ノ二ヲ増給ス但シ内地途中ニ在ル者ニ在リテハ其ノ増給ヲ半減スルコトヲ得(明治二十八年第五十四號改正)

戰地ニ在ル者ハ戰地トナリタル日ヨリ給與停止ノ前日マテ前項ニ依ル(明治卅三年第二(百九十五號改正)出戰又ハ戰備ノ姿勢ヲ完成シタル部隊ニ屬スル者、要塞ノ警急配備ニ就キタル者及對敵ノ目的ヲ以テ派遣セラレタル者ハ其ノ完成ノ日、配備ニ就キタル日又ハ派遣ノ日ヨリ戰地ニ出發ノ前日、戰地トナリタル日ノ前日、配備ヲ解キタル日、歸著ノ日又ハ給與停止ノ前日迄第一項ノ區分ニ依リ俸給ハ五分ノ一、給料ハ四分ノ一ヲ増給ス

臨戰合圍地境ニ出發ノ者ハ其ノ出發ノ日ヨリ歸著ノ日又ハ給與停止ノ前日マテ、臨戰合圍地境ニ在ル者ハ戒嚴布告若ハ宣告ノ日ヨリ戰地トナリタル日ノ前日又ハ戒嚴解除ノ日マテ前項ニ依ル(明治卅七年第一百一號ヲ以テ第三項改正)

臺灣島及澎湖島駐劄陸軍部隊給與規則ニ依リ在勤加俸ヲ受クル者又ハ朝鮮滿洲駐劄陸軍

部隊給與令若ハ清國駐劄陸軍部隊給與令ニ依リ増給ヲ受クル者前四項ノ増給ヲ受クヘキ
場合ニ於テハ前四項ノ増給トシテ其ノ多額ノモノニ付之ヲ給ス(大正三年第二
百三號追加)
敵ノ俘虜トナリ又ハ生死不明トナリタル者ハ其ノ間本條ノ増給ヲ停止ス

第七條 准一官以上營外居住ノ下士以下及軍屬ニシテ前條第一項、第二項及第四項ノ増給
ヲ受クル者并出戰ノ姿勢ヲ完成シテ衛戍地又ハ編成地ヲ出發スル部隊ニ屬スル者及該部
隊出發後之ニ屬セシメラレタル者ニハ手當トシテ一回限リ第一表ノ金額ヲ給ス但第七條
ノ二ニ依リ手當金ヲ受ケタル者ニ在テハ其ノ金額ヲ控除ス

第七條ノ二 豫備後備ノ軍籍ニ在ル准士官以上ニシテ召集ニ應シ就職スル者ニハ一回限リ
手當トシテ第一表ノ手當金ノ半額ヲ給ス
大本營前進セル場合ニ於テ 役ニ關スル任務ヲ帶ヒ其ノ所在地ニ一時往復スル准士官以
上營外居住下士以下及軍屬ニハ前項ニ準シ手當ヲ給スルコトヲ得但シ前項ニ依リ手當ヲ
受ケタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 軍人軍屬ノ糧食及馬匹ノ飼料ハ第六條第一項、第二項及第四項ノ増給ヲ受クルノ
期間現品ヲ給ス其ノ定量及臨時飲食食物加給ノ要否ハ陸軍大臣之ヲ定ム
軍人軍屬外ノ者ニシテ糧食給與ノ必要アルトキハ前項ニ依リ適宜現品ヲ給與スルコトヲ得
軍人軍屬ニシテ第一項ノ外糧食給與ノ必要アルトキハ現品又ハ代金ヲ適宜給與スルコト

ヲ得

平時定額繫畜料ノ支給ハ第一項現品ヲ給スル期間之ヲ停止ス
裝蹄其ノ他器具ノ保續等ハ總テ官費トス其ノ期間ハ第一項ニ同シ
第九條 營内居住下士以下ニハ動員ノ日ヨリ復員ノ日マテ營外居住下士以下及傭人ニハ第
六條第一項、第二項及第四項ノ増給ヲ受クル期間所要ノ被服ヲ給與又ハ貸與ス此ノ場合
ニ於テハ平時交付スヘキ被服ノ現品及金額ノ定額ハ其ノ支給ヲ中止ス其ノ方法ハ陸軍大
臣之ヲ定ム

軍人軍屬ニハ必要ニ應シ特種ノ被服ヲ給與シ若クハ貸與スルコトヲ得軍人軍屬外ニシテ
戰役ニ從事スル者ニ在テモ亦同シ

第十條 第十一條 (削除)(明治二十三年第二百九十五號ヲ以テ削除ス)
第十二條 軍人軍屬死亡シタルトキハ第二表ノ埋葬料ヲ給ス
戰役ニ從事スル者ニシテ前項ノ支給ヲ受ケサレ者官ニ於テ埋葬ヲ要スルトキハ官費ヲ以
テ之ヲ埋葬ス

第十三條 傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル軍人軍屬ノ藥餌ハ總テ官給トス軍人軍屬外ト雖
役ニ從事スル者ハ時宜ニ依リ官給スルコトヲ得
第十四條 各部、各隊及軍人軍屬ニ要スル筆紙墨文具其ノ他消耗品等ハ總テ現品ヲ給ス

第十五條 戰時若ハ事變ニ際シ特別ノ任務ヲ受ケ外國ニ出張スル者ニハ戰地ニ出發スル者ニ準シ給與ヲナスコトヲ得

附則

第十六條 戰時若クハ事變ノ爲メ繁劇ノ事務ニ從事スル官衙ニアル者ハ其ノ期間准士官以上及文官ハ俸給五分ノ一下以下ハ給料四分ノ一ヲ増給ス其ノ官衙ハ陸軍大臣之ヲ定ム第十七條 豫備後備ノ籍ニアル將校并ニ相當官ニシテ本年六月一日以降召集ニ應シ就職シタル者ニモ本規則第七條第三項ヲ適用ス

第十八條 本規則ニ依レル給與ノ時期、停止減額及本規則ノ施行細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム第十九條 明治二十七年勅令第六十三號陸軍臨時給與規則ハ本規則施行ノ日ヨリ廢止ス

附則(三十七年勅令第九十一號附則)

第十二條ノ改正規定ハ開ノ始ニ溯リ之ヲ適用ス但シ已ニ官費ヲ以テ埋葬シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附則(大正三年勅令第二百三號附則)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第六條ノ改正規定ハ開戰ノ始ニ溯リ之ヲ適用ス本令施行ノ際現ニ第六條ノ増給及隊長加給俸ヲ受クル者ニ付テハ隊長加給俸ハ大正三年十月一日ヨリ之ヲ支給ス

表一第

名	任	手	當	金	備考
大親	任	官將	五百圓	判任文官一級乃至三級	五十圓
中將	同	官相	三百三十圓	同 四級乃至五級	四十圓
少將	同	官相	二百六十圓	同 六級	三十五圓
大佐	同	官相	百九十圓	同 七級	二十圓
中佐	同	官相	百四十圓	同 八級以下	二十五圓
少佐	同	官相	百圓	同 八級以下	二十五圓
大尉	同	官相	七十圓	同 八級以下	二十五圓
中尉	同	官相	五十圓	同 八級以下	二十五圓
少尉	同	官相	三十圓	同 八級以下	二十五圓
曹長	同	官相	二十圓	同 八級以下	二十五圓
軍曹	同	官相	十圓	同 八級以下	二十五圓
伍長	同	官相	十圓	同 八級以下	二十五圓
憲兵	同	官相	十圓	同 八級以下	二十五圓
樂手	同	官相	十圓	同 八級以下	二十五圓

表 二 第

考 備	備 兵	判 判	准	奏 高 士	高 上	將 官	名	埋 葬 料	
								稱	額
一 本表ノ雇員備人ハ陸軍大臣之ヲ指定ス 見習士官見習主計見習醫官見習藥劑官見習獸官ニシテ士官ノ勤務ニ服スル者ハ准士官ノ額ニ依ル	人員卒	任 任 待 文 遇	士 官	等 文 官 六 等 以 下	長 二 等 以 上	同 二 等 以 上	相 當	金	
	十	二	二	三	四	五		十	五
	八	十	十	十	十	十		三	五
	圓	圓	圓	圓	圓	圓		圓	圓

●海軍戰時給與規則

勅令第三百三十六號 明治二十七年八月三日

海軍戰時給與規則

第一條 戰時若クハ事變ニ際シ軍人軍屬ノ給與ハ本規則ニ依ル但本規則中明文ナキモノハ總テ現行ノ諸條規ヲ適用ス

第二條 軍人軍屬ニシテ戰地ニ在ル者又ハ派遣セララル者并 地ニ在ラサルモ特別ノ命令ニ依リ對敵ノ行動ヲ取ル者ニハ左ノ區別ニ依リ増俸ヲ給ス (明治三十八年第四十二號及百八十九號改正)

一 准士官以上及候補生ニハ俸給上級職務心得加五分ノ二

二 下士卒ニハ俸給上級職務心得加四分ノ二

三 文官ニハ俸給五分ノ二

四 雇員備人ニハ給料四分ノ二

軍人軍屬ニシテ臨戰合圍地境ニ在ル者又ハ派遣セララル者ニハ前項増俸ノ半額ヲ給ス

第三條 戰地派遣軍人軍屬ノ増俸ハ其ノ出發ノ日ヨリ、既ニ派遣中ノ者ノ増俸ハ戒嚴布告

若クハ宣告又ハ開戰ノ日ヨリ各任務ヲ了ヘ歸著ノ日若ハ給與停止ノ前日マテ之ヲ給ス

特別ノ命令ニ依リ對敵ノ行動ヲ取ル軍人軍屬ノ増俸ハ其ノ行動ノ爲出發スル者ニ在リテ

ハ其ノ日ヨリ、出發セサル者ニ在リテハ現ニ對敵ノ行動ヲ取リタル日ヨリ行動ヲ終ヘ歸

著シタル日、行動ヲ終ヘタル日又ハ給與停止ノ前日マテ之ヲ給ス(明治卅八年第四十二號第百八十九號改正)

第四條 臨戰合圍地境ニ在ル軍人軍屬ノ曾俸ハ戒嚴布告若クハ宣告又ハ開戰ノ日ヨリ戒嚴解止又ハ平定ノ日マテ之ヲ給ス

臨戰合圍地境ニ派遣スル軍人軍屬ノ増俸ハ其ノ出發ノ日ヨリ戒嚴解止若クハ平定ノ日又ハ任務ヲ了ヘ歸著ノ日マテ之ヲ給ス

第五條 戰地若クハ臨戰合圍地境ニ一時往復スル軍人軍屬ニハ其ノ出發ノ日ヨリ歸著ノ日マテ増俸ヲ給ス

第六條 戰備完成ノ各部、各隊及艦船艇ノ軍人軍屬ニハ地若クハ臨戰合圍地ニ發航ノ前日又ハ戒嚴布告若クハ宣告又ハ戰地トナリタル日ノ前日マテ第二條第一項増俸ノ半額ヲ増給ス

第七條 軍人軍屬ニシテ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ戰地ニ於テ治療ヲ受クルトキ并公務ニ原因シ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ臨戰合圍地境ニ於テ治療ヲ受クルトキハ其ノ間俸給、加俸及増俸ノ全額ヲ給ス

第八條 軍人軍屬ニシテ擅ニ職務ヲ離レ若クハ他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後レタルトキ又ハ收禁、拘留、處刑、處罰若クハ被告事件ノ爲メ護送中ハ其ノ事故ノ生シタル當日ヨリ事故ノ止ミタル當日マテ増俸ヲ停止ス

第九條 戰地若ハ臨戰合圍地境ニ在リ又ハ派遣セララルル准士官以上、候補生及文官ニハ手當トシテ一回限リ俸給ノ一箇月分ヲ給ス大本營勤務ノ准士官以上、候補生及文官ニシテ大本營前進ノ際又ハ前進後之ニ派遣セララルル者亦同シ

戰地又ハ臨戰合圍地境ニ派遣セララルル文官以外ノ軍屬ニハ海軍大臣ニ於テ特ニ必要ト認メタルトキハ手當トシテ一回限リ月給ノ者ニ在リテハ月給ノ一箇月分、日給ノ者ニ在リテハ日給ノ三十日分ヲ給スルコトヲ得大本營勤務ノ文官以外ノ軍屬ニシテ大本營前進ノ際又ハ前進後之ニ遣派セララルル者亦同シ

戰地若ハ臨戰合圍地境又ハ前進後ノ大本營所在地ニ一時往復スル准士官以上、候補生及文官ニハ一回限リ第一項手當ノ半額ヲ給スルコトヲ得但シ本項ニ依リ手當ノ給與ヲ受ケタル者出張先ニ於テ更ニ派遣ノ命ヲ受クルトキハ尙半額ヲ差繼キ給ス

前各項ニ依リ手當ノ給與ヲ受クヘキ者出發前死亡シ又ハ官ノ都合ニ依リ免セラレタルトキハ其ノ手當金ハ半額トス(明治三十七年第八十號改正)

第十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ル准士官以上ニシテ召集ニ應シ就職スル者ニハ一回限手當トシテ前條第一項手當ノ半額ヲ給ス但戰地若クハ臨戰合圍地境ニ派遣スル場合ニ在テハ尙半額ヲ差繼キ支給ス

第十條ノ二 戰時特設船舶ニ雇入ノ船員又ハ艦船乗組ヲ命セラレタル者ニシテ職務上准工

官以上ト船室ヲ同フスル者ニハ海軍給與令第六十五條ニ掲クル艦船乗組ノ准士官以上ニ準シ食卓手當ヲ給スルコトヲ得(明治三十七年第八十號改正)

第十條ノ三 文官及文官待遇者ニシテ從軍服ヲ著用スル者ニハ服裝手當トシテ一回限リ三十圓以内ヲ給スルコトヲ得(明治二十八年第七十四號改正)

第十一條 糧食ヲ給與スルニ當リ海軍給與令第十四表ニ依リ難キトキハ其ノ品種及量額ヲ適宜換給増減スルコトヲ得又同令第八十六條、第八十七條及第八十八條ニ於ケル金額ニシテ同第八十九條ノ平均價格ニ依リ難キトキハ適宜之ヲ定ムルコトヲ得(明治三十七年第八十號改正)

第十一條ノ二 艦船ニ在ル准士官以上、候補生、文官、第十條ノ二ニ該當スル者并營舎ニ屯在スル文官及奏任判任待遇者ニ糧食ヲ給與スル場合ニ於テ別ニ炊爨セシムル必要アルトキハ食數ニ應シ食料ヲ給シ糧食ヲ自辨セシムルコトヲ得(明治卅八年第四十二號改正)

前項ノ食料ニ關シテハ海軍給與令第八十九條及前條ノ例ニ依ル(明治三十七年第八十號改正)

第十二條 海軍給與令第八十條及第八十一條ニ掲クル以外ノ軍人軍屬其ノ他ノ者ニ糧食給與ノ必要アルトキハ海軍大臣ノ定ムル所ニ依リ糧食ヲ給スルコトヲ得(同前)

第十三條 艦船乗組又ハ軍隊病院使役ノ軍屬、職工、人夫其ノ他ノ者ニ被服物品給與ノ必要アルトキハ海軍給與令第七十九條ニ準シ之ヲ給與スルコトヲ得(同前)

下士卒ニハ海軍給與令ニ規定スル被服物品ノ外衛生上必要ナル場合ニ於テ適宜ノ被服物

品ヲ給與スルコトヲ得艦船乗組又ハ軍隊病院使役ノ軍屬、職工、人夫其ノ他ノ者ニ給與ノ必要アルトキ亦同シ(同前)

下士卒ニシテ戰地若ハ臨戰合圍地境ニ在ル者又ハ派遣セララル者ニハ必要ニ應シ海軍給與令第十三表被服物品ノ箇數ヲ適宜増加シ交付スルコトヲ得(同前)

准士官以上、候補生及軍屬ニシテ其ノ乗組艦船ノ破壊沈没其ノ他公務上非常ノ災害ノ爲被服物品ヲ亡失シタル者ニハ必要ニ應シ適宜被服物品ヲ給與シ又ハ海軍給與令第十表ニ

準據シ臨時手當ヲ給スルコトヲ得其ノ毀損シテ使用ニ堪ヘサルニ至リタルトキ亦同シ前項ニ依リ被服物品又ハ臨時手當ヲ給與スルトキハ海軍給與令第五十六條及第六十二條ノ規定ヲ適用セス(明治三十七年第八十號改正)

第十四條 削除

第十五條 軍人軍屬其ノ他戰役ニ從事スル者死亡シ戰地ニ於テ埋葬スルトキハ總テ實費支辨トシ戰地外ニ於テ埋葬スルトキハ左ノ區別ニ從ヒ遺族又ハ故舊ニシテ死體ノ引渡ヲ受

クル者ニ埋葬料ヲ給ス但シ下士卒ヲ戰地外ニ於テ埋葬スルトキハ海軍給與令第九十四條ノ規定ニ依ル

將官 及相當官
高等文官 二等以上
五十五圓

上等官	長官	四十五圓
高等文官	及候補生	四十五圓
高等文官	六等以下	三十五圓
奏任待遇者	遇者	三十五圓
士官ノ身分取扱ヲ受クル者	士官	三十五圓
准士官ノ身分取扱ヲ受クル者	准士官	二十八圓
判任待遇者	判任文官	二十三圓
下士ノ身分取扱ヲ受クル者	下士	二十三圓
其ノ他ノ者	其他	十八圓

第十六條 傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル軍人軍屬ノ治療費ハ總テ官給トス但軍人軍屬外ト雖戰役ニ從事スル者ニハ時宜ニ依リ官給スルコトヲ得

第十七條 軍人軍屬ノ俸給及増俸ハ適宜其ノ家族ニ下渡スコトヲ得軍人軍屬外ノ者ニ給スル給料及増俸モ又同シ

第十八條 各部、各隊、艦船艇及軍人軍屬ニ要スル筆紙墨文具其ノ他消耗品ノ類ハ總テ現品ヲ給ス

第十九條 戰地若ハ臨戰合圍地境ニアラサルモ戰時若ハ事變ニ際シ特別ノ任務ヲ受ケ外國ニ派遣スル軍人軍屬ノ給與モ本規則ニ依リコトヲ得

第二十條 戰時若クハ事變ニ際シ繁劇ノ職務ニ從事スル官衙ノ軍人軍屬ニハ其ノ期間第二條第一項増俸ノ半額ヲ増給ス其ノ官衙ハ海軍大臣之ヲ定ム

第二十一條 海軍大臣ニ於テ戰時若クハ事變ニ際シ繁劇ノ職務ニ從事スル官衙ノ軍人軍屬ニ食事ヲ爲サシムル必要アリト認ムルトキハ現品又ハ現金ヲ適宜給スルコトヲ得

第二十二條 豫備後備ノ軍籍ニ在ル准士官以上ニシテ本年六月一日以降召集ニ應シ就職シタル者ニモ本規則第十條ヲ適用ス

第二十三條 本規則ニ依レル給與ノ時期停止減額及本規則ノ施行細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

第二十四條 明治二十七年勅令第六十四號海軍臨時給與規則ハ本規則施行ノ日ヨリ廢止ス

附則 (二十七年勅令第九十二號附則)

第十三條及第十五條ノ改正規定ハ開戰ノ始ニ溯リテ之ヲ適用ス但シ已ニ官費ヲ以テ埋葬シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附 則(三十八年勅令第四十三號附則)

第二條及第三條ノ改正規定ハ開戦ノ始ニ溯リテ之ヲ適用ス
附 則(三十八年勅令第百八十九號附則)

本令ハ開戦ノ始ニ溯リテ之ヲ適用ス

●奏任及判任待遇監獄職員給與令

勅令第二百七十六號 明治三十九年十月十一日

奏任及判任待遇監獄職員給與令

第一條 監獄醫、教誨師及教師ノ俸給ハ別表ニ依ル但シ月俸三十圓未満ノ者ニ限リ各所定ノ最低俸給額ヲ下ラサル範圍内ニ於テ適宜ノ金額ヲ定メ之ヲ給スルコトヲ得

看守ノ月俸ハ十二圓乃至二十圓トス但シ看守部長タル看守ニハ二十五圓迄ヲ給スルコトヲ得(大正二年第七十九號改正)

教習中ノ看守ノ月俸ハ九圓乃至十一圓トス

女監取締ノ月俸ハ八圓乃至十五圓トス但シ女監取締部長タル女監取締ニハ二十圓迄ヲ給スルコトヲ得

第二條 奏任待遇ヲ受クル監獄醫教誨師又ハ教師ニシテ一級俸ヲ受ケ特ニ功勞アル者ハ監獄醫ニ在リテハ千八百圓、教誨師ニ在リテハ千二百圓迄増給スルコトヲ得

判任待遇ヲ受クル監獄醫、教誨師又ハ教師ニシテ一級俸ヲ受ケ五年ヲ踰エ事務練熟優等ナル者ハ監獄醫ニ在リテハ百圓、教誨師、教師ニ在リテハ七十五圓迄増給スルコトヲ得
(大正二年第七十九號改正)

第三條 初メテ監獄醫ヲ命セララル者ノ俸給ハ其ノ三級俸以下、教誨師又ハ教師ヲ命セララル者ノ俸給ハ各其ノ四級俸以下、看守又ハ女監取締ヲ命セララル者ノ月俸ハ各十五圓又ハ十一圓以下トス但シ醫務所長ヲ命セララル者ニ在リテハ二級俸迄、教務所長ヲ命セララル者ニ在リテハ三級俸迄ヲ給スルコトヲ得(大正二年第七十九號改正)

監獄醫、教誨師又ハ教師ノ職ニ在リタル者カ監獄醫、教誨師又ハ教師ヲ命セラル場合ニハ第一條及第二條ニ定メタル範圍内ニ於テ前俸給額以内ノ俸給ヲ給スルコトヲ得
判任官以上ノ官職ニ在リタル者、看守又ハ女監取締ノ職ニ在リタル者カ看守又ハ女監取締ヲ命セラル場合ニハ第一條ニ定メタル範圍内ニ於テ前俸給額以内ノ月俸ヲ給スルコトヲ得(大正二年第七十九號改正)

第四條 監獄醫、教誨師又ハ教師ニシテ別表四級俸以上ノ俸給ヲ受クル者ハ一箇年ヲ經過スルニ非サレハ昇級スルコトヲ得ス(同前)

看守及女監取締ノ月俸ノ増給ハ三圓ヲ踰ユルコトヲ得ス
十五圓以上ノ月俸ヲ受クル看守及十一圓以上ノ月俸ヲ受クル女監取締ニハ六箇月ヲ經過

スルニ非サレハ増給スルコトヲ得ス十五圓又ハ十一圓未滿ノ月俸ヲ受クル看守又ハ女監取締ニシテ十五圓又ハ十一圓以上ニ増給スル場合亦同シ

第五條 看守部長タル看守、女監取締部長タル女監取締及通譯其ノ他特別ノ技能ヲ有スル看守及女監取締ニハ第三條及第四條ヲ適用ス

第六條 休職看守ニシテ陸軍又ハ海軍ニ於テ受クル俸給又ハ給料ノ月額休職ヲ命セラレタル當時ノ月俸額ヨリ寡少ナルトキハ其ノ不足額ニ相當スル金額以内ノ休職給ヲ給スルコトヲ得

第七條 通譯其ノ他特別ノ技能ヲ有スル看守又ハ女監取締ニハ一箇月二十圓以内ノ特別手当ヲ給スルコトヲ得

第八條 非番ノ日ニ於テ臨時勤務ニ服シタル看守及女監取締ニハ一日五十錢以内ノ勤務手当ヲ給スルコトヲ得

第九條 看守及女監取締ニハ一箇月五圓以内ノ宿料ヲ給スルコトヲ得

第十條 年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ給ス
第十一條 月俸ハ新任、増俸、減俸及復職ノ場合ニ於テハ其ノ翌日ヨリ、退職ノ場合ニ於テハ其ノ當日迄日割ヲ以テ給ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ其ノ月俸額ノ全額ヲ給ス

一 職務上ノ傷痕又ハ疾病ニ因リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタル者

二 廢廳ノ爲退職シタル者

三 身體若ハ精神ノ衰弱又ハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタル者

四 休職ヲ命セラレタル者

五 在職中死亡シタル者

休職當月復職シタル者ニハ其ノ月ノ月俸ハ更ニ之ヲ給セス

第十二條 休職給ハ休職ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十三條 病氣ノ爲執務セサルコト六十日ヲ踰ユル者又ハ私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト二十日ヲ踰ユル者ハ日割ヲ以テ俸給ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者ハ此ノ限ニ在ラス

附 則

第十四條 地方ノ狀況ニ依リ當分ノ内看守ニ最下俸以下九圓迄女監取締ニ最下俸以下六圓迄ノ月俸ヲ給スルコトヲ得

第十五條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ受ケサル者ハ現ニ受クル俸給及特別手当ヲ給セサルモノトス

第十六條 巡查看守俸給令及明治二十八年勅令第五百十九號ハ之ヲ廢止ス

● 巡查給與令

勅令第二百五十九號 明治三十九年九月二十六日

巡查給與令

第一條 巡查ノ月俸ハ十二圓乃至二十五圓トス但シ巡查部長タル巡查ニハ二十八圓迄ヲ給スルコトヲ得(明治四十四年第七十六號改正)

教習中ノ巡查ノ月俸ハ九圓乃至十一圓トス

第二條 初メ巡查ヲ命セララル者ノ月俸ハ十五圓以下トス

判任以上ノ官職ニ在リタル者又ハ巡查ノ職ニ在リタル者カ巡查ヲ命セラレタル場合ニハ

第一條ニ定メタル範圍内ニ於テ其ノ前俸給額以内ノ月俸ヲ給スルコトヲ得

第三條 月俸ノ増給ハ三圓ヲ越ユルコトヲ得ス

十五圓以上ノ月俸ヲ受クル巡查ニハ六箇月ヲ經過スルニ非サレハ増給スルコトヲ得ス十

五圓未滿ノ月俸ヲ受クル巡查ニシテ十五圓以上ニ増給スル場合亦同シ

第四條 巡查部長タル巡查及刑事通譯其ノ他特別ノ技能ヲ有スル巡查ニハ第二條及第三條

ヲ適用セス

第五條 休職巡查ニシテ陸海軍ヨリ受クル俸給又ハ給料ノ月額休職ヲ命セラレタル當時ノ

月俸額ヨリ寡少ナキトキハ其ノ不足額ニ相當スル金額以内ノ休職給ヲ給スルコトヲ得

第六條 刑事通譯其ノ他特別ノ技能ヲ有スル巡查ニハ一箇月二十圓以内ノ特別手當ヲ給ス

ルコトヲ得

第七條 非番ノ日ニ於テ臨時勤務ニ服シタル巡查ニハ一日五十錢以内ノ勤務手當ヲ給スル

コトヲ得

第八條 訓練中ノ巡查ニハ一箇月七圓以内ノ訓練手當ヲ給スルコトヲ得

第九條 巡查ニハ一箇月五圓以内ノ宿料ヲ給スルコトヲ得

第十條 月俸ハ新任、増俸、減俸及復職ノ場合ニ於テハ其ノ翌日ヨリ退職ノ場合ニ於テハ

其ノ當日迄日割ヲ以テ給ス但シ各號ノ一ニ該當スル者ニハ其ノ全額ヲ給ス

一 職務上ノ傷痍又ハ疾病ニ由リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタル者

二 廢廳ノ爲退職シタル者

三 身體若クハ精神ノ衰弱又ハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタル者

四 休職ヲ命セラレタル者

五 在職中死亡シタル者

休職當月復職シタル者ニハ其ノ月ノ月俸ハ更ニ之ヲ給セス

第十一條 休職給ハ休職ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

休職給手當金及宿料ノ給與ニ關スル規定ハ廳府縣長官之ヲ定ム

第十二條 病氣ノ爲執務セサルコト六十日ヲ超ユル者又ハ私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト二十日ヲ超ユル者ハ日割ヲ以テ月俸ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者ハ此ノ限ニ在ラス

附 則

第十三條 地方ノ狀況ニ依リ内務大臣ノ認可ヲ得テ當分ノ内巡查ニ最下俸以下九圓迄ノ月俸ヲ給スルコトヲ得

第十四條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ受ケサル者ハ現ニ受クル月俸額及特別手當ヲ給セララルモノトス

第十五條 巡查看守俸給令及明治二十八年勅令第百五十九號ハ之ヲ巡查ニ適用セス

● 吊祭料給與令ヲ警部補ニ準用ノ件

勅令第百二十六號 明治四十三年三月二十八日

巡查看守療治料給助料及吊祭料及給與令ハ警部補ニ之ヲ準用ス但シ勤績年數ノ計算ニ關シテハ明治四十三年法律第三十號ノ例ニ依ル

附 則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

● 交通至難ノ島嶼ニ在勤ノ稅務屬技手雇員手當給與ノ件

勅令第五十三號 明治三十五年三月二十六日

交通至難ノ島嶼ニ設置シタル稅務署ニ在勤スル(稅務屬)、技手、雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ月手當ヲ給スルコトヲ得其ノ場所及給與細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附 則

本令ハ明治三十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

官 名		金 額
稅 務 屬	十 二 圓 以 內	
技 手	十 二 圓 以 內	
雇 員	十 圓 以 內	

● 交通至難ノ島嶼在勤ノ稅務屬技手雇員手當給與細則

大藏省令第五號 明治三十五年三月二十七日

明治三十五年勅令第五十三號ニ據リ月手當ヲ給與スヘキ場所及給與細則左ノ通相定ム

島嶼在勤者月手當給與細則

第一條 月手當ハ別表ニ據リ島嶼ニ在勤スル者ニ之ヲ給ス

琉球國 宮古島 八重山島 伊豆國 小笠原島
 第二條 新ニ赴任ノモノハ住所ヘ到達ノ翌日ヨリ支給ス
 他ニ轉勤又ハ轉任ノキハ其ノ辭令到達ノ當日迄支給ス(明治四十二年第卅六號本項追加)
 第三條 兼務者ニハ月手當ヲ給セス
 第四條 前條ノ外手當支給ニ關シテハ各俸給支給ノ例ニ依ル

別		稅務屬
技手	八	圓
雇員	七	圓

●大藏省臨時建築部現業從事判任官及雇員勤務手當給與ノ件
 勅令第六十四號 明治四十年四月三十日
 大藏省臨時建築部ニ於ケル工事ノ現業ニ從事スル判任官及雇員ニハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ勤務手當ヲ給スルコトヲ得

附則
 本令ハ明治四十年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

●交通至難ノ島嶼ニ在勤ノ判事檢事書記看守長看守雇員手當給與ノ件
 勅令第七十七號 明治三十三年三月二十八日
 交通至難ノ島嶼ニ設置シタル裁判所、檢事局、區裁判所出張所及監獄ニ在勤スル判事、檢事、裁判所書記、(監獄書記)、看守長、看守、雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ月手當ヲ給スルコトヲ得其ノ場所及給與細則ハ司法大臣之ヲ定ム

附則
 本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

別		判事	檢事	裁判所書記	監獄書記	看守長	看守
十	十	六	六	六	六	六	五
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
以	以	以	以	以	以	以	以
內	內	內	內	內	內	內	內

雇員 五圓 以內

●島嶼在勤者月手當給與細則

司法省令第十三號 明治三十三年四月九日

明治三十三年勅令第七十七號ニ依リ月手當ヲ給與スヘキ場所及給與細則左ノ通り相定ム

島嶼在勤者月手當給與細則

第一條 月手當ハ別表ニ據リ左ノ島嶼ニ在勤スル者ニ之ヲ給ス

千島國 國後島 擇捉島

伊豆國 大島 新島 神津島 三宅島 八丈島 青ヶ島

琉球國 宮古島 八重山嶋 久米島

小笠原島 父嶋 母島

第二條 新ニ赴任ノ者ハ任所ヘ到達ノ翌日ヨリ支給ス
第三條 前條ノ手當支給ニ關シテハ各俸給支給ノ例ニ依ル

表	別	檢事	判事
拾圓	拾圓		

裁判所書記	六	六圓
監獄書記	六	六圓
看守長	六	六圓
看守	五	五圓
雇員	五	五圓

●樺太在勤監獄職員手當ノ件

勅令第四十三號 明治四十年三月十五日

樺太ニ在勤スル監獄醫、教誨師、教師及藥劑師ニハ一箇月四拾圓以內、看守、女監取締ニハ一箇月二拾圓以內ノ手當ヲ支給ス

附則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●交通至難ノ島嶼ニ在勤スル林區署職員及雇員手當給與ノ件

勅令第二百六十一號 明治四十一年十月十三日

交通至難ノ島嶼ニ在勤スル林區署職員及雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ月手當ヲ給與スルコ

トヲ得其ノ場所及給與細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

奏 任 官	二 拾 圓	以 內
判 任 官	拾 二 圓	以 內
雇 員	拾 圓	以 內

●交通至難ノ島嶼在勤ノ林区署職員及雇員月手當給與細則

農商務省令第十九號 明治四十一年十月十三日

交通至難ノ嶋嶼在勤ノ林区署職員及雇員月手當給與細則

第一條 月手當ハ別表ニ依リ左ノ島嶼ニ在勤スル者ニ之ヲ給ス

琉球國 八重山島

第二條 新ニ赴任ノ者ニハ任所ヘ到達ノ翌日ヨリ支給ス

第三條 轉任ヲ命セラレタル者ニハ辭令到達ノ當日迄支給ス

第四條 兼任ノ者ニハ月手當ヲ支給セス

第五條 私事ノ故障ニ依リ執務セサル間ハ手當ヲ支給セス

第六條 月手當ハ毎月文官俸給支給日ニ之ヲ支給ス

第七條 前各條ノ外月手當支給ニ關シテハ高等官官等俸給令第十八條ヲ除ク外各俸給支給

ノ例ニ依ル

附 則

本則ハ明治四十一年十月勅令第二百六十一號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

官 名	金 額
山 林 技 手 屬	十 二 圓
森 林 主 事	十 圓
雇 員	八 圓

●千島國諸島在勤北海道廳職員手當給與ノ件

勅令第三百五十八號 明治三十一年十二月二十八日

千島國諸島ニ在勤スル北海道廳ノ支廳長、屬、技手、警部、警部補、巡查、森林監守、事業手及戶長、筆生、雇員ニハ別表定ムル所ノ月手當ヲ給ス其ノ給與細則ハ內務大臣之ヲ定

ム(明治卅四年第五十四號及同四十三年第十八號ヲ以テ改正)
本令ニ依リ月手當ヲ給スル警部補、巡查ニハ明治三十年勅令第二百四十六號ノ手當ヲ給セ
ス(明治四十三年第十八號改正)

附則
本令ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行ス

別表

支應長	二十圓	以	內
屬	十二圓	以	內
技手	十二圓	以	內
警部	十二圓	以	內
警部補	十二圓	以	內
戶長	十二圓	以	內
巡查	十圓	以	內
森林監守	十圓	以	內

事業手	十圓	以	內
筆生	十圓	以	內
雇員	十圓	以	內

(明治四十三年第十八號改正)

●千島國諸島在勤ノ北海道支應長以下手當給與細則

內務省令第一號 明治三十二年一月九日

第一條 千島國諸島ニ在勤スル北海道支應長、屬、技手、警部、警部補、巡查、森林
監守、事業手及戶長、筆生、雇員ノ手當ハ任地到達ノ翌日ヨリ其ノ事務ニ從事スル間之
ヲ給ス(明治三十四年第九號及同四十三年第七號改正)

第二條 非職、廢官、退官ノトキ及之ニ準スル場合ハ命令又ハ辭令接受ノ當日迄該月分ノ
手當ヲ日割計算シテ給シ死亡ノトキハ全月分ヲ給ス

第三條 非職、廢官、退官者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ受ケ其ノ事務ニ從事シタルト
キハ其ノ間手當ヲ給ス

第四條 病氣其ノ他私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユルトキハ其ノ後ノ手當

ヲ給セス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ忌服ヲ受クル者及特旨ニ由リ賜暇
休養スル者ハ此限ニ在ラス

第五條 手當ハ每月末日ニ給ス但當日休暇ナルトキハ繰上トス

●東京府及沖繩縣下ノ島嶼在勤官吏月手當給與ノ件

勅令第六十四號 明治三十四年四月二十二日

東京府下小笠原島、大島、八丈島、小島、青ヶ島、鳥島、新島、式根島、神津島、三宅島
御藏島、利島及沖繩縣下宮古嶋、八重山島、久米島、鳥島、伊平屋島、伊江島、慶良間島
粟國島、渡名喜島ニ在勤スル地方官廳ノ奏任官判任官及巡查雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ
月手當ヲ給スルコトヲ得其ノ給與細則ハ内務大臣之ヲ定ム

(明治卅四年第二百十九號同卅九年第七號及同四十一年第九十二號改正)

別表

奏任官	十圓	以內
判官	六圓	以內
巡查員	五圓	以內
雇員	五圓	以內

(明治二十九年第七號及同四十一年第九十二號ヲ以テ改正)

●東京府及沖繩縣下ノ島嶼在勤官吏月手當給與細則

内務省令第八號 明治三十四年四月二十二日

明治三十四年勅令第六十四號ニ據リ月手當給與細則左ノ通り相定ム

鳴嶼在勤者月手當給與細則

第一條 本年勅令第六十四號ニ依リ島嶼ニ在勤スル地方官廳ノ奏任官判任官及巡查雇員ニ
支給スル月手當ハ別表ニ依ル(明治卅九年第四號及同四十一年第七號改正)

第二條 新ニ赴任ノ者ハ任所へ到達ノ翌日ヨリ支給ス

第三條 病氣若ハ私事故障ノ爲任地ヲ離レタル者ニ對シテハ本令ノ月手當ハ日割ヲ以テ之
ヲ支給ス

第四條 本令ニ定ムルモノノ外月手當支給ニ關シテハ各俸給支給ノ例ニ依ル

附 則(明治三十四年第三十八號追加)

第五條 明治三十四年四月一日以前ヨリ在勤スル者ニ對シテハ四月分月手當金額ヲ支給ス

第六條 明治三十四年十一月一日以前ヨリ明治三十四年勅令第二百十九號ヲ以テ追加セラ

レタル島嶼ニ在勤スル者ニ對シテハ明治三十四年十一月分月手當金額ヲ支給ス

別表

奏任官	拾	圓
判官	六	圓
巡査	五	圓
雇員	五	圓

(明治三十九年第四號及同四十一年第七號改正)

●警察賞與規則

勅令第四百二號 明治三十二年十月十日

警察規則

第一條 警察賞與ハ内務大臣ノ定ムル規程ニ從ヒ警察上特ニ功勞アリト認ムル者ニ對シテ行フモノトス

第二條 北海道地方費警察費又ハ府縣警察費ヨリ給與ヲ受クル警部補、巡査其ノ他ノ吏員ニ行フヘキ賞與ニ要スル費用ハ北海道地方費警察費又ハ府縣警察費ヲ以テ支辨シ其ノ他ノ賞與ニ要スル費用ハ國庫ノ負擔トシ賞與ヲ行フ廳府縣ニ屬スル經費ヲ以テ支辨スヘシ
第二條ノ二 本令中内務大臣ノ職務ハ臺灣ニ於テハ臺灣總督權太ニ於テハ樺太廳長官之ヲ

行ヒ府縣トアルハ臺灣ニ於テハ廳トス

〔明治卅四年第十二號追加及四十四年第一百十八號改正〕

第三條 本令ハ明治三十二年十月十五日ヨリ施行ス

附 則(明治四十三年第廿號ヲ以テ改正附則)

本令ハ明治四十二年勅令第十二號明治四十三年勅令第十三號及明治四十二年第十四號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●警察賞與規則施行細則

内務省令第三十二號 明治四十三年十二月二十九日

警察賞與規則施行細則左ノ通改正ス

警察賞與規則施行細則

第一條 警察官吏消防官吏其ノ他警察事務ニ從事スル者ニシテ警察上特ニ功勞アリト認ムル者ニ對シテハ左ノ區別ニ依リ所屬廳府縣長官之ヲ賞與ス

一 甲賞(金拾五圓以上五拾圓以下ノ金額授與)

二 乙賞(金拾五圓未滿ノ金額授與) 三 賞詞

功勞拔群一般ノ龜鑑ト爲ルヘキ者ニ對シテハ内務大臣ノ認可ヲ受ケ金百圓迄ノ特別賞ヲ授與スルコトヲ得

第二條 消防組員又ハ東京市大阪市ニ於ケル消防員ニシテ水火災警戒防禦ニ關シ功勞アル者ニ對シテハ前條ノ規定ヲ準用ス

第三條 前二條ノ功勞者ニシテ賞與前刑事被告人ト爲リ又ハ懲戒處分ニ依リ其ノ職ヲ免セラレ又ハ文官分限令第十一條第一號第二號ニ依リ休職ヲ命セラレタルトキハ賞與ヲ行ハサルモノトス

第四條 職務ノ爲ニスルニ非スシテ左ノ事項ニ關シ特ニ功勞アリト認ムル者ニ對シテハ第一條ノ區別ニ依リ之ヲ賞與ス

- 一 犯罪人ノ逮捕又ハ捜査
- 二 人命救助
- 三 水火災、傳染病流行其ノ他災害事變ニ於ケル警戒、防禦又ハ救護
- 四 急遽ノ際警察官ニ對シテ爲シタル協力前項第一號ニ依ル賞與ハ確定判決ニ至ラスト雖犯罪ノ事實明白ナリト認ムヘキトキハ之ヲ行フコトヲ得

第五條 前條ニ依ル賞與ハ左ノ區別ニ依リ廳府縣長官之ヲ行フ

- 一 前條第一號ノ場合ニ在テハ最初ニ犯罪人ヲ受取リタル官署所在地ノ廳府縣
- 二 前條第二號及第三號ノ場合ニ在テハ行爲地所轄廳府縣
- 三 前條第四號ノ場合ニ在テハ協力ヲ受ケタル警察官所屬府縣

第六條 第四條ノ功勞者ニシテ賞與前處刑セラレタルトキハ賞與ヲ行ハサルコトアルヘシ

第七條 功勞者賞與前ニ死亡シタルトキハ賞與ノ金額ハ左ノ順位ニ從ヒ其ノ家ニ在ル親族

ニ之ヲ給ス但シ同順位間ニ在テハ其ノ親等ノ最モ近キ者ヲ先ニシ同親等間ニ在テハ男ハ女ニ、同性間ニ在テハ長ハ幼ニ先ツ

- 一 配偶者
- 二 直系卑屬
- 三 直系尊屬
- 四 兄弟姉妹

附 則 本令ハ明治四十四年一月三日ヨリ之ヲ施行ス

旅費

●内國旅費規則

勅令第二百七十四號 明治四十三年六月十八日

朕内國旅費規則改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

内國旅費規則

- 第一條 官吏公務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキハ本令ニ依リ旅費ヲ支給ス
- 第二條 旅費ハ鐵道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料、赴任手當及移轉料ノ八種トシ別表ニ定ムル所ニ從ヒ順路ニ依リテ之ヲ支給ス但シ公務ノ都合ニ依リ順路ニ依リテ旅行シ難キ場合ニ於テハ其ノ現ニ經過シタル通路ニ依ル
- 第三條 鐵道旅行ニハ鐵道賃、水路旅行ニハ船賃、陸路旅行ニハ車馬賃ヲ支給ス
- 鐵道又ハ水路ニ依ラサル旅行ハ之ヲ陸路旅行トス
- 第四條 宿泊料ハ夜數ニ應シ日當ハ日數ニ應シテ之ヲ支給ス
- 水路旅行ニハ宿泊料ヲ支給セス但シ官用ノ船舶ニ依リテ旅行スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲ爲ササルトキハ食卓料ヲ支給ス
- 第五條 旅費ノ支給ニ關シテハ旅行日數ハ出張地ニ於ケル滞在日數及途中止ムヲ得サル事

由ノ爲要シタル日數ヲ除クノ外鐵道旅行ハ二百里、水路旅行ハ百海里、陸路旅行ハ十二里ニ付一日ノ割合ヲ以テ通算シタル日數ヲ超過スルコトヲ得ス但シ一日未滿ノ端數ハ之ヲ一日トス

第六條 赴任ノ場合ニ於テハ別ニ移轉料及舊任地又ハ居住地ヨリ新任地ニ至ル鐵道賃、船賃及車馬賃ノ額ニ相當スル赴任手當ヲ支給ス

第七條 官用ノ船、車馬、等ニ依リテ旅行スルトキハ鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給セス

第八條 陸路六里未滿、鐵道四十八哩未滿、水路三十海里未滿ノ旅行ニ在リテハ公務ノ都合ニ依リ宿泊シタル場合ヲ除クノ外其ノ支給スヘキ日當ハ定額ノ半額トス

一旅行ニシテ陸路、鐵道又ハ水路ニ互ルトキハ鐵道ハ八哩、水路ハ五海里ヲ以テ陸路一里ト看做シ前項ノ規定ヲ準用ス

第九條 在勤廳所在地ノ市區町村内ノ出張ニシテ遠距離ニ涉ルトキハ定額半額以内ノ日當ヲ支給スルコトヲ得

第十條 私事ノ爲メ任地又ハ居住地以外ニ滞在スル者轉任ヲ命セラレ又ハ新ニ任用セラレ滞在地ヨリ赴任スル場合ニ於テハ滞在地ヨリ新任地ニ至ル旅費額カ舊任地又ハ居住地ヨリ新任地ニ至ル旅費額ヨリ多キトキハ舊任地又ハ居住地ヨリ新任地ニ至ル旅費ヲ支給ス前項ノ規定ハ私事ノ爲任地以外ニ滞在スル者滞在地ヨリ旅行スル場合ニ之ヲ準用ス

第十一條 新ニ任用スル爲召換セラレタル者ニハ官吏起任ノ例ニ準シ新官相當ノ旅費ヲ支給ス

第十二條 特別ノ事情ニ依リ定額ノ鐵道賃、船賃又ハ車馬賃ヲ以テ其ノ實費ヲ支辨シ難キ場合ニ於テハ實費額ヲ支給スルコトヲ得

第十三條 鐵道賃、船賃又ハ車馬賃ハ各其ノ路程ヲ合算シテ之ヲ支給ス但シ定額ヲ異ニスルモノニ付テハ各別ニ之ヲ通算ス

第十四條 年度又ハ日ニ依リテ旅費ヲ區分計算スルノ必要アル場合ニ於テ其ノ區分判明ナラサルトキハ最近ノ到達地ニ著シタル日ヲ以テ其ノ路程ヲ區別シ計算ス

第十五條 旅行中退官、退職、休職又ハ非職トナリタル者ニハ舊任地ニ至ル前官又ハ本官相當ノ旅費ヲ支給ス但シ刑事裁判又ハ懲戒處分ニ依リテ失官シ又ハ免官セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テハ第五條ニ定メタル旅程ノ割合ヲ以テ計算シタル日數ニ依リ旅費ヲ支給ス

第十六條 事務引續キテ於テハ前二項ノ規定ニ準シ旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス

第十七條 所管大臣ハ測量土木工事等ノ爲現場ヲ巡廻スル官吏又ハ常時旅行ヲ要スル官吏ニ關シ特ニ其ノ旅費額ヲ定メ月額又ハ日額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得

第十八條 武官、陸海軍文官、鐵道事務ニ従事スル官吏及警察官ノ旅費ニ關シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ別ニ之ヲ定ム

第十九條 雇員其ノ他本令ニ規定ナキ者ノ旅費ニ關シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シ本令ニ準シテ之ヲ定ム

第二十條 當分ノ内朝鮮、臺灣又ハ樺太内ノ旅行ニ限リ所管大臣大藏大臣ト協議シテ旅費ノ定額ヲ増加スルコトヲ得(明治四十二年第二百九十一號改正)

第二十一條 當分ノ内朝鮮、臺灣又ハ樺太在勤二年以上ニシテ退官、退職休職又ハ非職ト爲リ三十日以内ニ同地出發歸郷スル者ニハ前官又ハ本官相當ノ旅費ヲ支給スルコトヲ得但シ刑事裁判若ハ懲戒處分ニ依リ失官シ若ハ免官セラレ又ハ自己ノ便宜ニ依リ退官若ハ退職シタル者ハ此ノ限ニ在ラス(同前)

前項ノ旅費ニ關シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

在職中死亡シタルトキハ第一項ノ例ニ準シ旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給スルコトヲ得(明治四十四年第九十二號ヲ以テ第廿二條改正)

得(明治四十四年第九十二號ヲ以テ第廿二條改正)

得(明治四十四年第九十二號ヲ以テ第廿二條改正)

第廿二條 樺太ニ赴任スル者、朝鮮ニ赴任スル者ニシテ江原道平安南道平安北道咸鏡南道咸鏡北道ニ赴ク者又ハ十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル者ニハ當分ノ内支度料ヲ支給スルコトヲ得其ノ額ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

附 則 (明治四十四年勅令第九十二號附則)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附 則

本令ハ明治四十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前轉任ヲ命セラレ新ニ任用セラレ若ハ新ニ任用スル爲召換セラレタル場合又ハ退官、退職、休職、非職ト爲リ若ハ死亡シタル場合ニ關シテハ舊令ニ依ル

(別表)

等 級	旅 費 額							
	鐵道賃	船賃	海車馬賃	宿泊料	日 當	食卓料		
一 等	親任官	六 錢	七 錢	五 十 錢	六	圓 四	圓 二	圓 百 圓 以 內
二 等	勅任官	五 錢	六 錢	四 十 錢	三 圓 五 十 錢	二 圓 五 十 錢	一 圓 七 十 錢	七 十 圓 以 內

等 級	旅 費 額							
	判任官	五等以上	四等以下	三等以下				
三 等	奏任官	五 錢	三 十 錢	二 圓 五 十 錢	二 圓	一 圓 三 十 錢	五 十 圓 以 內	
四 等	判任官	三 錢	四 錢	二 十 錢	一 圓	一 圓 五 十 錢	一 圓 二 十 錢	五 十 圓 以 內
	六等以下	三 錢	四 錢	二 十 五 錢	一 圓	一 圓 五 十 錢	一 圓 二 十 錢	三 十 圓 以 內

●外國旅費規則

閣令第十二號 明治二十年五月七日

外國旅費規則左ノ通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

外國旅費規則

- 第一條 外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス
- 第二條 外國旅費ハ船舶料、瀛車料、客舎料、食卓料、日當及支度料ノ六種トス
- 第三條 客舎料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等トシ第一號表ニ照シ船舶料、瀛車料ハ勅奏判任官ハ一等、傭員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス
- 第四條 表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏判任官ハ瀛船、瀛車賃ノ一等定價、傭員ハ二等定

價ヲ支給ス其二等ナキ場合ハ一等ヲ支給ス

漁船、汽車ノ設ナキ地方ヲ旅行スルトキハ舟、車、馬賃ノ實費ヲ支給ス

定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物三十五貫目マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得

第五條 前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精確ナル證明書ヲ出サシメ之ニ基キ支給スヘシ

旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作り毎日ノ行程、宿泊ノ場所、旅店名稱、船名、賃銀等ヲ記入スヘシ

旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟、車、馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ

第六條 船舶料、汽車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支給セス

第七條 食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ賄ヲ爲ササルトキニ限り航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

食卓料ハ客舍料ト重複ニ支給セス

第八條 客舍料ハ陸地宿泊ノ數ニ應シ之ヲ支給ス

航海途中漁船ノ寄港シタル場合ニ於テ自己ノ便宜ヲ以テ上陸宿泊スルトキハ客舍料ヲ支給セス

給セス

第九條 日當ハ本邦出發港或備ノ日ヨリ本邦歸著港ニ投錨ノ日マテ日數ニ應シテ支給ス

第十條 支度料ハ各省大臣ニ於テ豫メ旅程ノ遠近、日數ノ多少、公務ノ性質等ヲ斟酌シ第一號表ニ掲クル範圍内ニ於テ相當ノ額ヲ定メ支給スヘシ

支度料ハ本邦ヨリ外國へ旅行ヲ命シタルトキ之ヲ支給シ其外國ニ在テ甲國ヨリ乙國へ旅行ヲ命スルコトアルモ之ヲ支給セサルモノトス

第十一條 奏任官四等以上ノ者從者ヲ伴ヒ外國ニ旅行スルトキ從者一人ニ限り願ニ依リ表面二等ノ船舶料、汽車料^{表面外ノ地ハ}及五等ノ食卓料ヲ支給スルコトアルヘシ

第十二條 外國へ旅行ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ都合ニ由リ旅行ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ支給ス

第十三條 外國旅行若クハ在勤中廢官退官及非職ノ者其命令到達ノ日ヨリ四週間以内ニ其所在地ヲ出發歸朝スルトキハ其地ヨリ本邦出發地マテ本官若クハ舊官相當ノ旅費ヲ給ス

但自己ノ便宜又ハ刑事裁判及懲戒處分ニ由リ退官ノ者ハ此限ニアラス^(明治廿六年第五十七號改正)

外國旅行若クハ在勤中死亡ノ者ハ其地ヨリ本邦出發港マテ舊官相當ヲ以テ第一號表汽車料、船舶料ノ一割増ヲ支給シ第一號表ノ旅費ハ支給セス

第十四條 外國旅行中許可ヲ得テ公務ヲ終ルノ後尙私事ノ爲メ滞在スルトキ其間ハ一切旅

費ヲ支給セス但病氣ハ此限ニアラス
 許可ヲ得テ私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ就キタル日若クハ場所ヨリ其再ヒ
 順路ニ就クノ日若クハ場所マテハ順路ニ應スル船舶料、汽車料ノ一割増ヲ支給シ日當、
 客舎料ハ支給セス

第十五條 第十三條及第十四條ニ據リ死亡者及許可ヲ得テ迂路ヲ經過スル者ニ順路船舶料
 汽車料ヲ支給スルトキ表面外ノ地ニ於テハ陸地ハ一英里ニ付金七錢海路ハ一海里ニ付金
 六錢ノ割ヲ以テ支給ス

表面外ノ地ノ里程ハ各地運輸會社或ハ各國政府ノ公認セル里程表ニ基キ旅行者或ハ遺族
 ヨリ精確ノ證明書ヲ出サシムルモノトス

第十六條 傭員中特別ノ取扱ヲ要スル者(傭外國人等)及其他本則ニ明文ナキモノノ旅費ハ主任
 大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ムヘシ

第十七條 交際官、領事等別段ノ旅費規則アルモノニハ本則ヲ適用セス
 第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

第十九條 削除(明治三十年第三百二十四號ヲ以テ削除ス)

附 則 外國旅費ハ內國旅費ト重複ニ支給スルコトナシ

外國旅行ノ爲メ本邦内ヲ通過シ及出發地ニ滞在スルトキハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支
 給ス

出發港拔錨ノ後郵船ノ都合ニ由リ本邦内ニ寄港シ上陸滞在スルトキハ其間ハ內國旅費規
 則ニ據リ日當及宿泊料ヲ支給ス(明治三十年第三百二十四號改正)

歸朝ノ際目的ノ港ニ達スヘキ直航船ナキカ爲メ一旦本邦内ニ寄港シ其地ヨリ汽船ヲ乘替
 ルトキハ其寄港シタル日以後ニ起ル旅行ハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

第一號表

旅費等級	客 舍		食卓料	日 當	支 度
	諸外國	支那			
親任官 一 等	十二圓七	七圓	七圓七錢	六圓	七百圓
勅任官 二 等	十圓五十錢	六圓	五圓五十錢	四圓五十錢	四百五十圓
奏任官 三 等	九圓	五圓	四圓二十錢	三圓五十錢	三百五十圓
判任官 四 等	七圓五十錢	四圓	三圓九錢	二圓	二百圓
備員 五 等	六圓	三圓	六圓十錢	二圓	百圓

第二號表ノ甲

同	マニラ間	貳百五十三圓五十錢	貳百二圓八十錢
同	バタビヤ間	二百四十七圓	百九十七圓六十錢
同	カルカッタ間	三百五十一圓	二百八十一圓八十錢
同	ボンデチユリース間	三百三十一圓五十錢	二百六十五圓二十錢
同	マドラス間	三百十二圓	二百四十九圓六十錢
同	コロンボ間	三百九十圓	三百十二圓
同	亞丁間	五百七圓	四百五圓六十錢
同	蘇門答刺間	五百二十圓	四百十六圓
同	ボルトサイト間	五百三十九圓五十錢	四百三十一圓六十錢
同	那不爾間	四百六十八圓	二百八十六圓
同	馬六甲間	四百六十八圓	二百八十六圓
同	メメル間	四百六十八圓	二百八十六圓
同	ブルネ間	五百十三圓五十錢	二百九十二圓五十錢
同	ウブンデニヌ間	四百六十八圓	二百八十六圓
同	シドネー間	四百六十八圓	二百八十六圓
同	サンフランシスコ間	三百二十五圓	二百圓
同	ホノルル間	三百二十五圓	二百圓
同	上海間	六十五圓	三十九圓
同	天津間	九十七圓五十錢	五十七圓十錢
同	芝罘間	八十四圓五十錢	四十九圓十錢
同	元山間	七十圓二十錢	四十一圓六十錢

第二號表ノ乙

歐米各所汽車賃表

同	釜山間	五十五圓二十錢	三十二圓五十錢
同	仁川間	七十圓二十錢	四十一圓六十錢
同	浦潮斯德間	八十八圓四十錢	五十二圓
米國桑港	ホノルル間	九十七圓五十錢	三十二圓五十錢
米國紐約	英國リバプール間	百三十圓	五十二圓
橫濱	英國サウスマンプトン間	五百四十六圓	三百二十五圓

等 二 等

佛國馬耳塞リオン間	十一圓二十錢	八圓三十錢	
佛國馬耳塞巴里間	二十七圓六拾錢	二拾圓五拾錢	
佛國リオン巴里間	拾六圓四拾錢	拾二圓二拾錢	
同	ラデツサ間	百拾二圓	六拾七圓
同	アボツサ間	三拾二圓	二拾一圓
同	ストツクホルム間	三拾七圓	二拾三圓
同	コッペンハーゲン	五圓	四圓
桑港	コルセル間	五圓	四圓
タマ	盛頓間	二百拾三圓	百八拾二圓
セア	育頓間	二百拾三圓	百八拾二圓
ブアンクトバル	育頓間	二百三拾七圓	二百一圓
紐育	育頓間	二百三拾七圓	二百一圓

セアトル	シ	カ	ゴ間	百四拾七圓	百三拾四圓
同	コ	ロ	ン	百七拾八圓	百五拾三圓
紐	育	シ	カ	ゴ間	五拾二圓
					五拾

●内務省所管旅費規則

内務省訓令第六號 明治四十三年七月二日

内務省所管旅費規則

第一條 試補見習其他待遇ヲ受クル者ノ旅費ハ其ノ奏任待遇ヲ受クルモノハ内國旅費規則別表奏任官六等以下ノ額、判任待遇ヲ受クル者ハ判任官六級俸以下ノ額ヲ支給ス

第二條 囑託員ノ旅費ハ在官者ハ其本官相當ノ旅費ヲ支給ス

前項ニ該當セサル者ハ其常時一定ノ手當ヲ給スル者ニアリテハ其手當額(年額ハ十二分十日分ヲ以テ)ニ依リ、一時手當ヲ給スル者又ハ手當ヲ給セサル者ニハ其爵位勳功學位ニ依リ左ノ區別ニ從ヒテ支給ス但爵位勳功學位ヲ併有スル場合ハ高キニ從ヒ其額ヲ定ム

一月手當二百圓以上ヲ受クル者又ハ有爵者、正六位以上、勳五等以上、功四級以上ノ者ハ内國旅費規則別表奏任官五等以上ノ額

一月手當百圓以上ヲ受クル者又ハ從六位、勳六等、功五級及學位ヲ有スル者ハ内國旅費規則別表奏任官六等以下ノ額

一月手當六十五圓以上ヲ受クル者又ハ正七位、從七位、勳七等及功六級ノ者ハ内國旅費規則別表判任官五級俸以上ノ額

一月手當三十圓以上ヲ受クル者又ハ正八位以下、勳八等及功七級ノ者ハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額

一月手當三十圓未滿ノ者又ハ位勳、功級、學位ヲ有セサル者ハ別表第一號ノ額

特別ノ事由ニ依リ本條ニ依リ難キモノハ其都度之ヲ定ム

第三條 雇員ノ旅費ハ左ノ區別ニ依リ支給ス但シ日給ノ者ハ三十日分ヲ以テ月額ト看做ス

一給料月額三十圓以上ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額

一給料月額三十圓未滿ノ者ニハ別表第一號ノ額

第四條 削除(大正二年第十二號ヲ以テ削除ス)

第五條 傭員ノ旅費ハ別表第二號ニ依リ支給ス但職工人夫等其ノ業務ニ從事シ賃金ヲ受クル日ハ旅費ヲ支給セス

第六條 學校職員及市町村吏員等ヲ特ニ政府ノ用務ヲ以テ旅行セシムル時ハ左ノ規定ニ依リ支給ス

一學校職員ニシテ奏任待遇ヲ受ク月俸二百圓以上ヲ受クル者ハ内國旅費規則別表奏任官五等以上、其二百圓未滿ノ者ハ奏任官六等以下、其判任待遇ヲ受ク月俸六十五圓以上

ヲ受クル者ハ判任官五級俸以上、其六十五圓未満ノ者ハ判任官六級俸以下ノ額
一市町村吏員ハ別表第一號ノ額

第七條 檢疫官ノ旅費ハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額ヲ支給ス
檢疫官ニシテ在官者ナルトキハ其本官相當ノ旅費ヲ支給ス但シ四等旅費ノ定額ヲ超過ス
ルコトヲ得ス

第八條 藥品監視員及畜牛結核病検査員タル獸醫ニシテ其價格ヲ以テ旅行スルトキハ在官
者ハ其本官相當ノ旅費ヲ、在官者ニアラサル者ハ俸給月額五十圓以上ヲ受クルモノハ内
國旅費規則別表判任官五級俸以上、其五十圓未満ノ者ハ判任官六級俸以下ノ額ヲ支給ス
第九條 朝鮮臺灣及樺太内ヲ旅行セシムルトキハ第三號表ニ依リ旅費ヲ支給ス

第一條乃至第三條ノ規定ハ本條ニ準用ス(明治四十三年第十六號改正)

第十條 朝鮮臺灣及樺太ニ旅行スル者ハ朝鮮臺灣又ハ樺太ニ最初ノ著船地迄ヲ内地旅行ト
シ朝鮮臺灣又ハ樺太ヨリ内地ニ旅行スル者ハ朝鮮臺灣又ハ樺太最後ノ發船地迄ヲ朝鮮臺
灣又ハ樺太内旅行トシテ各其ノ旅費ヲ支給ス但シ内地ヨリ朝鮮臺灣又ハ樺太へ著船當日
ハ朝鮮臺灣又ハ樺太旅費ノ日當、朝鮮臺灣又ハ樺太ヨリ内地へ乗船當日ハ内地旅費、日
當ヲ支給ス(同前)

第十一條 十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル者ニハ別表第四號ニ依リ支

度料ヲ支給ス其額ハ各廳長官相當ト認ムル額ヲ定メ之ヲ支給スヘシ

第十二條 備外國人ノ旅費ハ勅任待遇ヲ受クル者及俸給年額三千圓以上ヲ受クル者ハ内國
旅費規則別表二等旅費其ノ他ノ者ハ第二條ノ例ニ依リ支給ス
但シ特ニ約定アルモノハ其約定ノ額ニ依ル

第十三條 一般人民ヲ公務ニテ旅行セシムルトキハ左ノ區別ニ依リ旅費ヲ支給ス
一有爵者、從六位以上、勳六等以上、功五級以上及學位ヲ有スル者ハ内國旅費規則別表
判任官五級俸以上ノ額(明治四十五年第三號追加)

一正七位以下、勳七等以下、功六級以下ノ者ハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額

一位勳、功級、學位ヲ有セサル者ハ別表第一號ノ額

第十四條 本則所定ノ旅費額ハ地方ノ狀況ニ依リ之ヲ減少シ若クハ其全部又ハ一部ヲ支給
セサルコトヲ得

第十五條 内國旅費規則第十七條ニ依ル月額旅費ノ支給又ハ旅費定額ノ減少若クハ其
全部又ハ一部ヲ支給セサルノ必要アルトキハ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ之ヲ
爲スコトヲ得

第十六條 本則其他別ニ定ムルモノノ外其支給方ハ内國旅費規則ニ依ル
第十七條 本則中在官者ト稱スルハ退職者ヲ包含セス

附則

本則ハ明治四十三年七月ヨリ之ヲ施行ス
左ノ規定ハ之ヲ廢止ス

- 明治三十年内務省訓令第二十號
- 明治三十年内務省訓令第五二六號
- 明治三十年内務省訓令第九五〇號
- 明治三十一年内務省訓令第五二七號
- 明治三十七年内務省訓令第一九七號
- 明治三十九年内務省訓令第七七三號

(別表)

第一號

區分	鐵道賃	船賃	車馬賃	宿泊料	日當	食卓料	移轉料
	一哩ニ付	一海里ニ付	一里ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	一夜ニ付	移轉料
雇員	二錢	三錢	二拾錢	一圓	六拾錢	五十錢	十五圓以內

第二號

區分	鐵道賃	船賃	車馬賃	宿泊料	日當	食卓料	移轉料
	一哩ニ付	一海里ニ付	一里ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	一夜ニ付	移轉料
雇員	二錢	二錢	拾五錢	八拾錢	四十錢	三拾錢	拾圓以內

第三號表 (甲ハ朝鮮内旅費額 乙ハ臺灣及樺太ハ旅費額) (明治四十三年第十六號ヲ以テ)
 (本表ヲ改正ス)

等	一等親任官		二等勅任官		三等奏任官		四等官	
	甲	乙	甲	乙	甲	乙	甲	乙
鐵道賃	十	十	十	十	十	十	十	十
船賃	五	五	二	二	十	十	十	十
車馬賃	二	二	八	八	五	五	七	七
宿泊料	一圓	一圓	四圓	四圓	三圓	三圓	二圓	二圓
日當	四圓	四圓	五圓	五圓	四圓	四圓	三圓	三圓
食卓料	二圓	二圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓
移轉料	七圓	七圓	五圓	五圓	三圓	三圓	二圓	二圓

備員 乙中 四四 錢六 錢三 十 錢一 圓五 十 錢五 十 錢三 十 錢

第四號

區	分	支	度	料
勅任官	二百圓	以	內	
奏任官	二百五十圓	以	內	
判任官	七十五圓	以	內	
月俸又八月手當三十圓未滿ノ嘱託員及雇員	三十五圓	以	內	

●大藏省所管旅費支給規則

大藏省令第三十三號 明治四十三年七月一日

大藏省所管旅費支給規則左ノ通相定ム

大藏省所管旅費支給規則

第一條 大藏省所管旅費支辨ニ屬スル内國旅費ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本規則ニ依リ之ヲ支給ス

第二條 親任官待遇及勅任官待遇ノ者ニハ内國旅費規則別表各其ノ待遇官相當ノ額ヲ支給ス

第三條 試補其ノ他奏任官待遇ノ者ニハ内國旅費規則別表奏任官六等以下ノ額ヲ支給ス

第四條 見習其ノ他判任官待遇ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額ヲ支給ス

第五條 專賣局見習員及稅務監督局見習員ニハ別表甲額ヲ支給ス

第六條 雇員ハ左ノ各號ニ依ル但シ日額ノモノハ三十日分ヲ以テ月額ト看做ス

一 給料月額六十五圓以上ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官五級俸以上ノ額

二 給料月額三十圓以上六拾五圓未滿ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額

三 給料月額三拾圓未滿ノ者ニハ別表ノ額

第七條 嘱託員ハ左ノ各號ニ依ル

一 在官ノ者(退職ニアラサルモノ)ニハ其ノ相當ノ額

二 高等官待遇及判任官待遇ノ者ニハ第二條乃至第四條ノ各相當額

三 宮内官ニハ内國旅費規則別表ニ照準シ各其ノ相當額

四 警察官ニハ所管大臣ノ定メタル額、地方吏員ニハ内務大臣ノ定メタル額

五 前各號ニ該當セサル者ハ其ノ當時一定ノ手當ヲ給スル者ニアリテハ其ノ手當額(年拾二分ノ日額ハ三拾日額ヲ以テ月額ト看做ス)ニ依リ一時手當ヲ給スル者又ハ手當ヲ給セサル者ニアリ

テ其ノ爵位勳功ニ依リ左ノ區別ニ從ヒテ支給ス但シ後段ノ場合爵位勳功ヲ併有スルトキハ高キニ從フ

一 手當月額二百圓以上又ハ有爵者正六位以上、勳五等以上功四級以下ノ者ニハ内國旅費規則別表奏任官五等以上ノ額

二 手當月額百圓以上二百圓未滿又ハ從六位、勳六等及功五級ノ者ニハ内國旅費規則別表奏任官六等以上ノ額

三 手當月額六十五圓以上百圓未滿又ハ從七位以上正七位以下、勳七等及功六級ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官五級俸以上ノ額

四 手當月額三十圓以上六十五圓未滿又ハ正八位以下、勳八等及功七級ノ者ニハ内國旅費規則別表判任官六級俸以下ノ額

五 手當月額三拾圓未滿又ハ位勳功級ヲ有セサル者ニハ別表甲額
特殊ノ事情アル者付テハ其ノ身分及用務ノ性質ニ依リ其ノ都度之ヲ定ム

第八條 巡視、門衛、仕部其ノ他廳内取締ノ役務ニ服スル者ニハ別表甲額ヲ支給ス

第九條 廷丁、給仕、小使、馭者、水夫、火夫、倉庫夫、運搬夫、車夫、馬丁、職工及其

ノ他ノ傭人ニハ別表乙額ヲ支給ス但シ常傭ニアラサル職工其ノ他ノ傭人ニシテ其ノ業ニ從事シ勞銀ヲ給スル日ハ日當、宿泊料、若ハ食卓料ヲ支給セス

第十條 在勤廳所在地ノ市區町村内ノ出張ニシテ其ノ行程二里以上ニ涉ルトキハ定額ノ半額ニ相當スル日當ヲ支給ス

第十一條 旅行ノ性質ニ依リ特ニ月額又ハ日額ヲ以テ旅費ヲ支給スル必要アルトキハ認可ヲ經ヘシ

第十二條 旅費ノ定額ヲ減シ又ハ旅費ノ全部若ハ一部ヲ支給セサル必要アルトキハ各廳長官ニ於テ適宜之ヲ定メ報告スヘシ

第十三條 移轉料ハ各廳長官ニ於テ旅程ノ遠近、情况等ヲ斟酌シ規定ノ範圍内ニ於テ適宜相當ノ額ヲ支給スヘシ

第十四條 旅費支給上路程ノ計算ニ付テハ鐵道ハ鐵道官廳調、水路ハ、站部調、陸路ハ最近刊行ノ郵便線路圖ニ依リ計算スヘシ

第十五條 前項ニ據リ難キ場合ハ地方官廳若ハ市區町村長ノ證明スル處ニ據ルヘシ

第十六條 一日中旅費ノ支給額ヲ異スル場合ハ其ノ多キ額ヲ支給ス

第十七條 旅行中一時歸廳シタル場合ハ其ノ路程ハ之ヲ打切り計算ス
第十八條 雇員其ノ他内國旅費規則ニ規定ナキ者ノ旅費支給ニ關シテハ同規則ノ規定ヲ準用ス

附 則

本令ハ明治四十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス
 大藏省所管經費支辨ニ屬スル特定旅費規則、官船航行旅費規則及專賣局旅費支給規則ハ之ヲ廢止ス
 本令施行前雇員其ノ他ノ者轉勤ヲ命セラレ又ハ新ニ採用セラレタル者ニ支給スヘキ旅費ニ關シテハ仍特定旅費規則ニ依ル

旅 費 額

區 別	鐵道賃		船 賃		車馬賃		宿泊料		日 當		食卓料		移 轉 料
	一哩ニ付	一海里ニ付	一哩ニ付	一哩ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	一日ニ付	一夜ニ付					
甲額	二 錢	三 錢	二十錢	一 圓	六十錢	五十錢	十五圓以內						
乙額	二 錢	三 錢	十五錢	八十錢	四十錢	三十錢	十圓以內						

● 稅務監督局ノ經費ニ屬スル旅費支給規則

大藏省訓令第十八號 明治四十三年七月一日
 明治四十一年三月大藏省訓令第四號旅費支給規則左ノ通改正シ明治四十三年七月一日ヨリ施行ス

稅務監督局ノ經費ニ屬スル旅費支給規則

第一條 稅務監督局ノ經費ニ屬スル旅費ハ內國旅費規則及明治四十三年七月大藏省令第三十三號ニ依ルノ外此ノ規程ニ依リ支給スヘシ
 第二條 稅務監督官補、稅務官、技師、試補、屬、技手及雇員ノ其ノ所屬稅務監督局管内出張旅費ハ別表定ムル所ニ依ル
 第三條 稅務監督局所轄内ニ於ケル起任ノ場合ニハ左ノ移轉料ヲ支給ス

奏 任 官

八級俸以上

三十圓

判 任 官

月俸三十五圓未滿

十五圓

雇 員

月給三十圓以上

十五圓

稅務監督局所轄外ヨリ起任ノ場合ニハ左ノ移轉料ヲ支給ス

奏 任 官

五等以上

五十圓

判 任 官

六等以下

四十圓

奏 任 官

五級俸以上

三十圓

判 任 官

八級俸以上

二十五圓

月俸三十五圓未滿 二十圓
 員 月給三十圓以上 二十圓
 月給三十圓未滿 十五圓

前二項ノ場合ニ於テ試補ニハ六等以下ノ奏任官ニ支給スヘキ額、見習ニハ月俸三十五圓未滿ノ判任官ニ支給スヘキ額、見習員ニハ月給三十圓未滿ノ雇員ニ支給スヘキ額ヲ支給ス

第四條 土地檢査、問稅檢査及輸入稅拂戻調查ノ爲稅務署員其ノ所轄内ヲ巡回シタル場合ノ旅費ハ左ノ日額範圍内ニ於テ適宜支給額ヲ定ムヘシ

土地檢査 日額一圓二十錢以內

問稅檢査及輸入稅拂戻調查 日額一圓以內

雇員ノ土地檢査補助 日額一圓以內

第五條 交通至難其ノ他特別ノ事情アリテ前條ノ日額ニ依リ難キ地方ニ在リテハ認可ヲ經テ日額一圓五十錢迄ヲ支給スルコトヲ得

第六條 内國旅費規則第九條ニ該當スルトキハ勅任官ニハ一日七十錢、奏任官、試補ニハ一日五十錢判任官ニハ一日四十錢雇員ニハ一日三十錢ノ日當ヲ支給ス

第七條 在勤廳所在地ニ接續スル町村又ハ其ノ一部ニシテ所在地ニ準スルヲ適當ト認ムル

區域内ノ出張ニハ前條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第八條 削除(明治四十三年第十九號ヲ以テ削除ス)

第九條 第四條并第五條ノ支給額及第七條ノ準所在地ヲ定メタルトキハ其ノ要旨及旅行日ヲ申報スヘシ

附 則

從前ノ規程ニ依リ日額旅費増給ノ認可ヲ經タルモノハ此ノ規程ニ依リ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

●大藏省所管各廳員朝鮮臺灣及樺太内旅費支給規則

大藏省令第三十五號 明治四十三年七月二十五日

大藏省所管各廳員朝鮮臺灣及樺太内旅費支給規則

第一條 大藏省所管經費支辨ニ屬スル各廳判任以上ノ者及待遇官吏、囑託員、雇員以下ノ者朝鮮臺灣又ハ樺太内ヲ旅行スルトキハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本令ニ依リ別表ノ旅費額ヲ支給ス(明治四十三年第四十六號改正)

第二條 本令ニ依ル日當ハ朝鮮臺灣又ハ樺太ニ最初到著ノ日ヨリ該地最終出發ノ前日マテ日當以外ノモノハ朝鮮臺灣又ハ樺太ニ最初到著ノ地ヨリ該地最終出發ノ地ニ至ルマテヲ支給ス(同前)

第三條 樺太ニ赴任スル者及十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル者ニハ別表支度料ノ範圍内ニ於テ各廳長官適宜之ヲ定メ支給スヘシ

第四條 朝鮮臺灣及樺太在勤二年以上ノ者刑事裁判、懲戒處分若ハ自己ノ便宜ニ依ルニアラスシテ退官、休職又ハ解職ト爲リ三十日以内ニ前任地出發歸郷スルトキハ内國旅費規則若ハ大藏省所管旅費支給規則ニ依ル前官、前職又ハ本官相當ノ額ヲ以テ前任地ヨリ原籍地マテノ鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給ス(明治四十二年第四十六號改正)

第五條 朝鮮臺灣及樺太ニ在勤スル者在職中死亡シタルトキハ前ニ準シ歸郷旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ給ス(同前)

第六條 朝鮮臺灣及樺太在勤ノ者内地旅行中前二條ニ該當スルトキハ其ノ旅行カ公務タルト私事タルトヲ問ハス支給スヘキ金額ハ之ヲ半額トス(同前)

第七條 本令ニ規定セルモノヲ除ク外旅費支給方ニ關シテハ大藏省所管旅費支給規則ニ依ル

附 則

本令ハ明治四十三年七月ヨリ之ヲ施行ス

臺灣及樺太内旅費支給ニ關スル當省達ハ之ヲ廢止ス

朝鮮旅費額(明治四十二年第四十六號ヲ以テ追加)

別 表	親任官		勅任官		親任官		勅任官		親任官		勅任官	
	及大藏省所管旅費支給規則ニ於テ同相當額ヲ受クル者	及大藏省所管旅費支給規則ニ於テ同相當額ヲ受クル者	五級俸以上(及以下同上)	六級俸以上(及以下同上)	五級俸以上(及以下同上)	六級俸以上(及以下同上)	五級俸以上(及以下同上)	六級俸以上(及以下同上)	五級俸以上(及以下同上)	六級俸以上(及以下同上)	五級俸以上(及以下同上)	六級俸以上(及以下同上)
同上乙額ヲ受クル者	四	五	八	八	十	十	十	十	十二	十二	十五	十五
錢六	錢七	錢十	錢十	錢十	錢十五	錢十五	錢十五	錢十五	錢十八	錢十八	錢二十二	錢二十二
錢三十	錢四十	錢五十	錢五十	錢七十	錢七十	錢七十	錢七十	錢七十	一圓	一圓	一圓	一圓
五圓	二圓	二圓	三圓	三圓	四圓	四圓	四圓	四圓	五圓	五圓	七圓	七圓
五十錢	一圓	一圓	一圓	二圓	二圓	二圓	二圓	二圓	三圓	三圓	四圓	四圓
五十錢	一圓	二十錢	五十錢	一圓	五十錢	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓
四十錢	六十錢	九十錢	九十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	五十錢	五十錢	七十錢	七十錢
十五圓	二十圓	三十圓	三十圓	五十圓	五十圓	五十圓	五十圓	五十圓	七十圓	七十圓	百圓	百圓
以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內	以內

旅 費 額

區別	親任官及大藏省所管旅費支給規則ニ於テ同官相當額ヲ受クル者	勅任官(及以下同上)	奏任官(五等以上)及(以下)	判任官(五級)及(以下)	官任官(六級)及(以下)	大藏省所管旅費支給規則ニ於テ甲額ヲ受クル者	同額ヲ受クル者
鐵道(一哩)付	十五錢	十二錢	十錢	十錢	八錢	五錢	四錢
船賃(一海里)付	二十二錢	十八錢	十五錢	十五錢	十錢	七錢	六錢
車馬賃(一里)付	一圓三錢	一圓	七角	七角	五角	四角	三角
宿泊料(一夜)付	七圓	四圓五錢	三圓	三圓	二圓	一圓五錢	一圓
日當食卓料(一日)付	四圓五錢	三圓	二圓	二圓	一圓	七角	五角
夜食卓料(一夜)付	二圓	一圓七錢	一圓	一圓	九角	七角	五角
移轉料	百圓以內	七十圓以內	五十圓以內	五十圓以內	三十圓以內	十五圓以內	十圓以內
支度料	二百圓以內	三百圓以內	二百圓以內	二百圓以內	百圓以內	五十圓以內	三十圓以內
出張料	二百圓以內	二百圓以內	百圓以內	百圓以內	五十圓以內	三十圓以內	二十圓以內

●司法省所管內國旅費規則
 司法省訓令第二號 明治四十三年七月二日

司法省所管內國旅費規則左ノ通相定ム

司法省所管內國旅費規則

- 第一條 司法省所管內國旅費ハ本令ニ定ムルモノノ外明治四十三年勅令第二百七十四號內國旅費規則ニ依リ之ヲ支給ス
- 第二條 判任官以內ノ者樺太朝鮮又ハ臺灣內ヲ旅行スル場合ニ於ケル旅費ハ第一表ニ依ル
- 第二條ノ二、親任待遇者及勅任待遇者ノ旅費ハ內國旅費規則別表及本令第一表ニ依リ各其ノ待遇官相當ノ額ヲ支給ス(大正三年第二號ヲ以テ追加)
- 第三條 奏任待遇者ノ旅費ハ第二表第二號ニ依リ判任待遇者ノ旅費ハ同第四號ニ依ル但シ司法官試補第二回試驗ノ爲メ上京スル場合ニ於テハ第二表第四號ニ依リ往復旅費ヲ支給シ滞在中ノ宿泊料及日當ハ之ヲ支給セス
- 第四條 看守、女監取締、授業及機關手ノ旅費ハ第二表第五號ニ依リ守衛、廷丁、給仕小使其ノ他ノ傭人ノ旅費ハ同第六號ニ依ル
- 第五條 工師、工手、雇員及囑託員ノ旅費ハ給料若ハ手當ヲ受クル者ニ付テハ其月額ヲ以テ定メタル者ハ三十日分ヲ合算シタル額ニ依リ受ケサル者ニ付テハ爵位勳功ニ依リ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ支給ス但シ爵位勳功ヲ併有スル場合ハ高キニ從フ
- 一 月額二百圓以上ノ者有爵者又ハ正六位以上、勳五等以上及功四級以上ノ者ハ第二表

第一號

二月額百圓以上二百圓未滿又ハ從六位、勳六等及功五級ノ者ハ第二表第二號
 三月額六十五圓以上百圓未滿又ハ正七位若ハ從七位、勳七等及功六級ノ者ハ第二表第三號

四月額三十圓以上六十五圓未滿又ハ正八位以上勳八等及功七級ノ者ハ第二表第四號
 五月額三十圓未滿又ハ位勳功級ヲ有セサル者ハ第二表第五號

囑託員ニシテ在官ノ者退職者ニ付ラハ其ノ官相當ノ旅費ヲ支給ス

第六條 在勤廳所在地ノ市區町村内ノ出張ニシテ官ヨリ船、車、馬等ヲ供シタル地合ニ於テハ内國旅費規則第九條ノ日當ヲ支給セス

第七條 樺太ニ赴任スル者ニハ第三表甲額ノ支度料ヲ支給ス

十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル者ニハ第三表乙額ノ支度料ヲ支給スルコトヲ得

第八條 内地ヨリ樺太朝鮮又ハ臺灣ニ旅行スルトキハ樺太朝鮮又ハ臺灣最初ノ著船地迄ヲ内地旅行トシ樺太朝鮮又ハ臺灣ヨリ内地ニ旅行スルトキハ樺太朝鮮又ハ臺灣最後ノ發船地迄ヲ樺太朝鮮又ハ臺灣旅行トシテ各其ノ旅費額ヲ支給ス但シ内地ヨリ樺太朝鮮又ハ臺灣ニ著船當日ハ樺太朝鮮及臺灣内旅費額ノ日當、樺太朝鮮又ハ臺灣ヨリ内地へ發船當日

ハ内地旅費額ノ日當ヲ支給ス(明治四十二年第二號改正)

第九條 左ニ掲クル者退官、退職、休職若ハ解職ト爲リ三十日以内ニ樺太ヲ出發歸郷スルトキハ歸郷旅費ヲ支給ス但シ刑事裁判、懲戒處分又ハ自己ノ便宜ニ依ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一 樺太在勤二年以上ニ涉ル判任官以上ノ者

二 樺太在勤三年以上ニ涉ル官吏待遇者

三 樺太在勤五年以上ニ涉ル工師、工手、雇員、囑託員、授業手、機關手及守衛、廷丁給仕、小使其ノ他ノ傭人

樺太在勤中死亡シタルトキハ勤績年數ニ拘ハラヌ歸郷旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス

第十條 歸郷旅費及遺族支給金ハ内地旅費額ニ依リ舊在勤地ヨリ原籍地迄ノ路程ニ應スル前官、前職又ハ本官相當ノ鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給シ宿泊料及日當ヲ支給セス

第十一條 判任官以下ノ者ニ對シ月額又ハ日額ヲ以テ旅費ヲ支給スル必要アルトキ又ハ旅費ノ定額ヲ減シ又ハ其ノ全部若ハ一部ヲ支給セサル必要アルトキハ豫メ司法大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十二條 第三條乃至第五條ニ掲クル者ノ旅費支給方ニ付テハ内國旅費規則ノ規定ヲ準用

ス

附 則

第十三條 内國旅費規則及本令ニ定メタル移轉料ハ當分ノ内之ヲ支給セス

第十四條 臨檢、捜査、兼補又ハ代理ノ爲メ出張スル場合ニ於テ支給スル宿泊料及日當ハ
樺太ヲ除クノ外當分ノ内左ノ額ニ依ル但シ内國旅費規則第八條及第九條ニ依リ日當半額
以内ヲ支給スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一 奏任官及奏任待遇者 宿泊料一夜ニ付一圓五十錢日當一日ニ付一圓

二 判任官及判任待遇者 宿泊料一夜ニ付一圓日當一日ニ付五拾錢

第十五條 本令ハ明治四十三年七月ヨリ施行ス

明治三十一年司法省訓令第九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●帝國議會議長副議長議員歳費及旅費支給規則

勅令第二百六十三號 明治二十三年十月二十四日

帝國議會議長副議長議員及旅費支給規則

第一條 帝國議會議長副議長及議員ノ歳費ハ毎年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ
一歳トシ計算ス

第二條 議長副議長及議員ノ歳費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開ノ後三十日以内ニ

其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以内ニ支給ス

七月以後臨時議會又ハ憲法第四十五條ノ議會開會ノ場合ニ於テハ其ノ閉會ノ當月マテノ
分ノ歳費ヲ閉會後七日以内ニ支給ス六月以前開會シ七月以後ニ於テ閉會シタルトキ亦同
シ(大正二年第八十六號ヲ以テ追加)

六月以前憲法第四十五條ノ議會開會ノ場合ニ於テハ六月マテノ分ノ歳費ヲ閉會後七日以
内ニ支給ス(同前)

第三條 議長副議長ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス

議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條 貴族院勅任議員ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス

第五條 議長副議長及議員退職職除名ノ場合ニ於テハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第六條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歳費ハ解散ヲ命セラレ
タル當月分マテヲ支給ス

第七條 衆議院解散ヲ命セラレタル後選舉セラレタル議員及補缺議員ノ歳費ハ其ノ選舉セ
ラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條 衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如何ナル場合ヲ問ハス歳費ハ同

一人ニ對シ重複支給セス

第九條 官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第十條 議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歳費ノ前半額ト歸郷旅費ノ後半額ト同時ニ之ヲ支給ス
臨時議會又ハ憲法第四十五條ノ議會開會ノ場合ニ於テハ旅費ハ其ノ都度之ヲ支給ス

(大正三年第百八十六號ヲ以テ追加)

第十一條 旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其ノ住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條 議院ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セ

第十三條 汽車旅行ハ一日二百哩詰汽船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ日當ヲ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿タサル端數ハ切捨トス

第十四條 召集ニ應セサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅費表(明治三十年二百三十五號改正)

汽車	一哩	汽船	一海里	車馬	一哩	日當
五	錢	六	錢	二十五	錢	三
						圓

●大禮使旅費支給規程

大藏省令第一號 大正三年一月三十日

大禮使旅費規程左ノ通定ム

大禮使旅費支給規程

第一條 大禮使經費ノ支辨ニ屬スル旅費ハ本規程ニ依リ之ヲ支給ス

第二條 旅費ハ左ノ區別ニ從ヒ内國旅費規則別表ノ定額ヲ支給ス

一 本官アル者ニハ本官相當ノ額、待遇アル者ニハ其ノ待遇相當ノ額

二 宮内官ニハ内國旅費規則別表ニ照準シ各其ノ相當額

三 雇員(宮内省其ノ他各官廳勤務ノ者ヲ含ム以下同シ)及宮内省勤務ノ等外職員又ハ雜仕ニシテ給料月額六十

五圓以上ノ者ニハ判任官五級俸以上ノ額、其ノ二十五圓以上ノ者ニハ判任官六級俸

以下ノ額

前項第一號ニ該當スル者ニシテ官等又ハ級俸ノ配當ナキ者ニ支給スル額ハ各其ノ最高定額ヲ超過セサル範圍内ニ於テ大禮使長官之ヲ定ム

第三條 前條ニ該當セサル者ノ旅費ニ關シテハ大藏省所管旅費支給規則ノ定ムル所ニ依ル
但シ雇員及宮内省勤務ノ等外職員又ハ雜仕ニシテ給料月額二十五圓未滿ノ者及給料ナキ
モノニハ同規則別表ノ甲額、小者ニハ乙額ヲ支給ス

第四條 朝鮮、臺灣又ハ樺太内旅行ニ在リテハ大藏省所轄經費支辨ニ屬スル各廳員朝鮮、
臺灣及樺太内旅費支給規則ニ依リ第二條及第三條ノ區別ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第五條 旅費ノ支給方ニ關シ本規程ニ定メナキモノハ内國旅費規則及大藏省所管旅費支給
規則ニ準據ス

第六條 本規程ニ依リ難キ事由アル場合ニ於テハ其ノ都度別ニ之ヲ定ム
附 則

本令ハ大正二年十一月二十二日以後ノ旅行ニ適用ス

●大喪使旅費規程

大藏省令第十號 大正三年五月二十二日

大喪使旅費規程左ノ通相定ム

大喪使旅費規程

第一條 大喪費ノ支辨ニ屬スル旅費ハ本規程ニ依リ之ヲ支給ス

第二條 旅費ハ左ノ區別ニ從ヒ内國旅費規則別表ノ定額ヲ支給ス

一 本官アル者ニハ本官相當ノ額、待遇アル者ニハ其ノ待遇相當ノ額

二 宮内官ニハ内國旅費規則別表ニ照準シ各其ノ相當額

三 大勳位貴衆兩院議長ニハ親任官相當ノ額

四 有爵者(朝鮮貴族ヲ含ム)從四位以上、勳三等以上ノ者ニハ勅任官相當ノ額

五 府會議長ニハ奏任官五等以上ノ額、府參事會員ニハ奏任官六等以下ノ額

六 葬場殿ニ參集ヲ命セラレタル各夫人ノ旅費ハ其ノ夫ノ受クヘキ額

七 雇員(宮内省其他各官廳勤務ノ者ヲ含ム以下同シ)及宮内省勤務ノ等外職員又ハ雜仕ニシテ給料月額六十

五圓以上ノ者ニハ判任官五級俸以上ノ額其ノ二十五圓以上ノ者ニハ判任官六級俸以

下ノ額

前項第一號ニ該當スル者ニシテ官等又ハ級俸ノ配當ナキ者ニ支給スル額ハ各其ノ最高定

額ヲ超過セサル範圍内ニ於テ長官之ヲ定ム

第三條 前條ニ該當セサル者ノ旅費ニ關シテハ大藏省所管旅費支給規則ノ定ムル所ニ依ル

但シ雇員及宮内省勤務ノ等外職員又ハ雜仕ニシテ給料月額二十五圓未滿ノ者及給料ナキ

者ニハ同規則別表ノ甲額、小者ニハ乙額ヲ支給ス

第四條 特ニ參列ヲ命セラレ旅行スル者ニハ順路ニ依リ居住地ヨリ用務地ニ至ル往復旅費

ヲ支給ス但シ用務地到着ノ翌日以後ニ於ケル滯在中ノ日常及宿泊料ハ參列ノ當日ニ限り

之ヲ支給シ東京、代々木間ノ鐵道賃又ハ車馬賃ハ之ヲ支給セス

第五條 在京者及殯宮又ハ葬場殿ヲ距ル三里以内ノ地ニ居住スル者ニシテ殯宮葬場殿簿内奉送又ハ葬場殿參集ノ場合ニ於テハ旅費ヲ支給セス

第六條 朝鮮、臺灣又ハ樺太内旅行ニ在リテハ大藏省所管經費支辨ニ屬スル各廳員朝鮮、臺灣及樺太内旅費支給規則ニ依リ、關東州内ノ旅行ニ在リテハ外國旅費規則ニ依リ第二條ノ區別ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第七條 鐵道事務ニ從事スル鐵道院職員ノ旅費ハ鐵道院内國旅費規程ノ定ムル所ニ依ル

第八條 陸海軍軍人軍屬ニハ左ノ區別ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

一 陸軍軍人軍屬ニシテ單獨旅行ノ者ニハ陸軍旅費規則第一表(朝鮮、臺灣及樺太ニ在リテハ第八表、支那ニ在リテハ第九表)ノ定額、隊伍旅行ノ者ニハ陸軍大臣ノ定ムル所ニ依リ同規則第五表ノ定額(旅籠料ニ限リ倍額)以内ニ於テ實費支辨トシ別ニ第六表ノ旅次手當ヲ支給ス

二 海軍軍人軍屬ニシテ單獨旅行ノ者ニハ海軍内國旅費規則第二表ノ定額、隊伍旅行ノ者ニハ海軍内國旅費規則第六表ノ定額

前項旅費ノ支給方ニ關シテハ陸軍ニ在リテハ陸軍旅費規則海軍ニ在リテハ海軍内國旅費規則ニ準據ス但シ第四條及第五條ノ適用ヲ妨ケス

第九條 警務ニ從事スル警察官ノ旅費ハ警察官吏内國旅費規則ノ定ムル所ニ依ル

第十條 旅費ノ支給方ニ關シ本規程ニ定メナキモノハ内國旅費規則及大藏省所管旅費支給規則ニ準據ス

第十一條 本規程ニ依リ難キ事由アル場合ニ於テハ其ノ都度別ニ之ヲ定ム
附 則

本令ハ大正三年四月十一日以後ノ旅行ニ之ヲ適用ス

●警察官吏内國旅費規則

內務省訓令第七號 明治四十三年七月二日

警察官吏内國旅費規則左ノ通之ヲ定ム

警察官吏内國旅費規則

第一條 警察官吏ノ旅費ハ本則ニ定ムルモノノ外内國旅費規則及內務省所管旅費規則ノ規定ニ依ル

第二條 警察署詰又ハ警察分署詰警視、警部、警部補其ノ管轄内ヲ巡廻スルトキハ普通ノ旅費ヲ給セス左ノ規定ニ依ル但シ特別用務ノ爲臨時出張スルトキハ此ノ限ニ在ラス

一 巡廻陸路六里未滿、鐵道十哩未滿、水路十海里未滿ノトキハ日當ヲ給セス宿泊シタルトキニ限リ宿泊料ヲ支給シ陸路六里以上、鐵道十哩以上、水路十海里以上ノトキハ日當ヲ支給シ尙宿泊シタルトキハ宿泊料ヲ支給ス

日當ハ一日ニ付警視ニ在リテハ一圓二十錢警部、警部補ニ在リテハ八十錢トシ宿泊料ハ一夜ニ付警視ニ在リテハ一圓五十錢警部、警部補ニ在リテハ一圓トス

二 巡廻地ノ狀況又ハ公務上ノ都合ニ依リ已ムヲ得ス鐵道旅行又ハ水路旅行ヲ爲シタルトキハ鐵道賃又ハ船賃ノ實費ヲ支給ス

第三條 管轄内巡廻旅費ハ日當及宿泊料ニ限リ月額ヲ定メ之ヲ支給スルコトヲ得

第四條 巡查ノ普通旅費ハ第一號表ニ依リ之ヲ支給シ其ノ支給方ハ内國旅費規則ノ規定ニ依ル但シ新ニ採用セラル、場合又ハ甲廳ヨリ乙廳ニ轉スル場合ニ於ケル赴任手當ハ之ヲ支給セス

第五條 特別ノ事情ニ依リ定額ノ鐵道賃、船賃又ハ車馬賃ヲ以テ其ノ實費ヲ支辨シ難キ場合ニ於テハ實費額ヲ支給スルコトヲ得

第六條 巡查管轄内又ハ持区内ヲ巡廻スルトキハ第四條ノ旅費ヲ支給セス左ノ規定ニ依ル但シ特別用務ノ爲臨時出張スルトキハ此ノ限ニ在ラス

一 管轄内又ハ持区内ヲ巡回スルトキハ日當ヲ給セス宿泊シタルトキニ限リ一夜七十錢ノ宿泊料ヲ支給ス但シ巡回日數二日以上ニ亘ルトキハ最初ノ一日ヲ除キ一日三十錢ノ日當ヲ支給ス

二 巡回地ノ狀況ニ依リ已ムヲ得ス鐵道旅行又ハ水路旅行ヲ爲シタルトキハ鐵道賃又ハ

船賃ノ實費ヲ支給ス

第七條 巡查管轄内又ハ持区内巡廻旅費ニ關シテハ第三條ヲ準用ス

第八條 警察官吏朝鮮臺灣及樺太内ヲ旅行スルトキハ朝鮮臺灣又ハ樺太最初ノ上陸地ヨリ最後ノ發船地迄第二號表ニ依ル旅費ヲ支給ス

朝鮮臺灣又ハ樺太著船當日ヨリ上陸迄ノ日當ハ第二號表ニ依リ發船當日ノ日當ハ普通旅費ニ依リ之ヲ支給ス(明治四十三年第十六號改正)

第九條 毎年十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル警察官吏ニハ第三號表ニ依ル範圍内ニ於テ廳府縣長官ノ定メタル支度料ヲ支給ス

第十條 本則ノ旅費額ハ地方ノ狀況ニ依リ廳府縣長官ニ於テ之ヲ減少シ若ハ其ノ一部ヲ支給セサルコトヲ得

附 則

本則ハ明治四十三年七月ヨリ之ヲ施行ス

第一號表

鐵道賃	船賃	車馬賃	宿泊料	日當	食卓料	移轉料
一哩ニ付	一海里ニ付	一里ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	一夜ニ付	
二錢	三錢	二十錢	一圓	六十錢	五十錢	十五圓
						以內

第二號表

等	級	鐵道賃		船賃		車馬賃		宿泊料		日當		食卓料	
		一哩ニ付	一海里ニ付	一里ニ付	一里ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	一夜ニ付					
奏任官	五等以上	錢十五	錢十五	錢七十	錢七十	三圓三十錢	二圓二十錢	一圓	三十錢				
奏任官	六等以下	錢十五	錢十五	錢七十	錢七十	二圓八十錢	一圓七十錢	一圓	三十錢				
判任官	五級俸以上	錢十	錢十	錢五十	錢五十	二圓三十錢	一圓二十錢	九圓九十錢					
判任官	六級俸以下	錢十	錢十	錢五十	錢五十	二圓三十錢	一圓二十錢	九圓九十錢					
巡査	五	錢七	錢七	錢四十	錢四十	一圓五十錢	七圓七十錢	五十錢					
區	分	支		度		料							
奏任官	任	百五十圓		以內									
判任官	任	七十五圓		以內									
巡査	査	三十五圓		以內									

第二號表

●内務省土木事業從務員旅費月額支給規定

内務省訓令第九號

明治四十四年六月一日

土木局

土木出張所

土木事業從務員旅費月額支給規定左ノ通相定メ明治四十四年六月一日ヨリ施行ス

明治三十八年四月一日内務省訓令第二百六十四號土木出張所員旅費月額支給規程ハ之ヲ廢止ス

内務省土木事業從務員旅費月額支給規定

第一條 工區事務所、土地收用事務所、測量其他ノ調査及在勤廳所在地工場ニ從務スルモノニハ其ノ從務中旅費トシテ左表ノ月額ヲ支給スヘシ

(大正元年内務省訓令第三十一號ヲ以テ本條及第二條改正ス)

(一)工區事務所員旅費月額

工區主任	技師	五等以上	四拾圓
司	技師	六等以下	參拾圓
技師	技師	五等以上	貳拾五圓
同	技師	六等以下	拾八圓
工場主任	同	五級俸以上	拾貳圓
同	同	六級俸以下	拾圓

(二) 土地收用事務所員旅費月額		技師	五等以上	貳拾圓
同		同	六等以下	拾五圓
同		同	五級俸以上	拾圓
同		同	六級俸以下	八圓
同		同	〔月給參拾圓以上〕	八圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	六圓
同		同	未滿	六圓
主任		技師	五等以上	四十圓
同		同	六等以下	參拾圓
同		同	五級俸以上	參拾圓
同		同	六級俸以下	貳拾五圓
同		同	五級俸以上	貳拾五圓
同		同	六級俸以下	貳拾圓
同		同	〔月給三十圓以上〕	貳拾圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	拾五圓
同		同	未滿	拾五圓
附屬員		技師	五等以上	六拾圓
同		同	六等以下	五拾圓
同		同	五級俸以上	四拾圓
同		同	六級俸以下	參拾五圓
同		同	〔月給參拾圓以上〕	參拾五圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	參拾圓
同		同	未滿	參拾圓
(三) 測量其ノ他ノ調査員旅費月額		技師	五等以上	六拾圓
同		同	六等以下	五拾圓
同		同	五級俸以上	四拾圓
同		同	六級俸以下	參拾五圓
同		同	〔月給參拾圓以上〕	參拾五圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	參拾圓
同		同	未滿	參拾圓

(四) 在勤廳所在地工場員旅費月額		技師	五等以上	貳拾圓
同		同	六等以下	拾五圓
同		同	五級俸以上	拾圓
同		同	六級俸以下	八圓
同		同	〔月給參拾圓以上〕	拾五圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	拾圓
同		同	未滿	拾圓
工場主任		技師	五等以上	貳拾圓
同		同	六等以下	拾五圓
同		同	五級俸以上	拾圓
同		同	六級俸以下	八圓
同		同	五等以上	拾五圓
同		同	六等以下	拾圓
同		同	五級俸以上	八圓
同		同	六級俸以下	八圓
同		同	〔月給三十圓以上〕	拾五圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	拾圓
同		同	未滿	拾圓
附屬員		技師	五等以上	拾五圓
同		同	六等以下	拾圓
同		同	五級俸以上	八圓
同		同	六級俸以下	八圓
同		同	〔月給三十圓以上〕	拾五圓
同		同	〔日給壹圓以上〕	拾圓
同		同	未滿	拾圓

第二條 測量其ノ他ノ調査ニ従事スルモノハ其ノ業務ヲ始ムル地ニ著ノ翌日ヨリ歸途ニ就クノ日ノ前日迄日割ヲ以テ月額ヲ支給スヘシ(同前)

第三條 事務所ニ従務スルモノハ其ノ事務所ニ著ノ翌日ヨリ同所ヲ發スル前日マテ日割ヲ以テ月額ヲ支給スヘシ

第四條 事務所又ハ工場ニ従務スルモノ片道三里以上隔リタル他ノ事務所又ハ工場ヲ兼務スルトキハ第一條ノ月額ニ參圓ヲ増給スヘシ但兼務場所遠距離ニ涉リ増給ノ範圍内ニ於テ支辨能ハサルトキハ特ニ一般旅費ヲ支給スルコトアルヘシ

前項但書ニ依リ一般旅費ヲ支給スル日ニ對シテハ第一條ノ月額及本條ノ増給額ヲ支給セ

第五條 在勤廳又ハ勤務場所ヨリ直ニ第一條ノ業務ニ従事スルモノハ其ノ當日ヨリ月額ヲ支給スヘシ

第六條 在勤廳又ハ勤務場所ヲ發シ用務地へ著ノ日マテ該地ヲ發シ在勤廳又ハ勤務場所ニ著ノ日マテハ一般旅費ヲ支給スヘシ

第七條 事務所又ハ工場移轉若ハ甲場所ノ用務ヲ終了シ乙場所ニ移ルトキハ其ノ出發ノ日ヨリ著ノ日マテハ一般旅費ヲ支給スヘシ

第八條 月額日割ノ方法ハ支給スヘキ日數ニ月額ヲ乘シテ之ヲ三十分スルモノトス但シ一旅行毎ニ打切り計算スヘシ

●林區署管内旅費規則

農商務省訓令第二十二號 明治四十三年七月一日

林區署管内旅費規則

第一條 林區署管内ノ旅費ハ本則ニ定ムルモノノ外内國旅費規則ニ依ル

第二條 大林區署管内旅行ニハ甲號表ノ旅費ヲ支給ス

第三條 費途又ハ支給額ヲ異ニスル用務ヲ兼テ旅行シタルトキハ一方ノ用務ヲ終リ更ニ他ノ一方ノ用務ニ移リタル時ヲ以テ區分シ旅費ヲ支給ス但シ一日ノ内彼此交渉シタル場合ニ於テ費途ヲ異ニスルモノハ主タル用務ニ依リ、支給額ヲ異ニスルモノハ費途ノ異同ヲ問ハス支給額ノ多キ方ニ依ル

前項區分ノ計算ニ依リ生シタル陸路、鐵道、水路ノ路程一位未滿ノ端數ハ主タル用務ニ併算スヘシ

第四條 陸路六哩未滿、鐵道四十八哩未滿、水路三十海里未滿ノ旅行ニシテ宿泊シタル場合ハ歸著當日ノ日當ヲ給セス

第五條 大林區署員左記各號ノ一ニ該當スル用務ニ依リ旅行シタルトキハ日數ニ應シ乙號

表ノ日額ヲ支給ス、小林區署同上ノ用務ノ爲其ノ管外ニ旅行シタルトキ亦同シ但シ在勤地ト用務地間ノ往復及一日ノ陸路二里以上、鐵道十六哩以上、水路十海里以上ニ涉ル
甲乙用務地間ノ旅行ニ付テハ此ノ限リニ在ラス

一 國有林野存廢區別及處分調査
二 測量及境界査定

三 施業案編成
四 造林并土木事業及其ノ設計

五 斫伐及製材作業ノ監督
六 建築工事ノ設計及監督

七 甲大林區署ヨリ乙大林區署ヲ兼務シ其ノ兼務地ニ滞在

第六條 小林區署員其ノ管内ニ出張シタルトキハ日數ニ應シ丙號表ノ日額ヲ支給ス

甲小林區署ヨリ乙小林區署ヲ兼務シ又大林區署ヨリ小林區署ヲ兼務シ其ノ兼務地ニ出張シタルトキ亦同シ但シ宿泊セサル日ハ其ノ半額ヲ支給ス

沖繩小林區署管内ノ保護區詰員ニハ前項日額ノ二割五分其ノ他ノ交通不便ナル保護區ノ詰員ニハ農商務大臣ノ認可ヲ受ケ二割以內ヲ増加支給スルコトヲ得(大正二年第五號追加)出張中鐵道十六哩以上、水路十海里以上ニ互ルトキハ日額ノ外小林區署長ハ二等、小林區署及保護區詰員ハ三等ノ鐵道賃若ハ船賃ノ實費ヲ支給スルコトヲ得

第七條 小林區署員左記各號ノ一ニ該當スル用務ニ依リ其ノ管内ニ出張シタルトキハ甲號表及丁號表ノ旅費ヲ支給ス(明治四十二年第二十號及同四十四年第一號改正)

一 訴訟ノ爲又ハ證人、參考人、鑑定人トシテ裁判所ニ出張

二 裁判所又ハ檢事局ノ命令若ハ要求ニ依リ現場ニ出張

三 刑事被告人ノ護送

四 甲小林區署ヨリ乙小林區署ヲ兼務シ其ノ兼務地ニ往復甲署ヨリ乙署ノ用勅ニ着手ノ地及乙署用務終了ノ地ヨリ甲署迄

五 大林區署長ニ於テ非常急行又ハ上級官廳其ノ他ノ高等官ノ隨伴ヲ命シタルトキ

第八條 第五條及第六條ノ規定ハ沖繩小林區署管内ノ出張ニ適用セス但シ沖繩小林區保護區詰員ノ出張ハ此ノ限ニ在ラス(明治四十二年第二十號改正)

第九條 第六條及第七條ノ規定ハ大林區署直轄ニ屬スル製材所、斫伐事業場及貯水場詰員ノ部内出張ノ場合之ヲ準用ス但シ製材所長及斫伐事業場主任ハ小林區署長ニ準シ其ノ他ノ者ハ小林區署保護區詰員ニ準ス

前項部内ノ區域ハ其ノ所在地ヲ管轄スル小林區署ノ區域ニ依ル但シ本項ニ依リ難キ場合ニ於テハ其ノ事由ヲ具シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第九條ノ二 在勤地内ノ出張ニシテ陸路二里以上ニ涉ルトキハ甲號表及丁號表同上五里以上ニ涉ルトキハ内國旅費規則及明治四十三年六月會第二九〇號達第一號表ノ定額半額以內ノ日當ヲ支給スルコトヲ得(明治四十二年第二十號及同四十四年第二號改正)

第十條 管内、部内又ハ在勤地内ノ用務ニ依リ出張ノ際其ノ必要上管外、部外又ハ在勤地

外ニ出張若ハ宿泊シタルトキハ第二條、第五條、第六條及第九條ノ二ノ規定ヲ適用ス
在勤地ニ接續シ其ノ距離一里ニ滿タサル地ハ在勤地ニ準ス

第十一條 森林主事教練規則ニ依リ林務教習又ハ補習ノ爲教練地ニ出張シタルトキハ住復
旅費ヲ除クノ外日額六十錢ヲ支給ス

第十二條 試補其ノ他ノ者ニ大林區署管内ノ旅行ヲ命シタルトキハ左ノ區別ニ依リ旅費ヲ
支給ス

- 一 試補ハ甲號表三等及乙號表一等ノ額
- 二 見習ハ甲號表五等、乙號表三等及丙號表三等ノ額
- 三 雇員ハ乙號表四等、丙號表四等及丁號表一等ノ額
- 四 囑託員ニシテ本官ヲ有スル者(退職者ニアラサルモノ)ニハ其ノ本官相當額
前項ニ該當セサル者ハ其ノ當時一定ノ手當ヲ給スル者ニ在リテハ其ノ手當額(年額ハ十日額ハ卅日分ヲ以テ依リ一時手當ヲ給スル者又ハ手當ヲ給セサル者ニハ其ノ爵位動功ニ依リ左ノ區別ニ從ヒ旅費ヲ支給ス但爵位動功ヲ併有スル場合ハ高キニ從テ其額ヲ定ム
- 一 手當月額二百圓以上又ハ有爵者、正六位以上、勳五等以上及功四級以上ノ者ハ甲號表二等及乙號表一等ノ額
- 二 手當月額百圓以上二百圓未滿又ハ從六位、勳六等及功五級ノ者ハ甲號表三等及乙號表一等ノ額

表一等ノ額

- 三 手當月額六十五圓以上百圓未滿又ハ從七位以上正七位以下、勳七等及功六級ノ者ハ甲號表四等及乙號表二等ノ額
- 四 手當月額三十圓以上六十五圓未滿又ハ正八位以下、勳八等及功七級ノ者ハ甲號表五等及乙號表三等ノ額
- 五 手當月額三十圓未滿又ハ位勳功級ヲ有セサル者ハ乙號表四等及丁號表一等ノ額
巡視ニハ丁號表一等ノ額、小者(給仕、小使、職工、定夫等)ニハ同表二等ノ額ヲ支給ス但シ事業地ニ於テ使用スル小者ニシテ該事業ノ爲賃金ヲ給スル日ハ宿泊料及日當ヲ支給セス
小者ニシテ森林鐵道ノ機關車運轉ニ從事シ若ハ該鐵道ノ用務ノ爲其ノ沿線ヲ旅行シ途中ニ於テ宿泊シタル日ハ宿泊料四十錢ヲ給シ日當ヲ支給セス(明治四十四年第十八號追加)
- 第十三條 大林區署長ハ本則ニ依リ支給スル旅費ノ定額ヲ減少スルコトヲ得
此ノ場合ニ於テハ其ノ旨農商務大臣ニ報告スヘシ但シ第十二條ニ關スルモノニ付テハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

附 則

第十四條 本則ハ明治四十三年七月ヨリ之ヲ施行ス
林區署旅費規則ハ之ヲ廢止ス

(明治四十五年第二號ヲ以テ甲號表中改正)

甲號表

等	級	鐵道賃	船賃	車馬賃	宿泊料	日當	移轉料
等	勅任官	一哩ニ付	一海里ニ付	一里ニ付	一夜ニ付	一日ニ付	
一等	大林区署長	錢六	錢三十五	錢三	圓二	圓	
一等	奏	大林区署長	錢四	錢五	錢二十七	錢二	圓一圓五十錢
二等	任	同	課長	錢四	錢五	錢二十四	錢一圓八十錢
二等	官	同	課長	錢四	錢五	錢二十四	錢一圓八十錢
三等	官	同	課長	錢四	錢五	錢二十四	錢一圓八十錢
三等	官	同	課長	錢四	錢五	錢二十四	錢一圓八十錢
四等	判	小林区署長	錢三	錢四	錢二十	錢一圓二十	錢八十
四等	官	小林区署長	錢三	錢四	錢二十	錢一圓二十	錢八十
五等	官	六級以下	錢三	錢四	錢二十	錢一圓二十	錢八十

乙號表

等	級	日	額
一等	奏	一	圓八十錢
二等	判任官	五	圓二十錢
二等	官	六	圓
三等	判任官	五	圓二十錢
三等	官	六	圓
四等	判任官	五	圓二十錢
四等	官	六	圓

丙號表(大正二年第五號ヲ以テ本表中改正)

等	級	日	額
一等	奏仕官	一	圓八十錢
二等	判任官	一	圓二十錢
二等	官	一	圓二十錢
三等	判任官	八	十錢
三等	官	八	十錢
四等	判任官	六	十錢
四等	官	六	十錢

丁號表

等	級	鐵道賃	船賃	車馬賃	宿泊料	日當	移轉料
一等	雇員	二	錢三	錢十五	錢八十	錢五十	錢十圓

二等小者三等實費下等實費

七十錢三十錢

小者ハ特ニ車馬賃ヲ要スルトキニ限リ實費ヲ給ス

●樺太廳職員旅費規則

內務省訓令第十號 明治四十年六月十四日

樺太廳

樺太廳職員旅費規則左ノ通相定ム

樺太廳職員旅費規則

- 第一條 文官判任以上ノ者樺太內旅行ノ場合ニハ第一號表ニ依リ旅費ヲ支給ス
- 第二條 囑託員及雇員ノ内地及樺太內旅行ノ場合ニハ月俸又ハ月手當金百圓以上ヲ受クル者ハ奏任官四十五圓以上ヲ受クル者ハ判任官ノ旅費ヲ支給ス
- 第三條 囑託員及雇員ノ日給者若ハ四十五圓未滿ノ月俸又ハ月手當ヲ受クル者及巡查ノ内地及樺太內旅行ノ場合ニハ第二號表ニ依リ旅費ヲ支給ス
- 第四條 傭人ノ内地及樺太內旅行ノ場合ニハ第三號表ノ旅費ヲ支給ス但シ諸職工人夫等其ノ業ニ從事シ賃錢ヲ受クル日ハ旅費ノ一部ヲ支給シ又ハ全ク之ヲ支給セサルコトヲ得
- 第五條 囑託員、雇員及巡查ノ轉勤スル場合ハ內國旅費規則第十七條ノ例ニ依ル
- 第六條 測量、巡視、踏査等ノ爲現場ヲ巡廻スル者及平常旅行ヲ要スル者ニ對シテハ樺太

廳長官ハ豫メ月額又ハ日額ヲ定メ旅費ヲ減スルコトヲ得

前項巡廻旅行ト普通旅行トノ同日内ニ重リタルトキハ普通旅費ヲ支給ス

第六條ノ二 樺太廳長官ハ旅費ノ定額ヲ減少シ若ハ其ノ一部ヲ支給セサルコトヲ得

(明治四十年第十七號改正)

- 第七條 文官判任以上ノ者樺太ニ赴任スル場合ニハ當分ノ内第四號表ノ支度料ヲ支給ス
- 第八條 囑託員、雇員及巡查樺太ニ赴任スル場合ニハ當分ノ内第五號表ノ支度料ヲ支給ス
- 第九條 内地ヨリ樺太ニ旅行スル者ハ樺太最初ノ著船地迄ヲ内地旅行トシ樺太ヨリ内地ニ旅行スル者ハ樺太最後ノ乘船地迄ヲ樺太旅行トシテ各其ノ旅費ヲ支給ス但シ内地ヨリ樺太へ著船當日ハ樺太旅費ノ日當樺太ヨリ内地へ乘船當日ハ內國旅費ノ日當ヲ支給ス
- 第十條 樺太廳職員判任以上ノ者勤續二年以上ニシテ廢官、退官(自己ノ便宜及懲戒ニ依ル退官ヲ除ク)若ハ休職トナリ三十日以内ニ樺太ヲ出發シ歸郷スルトキハ內國旅費規則ノ定額ニ依リ前官又ハ本官相當ノ旅費ヲ支給ス
- 第十一條 既ニ歸郷旅費ノ支給ヲ受ケ三十日以内ニ出發歸郷セサル者ハ之ヲ返納セシム
- 第十二條 在職中死亡シタルトキハ其ノ勤續年月數ニ拘ラス第十條ニ準シ歸郷旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス
- 第十三條 内地ニ旅行中廢官、退官(自己ノ便宜及懲戒ニ依ル退官ヲ除ク)若ハ休職トナリ又ハ死亡シタルト

キハ其ノ旅行ノ公務ナルト私事ナルトヲ問ハス第十條ノ旅費又ハ第十二條ノ支給金ノ半額ヲ支給ス

第十四條 巡查ニシテ誓約期限後退職(懲戒ニ依ル)シ三十日以内ニ樺太ヲ出發歸郷スル者ニハ第二號表内地ノ定額ニ依リ旅費ヲ支給ス

第十五條 巡查ニシテ奉職中死亡シタルトキハ左ノ例ニ依リ歸郷旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス

- 一 樺太内ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ全額
- 二 内地ニ旅行中死亡シタルトキハ其ノ半額

第十六條 囑託員及雇員ニシテ勤績滿五年以上ニシテ官ノ都合ニ依リ解職トナリ三十日以内ニ樺太ヲ出發シ歸郷スルトキハ第二條第三條第十一條ノ例ニ準シ旅費ヲ支給スルコトヲ得

第十七條 囑託員及雇員ニシテ在職中死亡シタルトキハ第二條第三條第十二條ノ例ニ準シ歸郷旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス

第十八條 囑託員及雇員ニシテ内地ニ旅行中官ノ都合ニ依リ解職トナリタルトキハ第二條第三條第十三條ノ例ニ準シ旅費又ハ支給金ヲ支給スルコトヲ得

第十九條 歸郷旅費及支給金ハ凡テ舊勤務地ヨリ原籍地迄ノ路程ニ應シ汽車賃、汽船賃及

車馬賃ヲ支給シ日當、宿泊料ヲ支給セス

第二十條 本則第十條及第十六條ノ規定ハ本則施行ノ際樺太ニ在勤スル者ニ關シテハ本則施行前ヨリ在職年月數ニモ之ヲ適用ス

第二十一條 前各條ニ規定セサル事項ハ内國旅費規則ヲ適用ス

附 則

本規則ハ明治四十年四月一日以降ノ旅行ニ適用ス

●徵兵旅費規則

內務省令第三十二號 明治三十年十月二十五日

明治二十年十二月大藏省令第十七號徵兵旅費定則左ノ通改正シ明治三十年十月ヨリ施行ス

徵兵旅費規則

第一條 徵兵旅費ハ檢査入營ノ二種ニ分チ之ヲ支給ス

- 一 檢査旅費ハ檢丁及呼出ニ係ル檢丁ノ父兄癡疾不具等ノ者ニ同伴シタル保護人抽籤人等居住地ヨリ檢査所又ハ抽籤所ニ往返ノ旅費トス
- 一 入營旅費ハ新兵居住地ヨリ營所ニ至ルノ旅費トス

第二條 檢査旅費ハ左ノ規定ニ依ル(明治二十九年第五號改正)

- 一 片道三里已上ノ旅行ヨリ里數ニ應シ陸路雜費一里ニ付金五錢ヲ支給ス但一里未滿、

端數ハ切捨トス

- 二 官ノ都合ニ依リ特ニ滞在ヲ命シタルトキハ日數ニ應シ滞在日當金四十錢ヲ支給ス
- 三 川留雪支等ニテ旅行途中ニ滞在スルトキハ其地市區町村長戸長及之ニ準スヘキ者ノ證明書ヲ添ヘ請求スルトキハ滞在日當金四十錢ヲ支給スルコトヲ得
- 四 片道三里以上ノ旅行ニシテ渡航ニ在ラサルハ至リ難キ場所若クハ地勢上渡航又ハ瀛車乗用ヲ便トスルトキハ第一號ノ陸路雜費ヲ給セス渡航賃瀛車賃ノ下等實費ヲ支給ス
- 五 第四號ノ場合ニ於テハ尙夜數ニ應シ宿泊泊料金參拾錢ヲ給ス其ノ徒步旅行ト跨ル日ハ其ノ徒步旅行ニ對シテハ第一號ノ陸路雜費ヲ支給ス
- 六 渡航賃及瀛車賃ノ實費ヲ給スル場合ニ於テハ下等賄ノ實費ヲ給スルコトヲ得
- 七 片道三里未滿ノ旅行ト雖モ渡航ニ在ラサルハ至リ難キ場所ハ渡航賃ノ下等實費ヲ支給スルコトヲ得
- 八 片道三里未滿ノ旅行ト雖モ官ノ都合ニ依リ特ニ宿泊ヲ命シタルトキハ夜數ニ應シ宿泊料金參拾錢ヲ支給ス

第三條

檢丁若クハ呼出ニ係ル檢丁ノ父兄廢族不具等ニシテ步行シ能ハサルトキハ第二條第一號陸路雜費ノ外尙ホ片道一里以上ヨリ里數ニ應シ金拾錢ノ車馬賃ヲ支給ス但シ一里

未滿ノ端數ハ切捨トス(明治二十九年第五號改正)

第四條

- 一 入營旅費ハ左ノ規定ニ依ル(同前)
- 一 片道三里以上ノ旅行ヨリ里數ニ應シ陸路雜費一里ニ付金八錢ヲ支給ス但一里未滿ノ端數ハ切捨トス
- 二 第二條ノ第二號乃至第八號ハ入營旅費ニ適用シ滞在日當ハ金四十五錢宿泊料ハ金四拾錢トス
- 二ノ二 官用ノ船舶ニテ渡航スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲ爲ササルトキハ日數ニ應シ食卓料金五十錢ヲ支給ス
- 三 新兵入營ノ旅行ハ一日十二里詰トシ若シ集合上ノ都合等ニ依リ其見積リ行證ヨリ延著セシメタルトキハ増日數ニ應シ滞在日當ノ額ヲ支給ス
- 四 新兵入營旅行中疾病ニ罹リ步行シ能ハスシテ車馬賃ヲ要シ又ハ滞在シタルトキハ附添吏員ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添ヘ請求スルトキハ車馬賃等ノ實費又ハ滞在日當ヲ支給スルコトヲ得

附 則

第五條

北海道廳管丙ニ限リ第二條第一號ノ陸路雜費ハ金八錢第三條ノ車馬賃ハ金十三錢

第四條第一號ノ陸路雜費ハ金拾錢滞在日普及宿泊料ハ總テ金五十五錢トス

第六條 臺灣總督府朝鮮總督府樺太廳管内及滿洲其他諸外國内ニ限リ第四條ノ支給額ハ實費ヲ支給スル場合ノ外總テ其倍額トス(大正三年第一號改正)

恩給

●官吏恩給法

法律第四十三號 明治二十三年六月二十一日
朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條 文官判任官以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一 年齡六十歳ヲ超エ退官ヲ許シタルトキ

二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

一 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ従事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラヌ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十シ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又ハ十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス
非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
交際官及領事官貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ
恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷疾疾病引續キ重症ニ趣キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年
- 二 一肢ヲ失ヒ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス
明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算シ但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

- 第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ
- 一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數
 - 二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數
 - 三 從軍年加算ノ年月
 - 四 非職及休職中ノ月數
 - 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
 - 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數

第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ

- 一 年齡二十歳未滿者ノ在官月數
 - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
 - 三 郡區判任官及臺灣總督府地方廳稅務吏ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數(明治三十三年第十號及四十四年第三號ヲ以テ本條中改正)
 - 四 御用掛雇等外出仕勤仕月數
 - 五 第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數
 - 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數
- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス
- 第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ支給ス
- 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
 - 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在リテ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ増加セス

第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日々臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

- 一 判任官以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
- 二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法令ヲ以テ設立シタル議會ノ議員並市長町村長助役收入役名譽職參事會員東京市京都市大阪市北海道ノ區長沖繩縣區制ニ依ル區長及居留民團ノ民長助役會計役ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス(明治三十三年第十號ヲ以テ改正)

第十四條 郡區判任官及臺灣總督府地方廳稅務吏ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス(明治四十四年第二號ヲ以テ改正)

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限り退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終

身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ヲ生シタル後七個年内ニ請求セサレハ其權利ヲ放棄シタルモノトス(明治四十三年第六十號改正)

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷痍疾病ノ原因及其輕重

一 職務ニ堪エルト否ラサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依ルヘシ但此

法律施行ノ日ヨリ三箇年以内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ放棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

従前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

●官吏恩給法施行規則

閣令第三號 明治二十三年七月二日

官吏恩給法施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受ク

ヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在官中履歷書

二 戶籍謄本(明治四十三年第三號改正)

第四條 公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ
一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り證書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ
各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本屬廳ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ
恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ爲替貯金局ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ支給ス但權利消滅若クハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

恩給支給ニ關スル手續ハ遞信大臣ノ定ムル所ニ依ル(四十二年第三號ヲ以テ本項追加)
第八條 第九條(明治四十二年第三號ヲ以テ第八條第九條ヲ削除ス)

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日(刑法ノ刑ニ處セラレタル者ニ在リテハ裁判確定ノ日)日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受タルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日(刑法ノ刑ニ處セラレタル者ヲ以テ支給ヲ終リ刑ノ執行ヲ終リタルヨリ支給ヲ始ム)

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米粟ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿ニ箇分ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ
第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七
第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六
第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五
第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四
第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ傷疾疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷疾疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケ若クハ之ヲ取消サレタルトキハ其鑑定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ爲替貯金局ニ通知スヘシ(明治四十三年第三號及大正二年第三號改正)

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ爲替貯金局ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受ク者死去シタルトキハ其遺族ヨリ最寄郵便局ヲ經テ爲替貯金局ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ(同前)

第十六條 爲替貯金局ニ於テ第十三條若クハ第十四條ノ通知又ハ第十五條ノ届出ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ(同前)死亡又ハ權利消滅ノ爲メ返納スヘキ恩給證書ハ地方廳ニ於テ之ヲ收メ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ恩給支給郵便局ヲ經テ爲替貯金局ニ届出ヘシ(同前)

爲替貯金局ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り爲替貯金局及恩給支給郵便局ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ其ノ届書ニ恩給證書及戶籍謄本ヲ添ヘ恩給支給郵便局ヲ經テ爲替貯金局ニ届出ヘシ(同前)

爲替貯金局ハ恩給證書ノ裏面ニ其ノ事實ヲ記載シ局長署名捺印ノ上恩給支給郵便局ヲ經テ本人ニ下附シ其ノ旨ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名シタルトキ(明治四十三年第三號改正)

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第廿一條 (削除) 明治四十三年閣令第三號ヲ以テ削除

附 則(明治四十三年閣令第三號附則)

明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●官吏遺族扶助法

法律第四十四號 明治二十三年六月二十一日

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任官以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニ在ラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死亡シタルトキ

二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 文官判任官以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲナスヘシ

郡判任官及臺灣總督府地方廳稅務吏ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營

ムコトヲ得ヘキ官吏ハ第二條ノ納金ヲ要セス(明治卅二年第十六號明治卅二年第十一號) 附 則(明治四十四年二月四日法律第四號附則) 及同四十四年第四號改正

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス

公務ノ爲メ受ケタル傷痍ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞働及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス

第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼承者ニ限ル

第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒ノ籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其ノ父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三個年内ニ請求セサレハ其權利ヲ放棄シタルモノトス

第十三條 扶助料ハ賈買讓與質入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月

三 父母祖母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁

定ス
行政上ノ處分ニ依リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

●官吏遺族扶助法施行規則

閣令第四號 明治二十三年七月二日

官吏遺族扶助法施行規則左ノ通定ム

官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬應ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三條ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證

ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬應ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷疾若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證憑トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシノタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ癡疾不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 官吏遺族扶助法ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ其ノ請求書ニ戶籍謄本及第一條乃至第六條ニ掲クル書類ヲ添ヘ住所地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り証憑書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム

但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭給書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ爲替貯金局ニ通報スヘシ

第二章(削除) 明治四十三年閣令第四號削除

第九條 (削除)同前

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ爲

替貯金局ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ改

メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ(大正二年第二號改正)

第十二條 官吏恩給法施行規則第十三條及十五條ハ扶助料ヲ受クル者ニ之ヲ準用ス

第十三條 爲替貯金局ニ於テ第十二條ニ依ル通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第

十六條ノ例ニ依ル(同前)

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ

爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依

リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル(明治四十三年第四號改正)

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名シタルトキ

第十六條 (削除)(明治三十七年閣令第一號ヲ以テ改正)

附 則(明治四十三年三月四日閣令第四號附則)

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

法律第三十六號 明治二十九年三月三十日

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

第一條 地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長ノ在官月數ハ官吏ノ恩給及遺族扶助ニ關スル

在官年數中ニ算入ス

第二條 明治二十三年七月一日以後ニ退官シタル文官判任以上ノ者ニシテ地方稅支辨ノ俸

給ヲ受ケタル郡區長在官中ノ月數ヲ除算シ恩給ヲ受ケ若クハ之カ爲恩給ヲ受ケサリシ者

ニハ其月數ヲ算入シ恩給ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 第二條ニ相當スル者在官中又ハ退官ノ後死去シ其ノ遺族ニシテ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケザリシ者ニハ第一條ニ依リ算定シタル恩給年額若ハ在官年數ニ依リ扶助料若ハ一時扶助金ヲ増加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第四條 第二條第三條ニ依リ新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ方法ニ依リ最後ニ受ケ退官賜金又ハ一時扶助金ノ一部ヲ返納セシム

新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料年額ニ其ノ退官又ハ死去以後新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル日ニ至ルマテノ年數ヲ乘シ月數ハ其ノ月割額ヲ加ヘ退官賜金一時扶助金ヲ其ノ總額ニ對照シ若シ超過アルトキハ其ノ過超額ヲ新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條 恩給ヲ受クル者郡判任官及臺灣總督府地方廳稅務吏ニ任用セラレタルトキハ其ノ間恩給ヲ停止ス(明治二十二年第十二號及四十四年第五號改正)

第六條 第二條第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第七條 第二條第三條ニ依リ受クヘキ恩給扶助料ハ一時扶助金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年内ニ請求セザレハ其ノ權利ヲ放棄シタルモノトス

第八條 此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第九條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則

閣令第二號 明治二十九年三月三十日

官吏恩給法及官吏遺族扶助法施行規則

第一條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ恩給ヲ受ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ之レヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第三條 恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 官在中ノ履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戶籍寫扶助料若クハ一時扶助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戶籍寫及明治二十九年四月一日現在ノ戶籍寫トス

三 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケ

タル者ニ在リテハ其ノ證書若クハ辭令書

第四條 第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ揭クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條 恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法施行規則ノ例ニ依ル

●文官傷疾疾病等差例

太政官達第十六號 明治十八年三月二十七日

官 省院 廳 府 縣

「官吏恩給令附則第五條」傷疾疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得止旨相違候事

文官傷疾疾病等差例

公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ送ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ
「官吏恩給令附則第五條」ニ揭クル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルノ概テ左ノ如シ
第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スルモノハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル

者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼昏味シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ借亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ輕重ヲ酌量シテ第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ瘻管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十三條 陰莖或ハ睪丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏畢丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス

第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者第六項トス

第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒着若クハ強硬等ノ爲メニ把握探摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス

第二十條 一手ニ於テ四指又ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者又ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項又ハ第六項トス

第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ二指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス

●軍人恩給法

法律第四十五號 明治二十三年六月二十一日

軍人恩給法

第一章 總 則

第一條 陸海軍軍人ニシテ現役ヲ離レタル者ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 陸海軍軍人恩給ハ左ノ六種トス

一 退職恩給

二 免除恩給

三 增加恩給

四 賑恤金

五 給助金

六 扶助料

第三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給及寡婦ノ扶助料ハ終身、孤兒ノ扶助料ハ年齢滿二十歳ニ至ルマテ賑恤金、給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第二章 退職恩給、免除恩給、増加恩給

第四條 退職恩給ハ准士官以上左ニ掲ク事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ

二 戦闘及戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ

三 戰地ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ

四 現役十一年以上ニシテ未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ休職、停職滿期若クハ諭旨ニ依テ退職シタルトキ

第五條 免除恩給ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ服役滿期トナ

二 或ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
第四條第二又ハ第三ニ由リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

第六條 退職恩給、免除恩給年額ハ軍人恩給ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ト其服役年數トニ從ヒ第一號表若クハ第二號表ニ依リ之ヲ給ス但現役五十一年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ五十年ノ額又十一年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十一年ノ額トシ陸軍一等樂長及海軍兵曹長同相當官ニシテ最高ノ俸給ヲ受ケタル者ハ高等官六等ノ額、其他ノ海軍兵曹長同相當官ニハ高等官七等ノ額、陸海軍准士官ニシテ其官ニ對スル最高ノ俸給ヲ受ケタル者ニハ高等官八等ノ額ヲ給ス(明治四十四年第五十九號改正)

第七條 軍人現役十一年以上ニシテ文官ニ任シタル者又ハ文官ヲ兼任スル者十五年未滿ニシテ退官退職スルトキハ軍人ノ服役年數ニ對スル恩給ヲ給ス其十五年以上ニシテ退官退職スルトキハ文武官ヲ比較シ恩給年額ノ多キ方ヲ給ス

第八條 退職恩給、免除恩給ヲ受クル後再ヒ現役ニ就キ滿一年以上服務シタル者退職又ハ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一 再ヒ現役ヲ離ル、トキノ現官階當初恩給ヲ受ケタルトキノ官階ト同等ナラサルトキハ前後年數ニ再役年數ヲ通算シ再役ノ官階ニ對スル恩給ト既得ノ恩給トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二 前後ノ官階同等ナルトキハ再役ノ年數ニ依リ恩給ヲ増加ス但前役十一年未滿ニシテ

恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十二年以上ニ至ラザレハ増加セス

第九條 増加恩給ハ戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ左

ニ掲クル事故ノ一ニ當ル者ニ退職恩給、免除恩給ノ外特ニ給スルモノトス

一 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シタルトキ

二 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ

四 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ

六 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

第十條 増加恩給ノ年額ハ軍人前條ニ該當スル傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキノ現官

階ニ從ヒ左ノ各號ニ依リ之ヲ給ス

一 戰鬪ノ爲メ傷疾ヲ受ケタル者ニ在リテハ第三號表甲號ノ金額(明治廿七年第十九號改正)

二 公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ又ハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リタル者ニ在リテハ第三號

表乙號ノ金額

前條第一號ニ該當スル傷疾疾病ニ加フルニ同第一號乃至第六號ノ一ニ該當スル傷疾ヲ受

ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ハ其ノ症項ノ等差ニ應シ第三號表甲號又ハ乙號第一項ノ金額十
分ノ六以内ヲ増給ス(明治二十九年第二十號改正)

第十一條 戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ受ケ

又ハ之ヲ受ケスシテ現役ヲ離レタル後重症ニ趣キタル者左ノ期間内ニ檢査ヲ願出ルトキ

ハ策定ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失フニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レ

タル日ヨリ二箇年

二 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒ若クハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡スルニ至リタ

ル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ三箇年

第十二條 傷疾疾病ニ起因シ恩給ヲ請求スル者ハ左ノ書類ニ依リ證明スヘシ

一 傷疾疾病ノ原因ハ現任證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫シ若クハ口供書

二 傷疾疾病輕重ノ度ハ陸海軍醫官ノ證書若クハ陸海軍醫官ノ查覈ヲ經タル醫師ノ證書

第十三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給ノ支給ハ現役ヲ離レタル日ノ翌日ヨリ始マリ死

亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第三章 賑恤金、給助金

第十四條 賑恤金ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當リ第五條第六ヨリ輕症ナルモノニ之

ヲ給ス (明治二十九年第廿號改正)

- 一 戰闘ノ爲傷痍ヲ受ケ現役ヲ離レタルトキ
- 二 公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ第四條第三ニ原因スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ
- 第十五條 賑恤金ハ前條ニ該當スル傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキノ現官階ニ應シ前條第一ニ當ル者ハ第三號表甲號第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラス前條第二ニ當ル者ハ同表乙號第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額
- 第十六條 給助金ハ下士以上現役中死没シ若クハ現役四年以上十一年未滿ニシテ現役ヲ離レ退職恩給、免除恩給ヲ受ケタル者ニ之ヲ給ス其額ハ第四號表ニ依ル但陸軍一等樂長、海軍兵曹長同相當官及陸海軍准士官ニ給スル額ハ第六條但書ノ例ニ依ル

第四章 服役年

- 第十七條 服役年ノ始期終期ハ左ノ各項ニ依ル
- 第一 退職恩給、免除恩給ニ係ル服役年ノ始期
 - 一 下士以上ハ初任ノ日陸軍兵卒ヨリ出身ノ下士以上ハ入營ノ日海軍卒ヨリ出身ノ下士以上ハ五等卒トナリタル日但第廿四條第六ニ當リタル者ハ其兵卒トナリタル日

同條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日(同前)

- 二 陸軍兵卒ハ入營ノ日海軍卒ハ五等卒トナリタル日但第廿四條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日
- 三 北海道ニ移住ノ際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ヨリ出身ノ准士官以上ハ其准士官ニ任シタル日
- 四 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
- 五 海軍下士以下ニシテ明治二年五月一日以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
- 第二 給助金ニ係ル服役年ノ始期
 - 一 下士以上初任ノ日但シ給助金ヲ受ケタル後再ヒ現役ニ就キタルトキハ其ノ再服役ノ日

第三 服役年ノ終期

- 一 現役ヲ離レタルノ日

第十八條 左ニ掲クル日數ハ服役年ニ通算ス

- 一 前條ニ掲クル服役年ノ始期ヨリ終期ニ至ルマテノ日數
- 二 豫備後備ニ在ル者戰時若クハ事變ニ際シ召集シタルトキハ其召集中ノ日數
- 三 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナリタルトキハ海軍服務ノ日數陸軍軍人轉シテ海軍軍人

トナリタルトキハ陸軍服務ノ日數

四 文官ヨリ轉シテ陸海軍軍人トナリタル者ニ在テハ恩給ヲ受クヘキ最下限ノ期ニ至ルマテハ文官服務中ノ日數四分ノ三

五 現役ノ者陸軍見習士官海軍候補生若クハ陸海軍諸生徒トナリ再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

六 現役ヲ離レタル後再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

七 陸軍見習士官海軍候補生陸海軍諸生徒海軍水雷夫及北海道移住ノ際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ニシテ從軍シタルトキハ其日數

第十九條 左ニ掲クル日時ハ服役年ヨリ除算ス

一 刑期中及逃走中ノ日數

二 陸軍見習士官海軍候補生陸海軍諸生徒中ノ日數但從軍中ノ日數ハ此限ニアラス

三 文官奉職中ノ日數ニシテ官吏恩給法ニ依リ除算スヘキ月數

四 年齡十七歳未滿ノ日數

第五章 從軍年

第二十條 從軍年ハ現役外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スルモノトス

第廿一條 從軍年ノ加算ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ内國灣港ヲ出發シタルトキハ二個年

二 内國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ臨ミタルトキハ一個年

三 臨戰合圍地境内ニ於テ服役シタルトキ外國ニ在テハ二個年内國ニ在テハ一個年

四 日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ一個年

五 出征事件ニ關シ功績アル者及一時ノ出兵ヲ出征軍ト見做シ從軍年ニ加算スヘキ場合ハ勅裁ニ依ル

第廿二條 海軍軍人ノ外國航海ハ從軍年ニ準シ内國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半個年ニ加算ス其航海十二個月ニ超エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス

前項ノ規定ハ前條ニ當ルトキ及韓國沿岸ノ航海ニハ之ヲ適用セス(明治四十一年第

四十二號改正)

第廿三條 從軍年ノ加算ハ十二個月間數回ノ戰役ニ從ヒ若クハ航海ヲ爲スト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ亘リ十二個月ニ餘ル所ノ分數ハ更ニ一役若クハ一航海ト爲ス

第六章 恩給ヲ受クヘキ資格及權利ノ消滅停止

第廿四條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ退職恩給、免除恩給、增加恩給、賑恤金給助金ヲ受クヘキ資格消滅ス

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

- 三 將校及相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法劊官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ
- 四 將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ
- 五 准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
- 六 陸軍下士上等兵及同等級者ニ於テハ陸軍懲罰令ニ依リ又ハ素行修ラス若クハ其職務ヲ辱シムルニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ(明治四十四年第五十九號改正)
- 七 陸海軍下士及諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ劊官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 第廿五條 退職恩給、免除恩給、增加恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス
 - 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間之ヲ停止ス
 - 一 再ヒ現役ニ就キ若クハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ
 - 但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキ及准士官以下ニシテ文官判任以上ニ任セラレタルトキハ此限ニアラス(明治三十三年第七十五號改正)
 - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ

增加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラサレハ停止セサルモノトス

第廿六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ放棄シタルモノトス

第七章 扶助料

- 第廿七條 軍人左ノ各號ノ一ニ當リタルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受クルノ權利アルモノトス(明治卅五年第四十五號ヲ以テ第廿七條第廿八條ヲ改正)
- 一 戰死シ又ハ戰鬪ニ因ル負傷ノ爲メ死没シタルトキ
 - 二 公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死没シタルトキ
 - 三 退職恩給若クハ免除恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死没シタルトキ
- 第廿八條 寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ官階ト其服役年數トニ從ヒ左ノ各號ニ依リ之ヲ給ス但現役五十年以上又ハ十一年未滿ノ者並陸軍一等樂長海軍兵曹長同相當官及陸海軍准士官ノ寡婦ニ給スル額ハ第六條但書ノ例ニ依ル(明治四十四年第五十九號改正)
- 一 前條第一ニ當ルトキハ第一號表又ハ第二號表ノ金額
 - 二 前條第二ニ當ルトキハ第一號表又ハ第二號表ノ金額三分ノ二
 - 三 前條第三ニ當ルトキハ第一號表又ハ第二號表ノ金額三分ノ一

扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓ニ滿タシム

第廿九條 扶助料ヲ受クル者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

三 扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セザルトキ

四 死没若クハ戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ

第三十條 扶助料ヲ受クル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス

第卅一條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死没シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶

助料ヲ孤兒ニ給ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第卅二條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ非戸主軍人ノ孤兒ニ在テハ長子

ニ給ス其繼襲者及長子死没シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少

者ニ及フモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第卅三條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去

リ若クハ死没シ若クハ 利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶

助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セザルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨ

リ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第卅四條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死没シタル軍人ノ戸籍内ニ

アル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ

給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラ

サル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第卅五條 第廿七條乃至第三十四條ヲ適用スヘキ軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ハ其ノ

軍人現役中ヨリ引續キ同一戸籍内ニ在ル者ニ限リ寡婦ハ尙陸海軍兵籍簿ニ登記シタル者

ニ限ル

第卅六條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ

但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第卅七條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

雜 則

第卅八條 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者退職若クハ免

官スルトキハ同年七月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ

以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

海軍下士以下ニシテ明治二年五月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同年四月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第卅九條 豫備後備ニ在ル者平時召集中職務ノ爲メ死没シ又ハ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

「屯田兵下士卒ニシテ規定ノ給助ヲ受クル者平時軍隊勤務ノ爲メ死没シ又ハ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキ亦同シ」

第四十條 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍生徒「定規ヲ受クル屯田兵下士卒」及海軍水雷夫ハ第四條第二第三ニ因リ死没シ又ハ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサル者ニ限リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第四十一條 恩給ノ支給ハ陸海軍大臣ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ由リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決請フコトヲ得其裁決ニ依リ得ル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス
一 傷疾疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エト否ラサルト

第四十二條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ低價トシテ差押フルコトヲ得ス

第四十三條 明治八年達海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料及扶助料ヲ受クル者ハ總テ該令ニ依ルヘシ明治九年達陸軍武官恩給令ニ依リ受ケタル傷疾恩給ヲ除クノ外其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル並ニ明治十五年同十七年朝鮮國京城變亂ノ際該國ニ駐在若クハ派遣シタル者ノ從軍年計算ハ總テ從前ノ命令ニ依ル

第四十四條 此法律施行前ニ現役ヲ離レタル者ノ恩給ハ明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ月ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ之ヲクヘキ權利ヲ放棄シタルモノトス

第四十五條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス
附 則(明治四十二年四月一日五十九號ヲ以テ附則)

本法ハ公布ノ後之ヲ施行ス
不法施行以前退職恩給、免除恩給、扶助料又ハ扶助料ヲ受クヘキ權利發生シタル者ニ給ス

ヘキ恩給ノ金額ハ總テ從前ノ規定ニ依ル
 從前ノ規定ニ依リ扶助料ヲ受クル者其ノ權利消滅シタルカ爲轉給ヲ受クヘキ者ニ給スヘキ
 扶助料ノ金額ハ總テ從前ノ規定ニ依ル
 本法施行ノ際現ニ退職恩給又ハ免除恩給ヲ受ケ又ハ受クヘキ權利ヲ有スル者ノ遺族ニ給ス
 ヘキ扶助料ハ本法ノ規定ニ依ル
 明治三十七年二月六日以前現役ヲ離レ增加恩給ヲ受タル者ニ對シテハ本法施行ノ日ヨリ第
 十條第一項ノ規定ニ準シ第三號表ノ金額十分ノ八ニ相當スル増加恩給ヲ給ス但シ關位未滿
 ノ數ハ圓位ニ滿タシム
 陸軍武官傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭葬並ニ其家族扶助概則、海軍退隱令又ハ陸軍武官恩給令
 ニ依リ傷痍若クハ疾病ノ爲扶助料、退隱料又ハ恩給ヲ受クル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所
 ニ依リ本法施行ノ日ヨリ前項ノ規定ニ該當スル服役十一年未滿ノ者カ受クヘキ恩給金額ヲ
 給ス
 第十條第二項ノ規定ハ前二項ノ場合ニ之ヲ準用ス
 第四項又ハ第五項ノ場合ニ於テ陸軍卒ハ陸軍一等卒ノ額ニ依ル
 ●明治四十四年法律第五十九號附則ニ關スル件
 勅令第七十號 明治四十四年四月一日

明治四十四年法律第五十九號附則第六項ノ規定ニ依ル扶助料、退隱料又ハ恩給ハ別表ニ依
 リ官等及傷痍疾病ノ等差ヲ對照シテ金額ヲ給ス但其ノ金額從前ノ規定ニ依リテ受クル金額
 ヨリ少キトキハ從前ノ規定ニ依ル金額ヲ給ス
 附 則
 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
 (別表)

軍人恩給法	陸軍武官傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭葬並ニ其家族扶助概則	陸軍武官恩給令	海軍退隱令	親任	大將	少將	大佐	中佐	少佐	大尉	中尉	少尉	准曹長	軍曹	伍長	兵	卒			
				官	中將	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	同相	
				等	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	
				官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	
				判	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官
				任	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官
				官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官
				官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官	當官
				海軍一等卒	海軍二等卒	海軍三等卒	海軍四等卒	海軍五等卒	海軍六等卒	海軍七等卒	海軍八等卒	海軍九等卒	海軍十等卒	海軍十一等卒	海軍十二等卒	海軍十三等卒	海軍十四等卒	海軍十五等卒	海軍十六等卒	海軍十七等卒

傷疾疾病等差

陸軍武官傷疾扶助及死亡ノ者祭資並ニ其家族扶助概則	第一條 第一項	第九條 第二項	第九條 第三項	第九條 第四項	第九條 第五項
陸軍武官 恩給令	第十一條 第一項		第十一條 第二項		第十一條 第三項
海軍 退隱令	第十八條 第一項	第十八條 第二項及第三項	第十八條 第四項	第十八條 第五項及第六項	

●明治四十四年法律第五十九號施行手續

閣令第四號 明治四十四年四月一日

明治四十四年法律第五十九號施行手續

第一條 明治四十四年法律第五十九號附則第五項又ハ第六項ニ依リ恩給ノ更正ヲ請求セムトスル者ハ其請求書ニ履歷書及恩給證書ヲ添ヘ所管長官ニ差出シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣又ハ海軍大臣ニ差出スヘシ但シ臨時軍隊ニ編入セラレタル元警視局員ハ本條ノ請求書類ヲ住所ノ地方長官ヲ經テ内務大臣ニ差出スヘシ

第二條 陸軍大臣海軍大臣又ハ内務大臣前條ノ請求書ヲ受ケ請求ノ理由アリト認ムルトキ

ハ計算書ヲ作り前ノ給與ニ關スル診斷證書又ハ覆覈證書ノ寫ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

軍人恩給法第十條第二項ニ當ルモノニ付テハ前項書類ノ外陸軍省醫務局又ハ海軍省醫務局ニ於テ策定シタル傷疾疾病ノ等差ニ關スル書類ヲ添付スヘシ

第三條 本令ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ軍人恩給法施行規則ノ例ニ依ル

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●明治四十四年法律第五十九號ニ依ル恩給取扱手續

陸軍省令第三號 明治四十四年四月一日

明治四十四年法律第五十九號附則ニ依ル恩給取扱手續左ノ通定ム

第一條 明治四十四年法律第五十九號附則第五項又ハ第六項ニ依リ恩給ノ更正ヲ請求スル手續ハ同年閣令第四號ニ規定シタルモノ、外陸軍部内ニ在リテハ本細則ニ準據スヘシ

第二條 明治四十四年法律第五十九號附則第五項ニ依リ增加恩給ノ更正ヲ請求セムトスル者ハ第一書式ニ示シタル書類ヲ、同附則第六項及明治四十四年勅令第七十號ニ依リ恩給ノ支給ヲ受ケムトスル者ハ第二書式ニ示シタル書類ヲ本籍地所管ノ聯隊司令官ニ提出シ同官ハ之ヲ所管長官ニ呈シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第三條 軍人恩給法第十條第二項ニ當ルモノハ前條請求書ニ第一書式備考ノ如ク附記スヘシ

第四條 明治四十四年閣令第四號第二條第二項ニ依リ策定スル傷痍疾病ノ等義ニ關スル書式ハ第三書式ニ依ル

第五條 本令ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ陸軍軍人恩給取扱手續ノ例ニ依ル

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一號書式 (用紙美濃白紙ニ通ヲ要ス)

增加恩給更正請求書

明治何年何月何日戰鬪ノ爲傷痍ヲ受ケ(公務ノ爲傷痍ヲ受ケ)(公務ノ爲疾病ニ罹リ何年何月何日現役ヲ離レ增加恩給下賜相成候處明治四十四年法律第五十九號附則第五項ニ依リ更正下賜相成度履歷書及恩給證書相添此段請求仕候也

何府(郡)何市區(郡)町村

番地華(士)族(平民)

何府(縣)何市區(郡)町(村)番地寄留

(元)

官

氏

名

印

年月日

所管長官宛

(備考)

軍人恩給法第十條第二項ニ當ル者ハ本文ノ次ニ左ノ如ク附記スヘシ

追テ軍人恩給法第十條第二項ニ依リ相當ノ増給下賜相成度此段併セテ請求仕候也

第二書式 (用紙美濃白紙ニ通ヲ要ス)

傷痍扶助料(傷痍恩給)金額更正請求書

明治何年何月何日戰鬪ノ爲傷痍ヲ受ケ(公務ノ爲疾病ニ罹リ)何年何月何日現役ヲ離レ陸軍武官傷痍扶助及死亡ノ者祭衆並ニ其家族扶助概則ニ依リ傷痍扶助料(陸軍武官恩給令ニ依リ傷痍恩給)下賜相成候處明治四十四年法律第五十九號附則第六項ニ依リ金額更正下賜相成度履歷書及恩給證書相添此段請求仕候也

何府(縣)何市區(郡)町(村)

番地華(士)族(平民)

何府(縣)何市區(郡)町(村)番地寄留

(元)

官

氏

名

印

年月日

所管長官宛

(備考)

陸軍武官傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭案並ニ其家族扶助概則ニ依ルモノニシテ恩給證書ヲ交付セラレサルモノハ其ノ當時受ケタル令達書ヲ添附スヘシ

軍人恩給法第十條第二項ニ當ルモノハ本文ノ次ニ第一書式備考ノ如ク附認スヘシ
第三書式

前ニ給與セル際ニ於ケル診斷證書ノ末尾ニ左ノ通記載スヘシ
右更ニ覆覈候處兩服ヲ旨シ(二肢ヲ亡シ)且何々ニ由リ第一項症ニ第何項症ヲ加フルモノト認定候也

年月日

陸軍省醫務局長

●前同法附則ニ依ル海軍軍人恩給取扱手續

海軍省令第二號 明治四十四年四月一日

明治四十四年法律第五十九號附則ニ依ル海軍軍人恩給取扱手續左ノ通定ム

海軍軍人恩給取扱手續

第一條 明治四十四年法律第五十九號附則ニ依リ恩給ヲ請求スル手續ハ同年閣令第四號ニ規定セルモノノ外本令ニ準據スヘシ

第二條 增加恩給ノ更正請求書ハ左記書式ニ掲ケタル書類ヲ具備シ準士官以上ニ在リテハ海軍大臣ニ下士卒ニ在リテハ在籍鎮守府司令長官ニ提出スヘシ

第二條 本令ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ恩給扶助料取扱手續ノ例ニ依ル書式 (用紙美濃紙ニ通ヲ要ス)

增加恩給更正請求書

戰鬪(公務)ノ爲傷痍ヲ受ケ(疾病ニ罹リ)(戰地ニ於テ流行病ニ罹リ)タルノ故ヲ以テ明治何年何月何日現役ヲ離レ恩給及增加恩給下賜相成候處明治四十四年法律第五十九號附則ニ依リ增加恩給更正相成度履歷書及恩給證書相添此段請求仕候也

何府(縣)何市區(郡)町(村)

番地華(士)族(平民)

何府(縣)何市區(郡)町(村)番地寄留

年月日

官(職)(或ハ元官廳)氏

名 印

海軍大臣爵氏名殿

(下士卒ハ在籍鎮守府司令長官ニ宛ツヘシ)

(備考)軍人恩給法第十條第二項ニ當ルモノハ本文ノ次ニ左ノ如ク附認スヘシ
追テ軍人恩給法第十條第二項ニ依リ相當ノ増給下賜相成度此段併セテ請求仕候也
(添附スヘキ書類)

履歷書

恩給證書

第一號

退職恩給法

(明治四十四年第五十號改正)

年	親任					高					准士官
	將官及相當官	佐尉官	及相當官	官	官	一	二	三	四	五	
十一年	一、八〇〇	一、四四〇	一、二六〇	九〇〇	二〇〇	五四〇	三六〇	二七〇	二一六	一八〇	
十二年	一、八三〇	一、四六四	一、二八二	九一六	七三二	五五〇	三六六	二七五	二二〇	一八四	
十三年	一、八六〇	一、四八八	一、三〇二	九三〇	七四四	五五八	三七二	二八〇	二二四	一八六	
十四年	一、八九〇	一、五一二	一、三二四	九四六	七五六	五六八	三七八	二八五	二二七	一九〇	
十五年	一、九二〇	一、五三六	一、三四四	九六〇	七六八	五七六	三八四	二八八	二三一	一九二	
十六年	一、九五〇	一、五六〇	一、三六六	九七六	七八〇	五八六	三九〇	二九三	二三四	一九六	
十七年	一、九八〇	一、五八四	一、三八六	九九〇	七九二	五九四	三九六	二九八	二三八	一九八	
十八年	二、〇一〇	一、六〇八	一、四〇八	一、〇〇六	八〇四	六〇四	四〇二	三〇三	二四二	二〇二	
十九年	二、〇四〇	一、六三二	一、四二八	一、〇二〇	八一六	六一二	四〇八	三〇六	二四五	二〇四	

二十年	二、〇七〇	一、六五六	一、四五〇	一、〇三六	八二八	六二二	四一四	三一一	二四九	二〇八
二十一年	二、一〇〇	一、六八〇	一、四七〇	一、〇五〇	八四〇	六三〇	四二〇	三二六	二五二	二一〇
二十二年	二、一三〇	一、七〇四	一、四九二	一、〇六六	八五二	六四〇	四二六	三三二	二五六	二一四
二十三年	二、一六〇	一、七二八	一、五一二	一、〇八〇	八六四	六四八	四三二	三三二	二六〇	二一六
二十四年	二、一九〇	一、七五二	一、五三四	一、〇九六	八七六	六五八	四三八	三三九	二六三	二二〇
二十五年	二、二二〇	一、七七六	一、五五四	一一一〇	八八八	六六六	四四四	三三四	二六七	二二二
二十六年	二、二五〇	一、八〇〇	一、五七六	一二二六	九〇〇	六七六	四五〇	三三九	二七〇	二二六
二十七年	二、二八〇	一、八二四	一、五九六	一、一四〇	九一二	六八四	四五六	三四二	二七四	二三八
二十八年	二、三一〇	一、八四八	一、六一八	一二五六	九二四	六九四	四六二	三四七	二七九	二三二
二十九年	二、三四〇	一、八七二	一、六三八	一、一七〇	九三六	七〇二	四六八	三五二	二八一	二三四
三十年	二、三七〇	一、八九六	一、六六〇	一二八六	九四八	七一二	四七四	三五七	二八五	二三八
三十一年	二、四〇〇	一、九二〇	一、六八〇	一二〇〇	九六〇	七二〇	四八〇	三六〇	二八八	二四〇

二十二年	二、四三〇	一、九四四	一、七〇二	一、二一六	九七二	七三〇	四八六	三六五	二九三	二四四
二十三年	二、四六〇	一、九六八	一、七二二	一、二三〇	九八四	七三八	四九二	三七〇	二九六	二四六
二十四年	二、四九〇	一、九九二	一、七四四	一、二四六	九九六	七四八	四九八	三七五	二九九	二五〇
二十五年	二、五二〇	二、〇一六	一、七六四	一、二六〇	一、〇〇八	七五六	五〇四	三七八	三〇三	二五二
二十六年	二、五五〇	二、〇四〇	一、七八六	一、二七六	一、〇二〇	七六六	五〇一	三八三	三〇六	二五六
二十七年	二、五八〇	二、〇六四	一、八〇六	一、二九〇	一、〇三二	七七四	五一六	三八八	三一〇	二五八
二十八年	二、六一〇	二、〇八八	一、八二八	一、三〇六	一、〇四四	七八四	五二二	三九九	三一四	二六二
二十九年	二、六四〇	二、一一二	一、八四八	一、三二〇	一、〇五六	七九二	五二八	三九六	三一七	二六四
四十年	二、六七〇	二、一三六	一、八七〇	一、三三六	一、〇六八	八〇二	五三四	四〇一	三三一	二六八
四十一年	二、七〇〇	二、一六〇	一、八九〇	一、三五〇	一、〇八〇	八一〇	五四〇	四〇六	三三四	二七〇
四十二年	二、七三〇	二、一八四	一、九一二	一、三六六	一、〇九二	八二〇	五四六	四一一	三三八	二七四
四十三年	二、七六〇	二、二〇八	一、九三二	一、三八〇	一、一〇四	八二八	五五二	四一四	三三二	二七六

四十四年	二、七九〇	二、二三二	一、九五四	一、三九六	一一六	八三八	五五八	四一九	三三五	二八〇
四十五年	一、八二〇	二、二五六	一、九七四	一、四一〇	一一二	八四六	五六四	四二四	三三九	二八二
四十六年	二、八五〇	二、二八〇	一、九九六	一、四二六	一一四	八五六	五七〇	四二九	三四二	二八六
四十七年	二、八八〇	二、三〇四	一、〇一六	一、四四〇	一一五	八六四	五七六	四三二	三四六	二八八
四十八年	二、九一〇	二、三二八	一、〇三八	一、四五六	一一六	八七四	五八二	四三七	三五〇	二九二
四十九年	二、九四〇	二、三五二	一、〇五八	一、四七〇	一一七	八八二	五八八	四四二	三五三	二九四
五十年	二、九七〇	二、三七六	一、〇八〇	一、四八六	一一八	八九二	五九四	四四七	三五七	二九八

第二號 免除恩給法

(明治四十四年第五十九號改正)

十一年	一〇八圓	九六圓	八四圓	七二圓	六六圓	六〇圓	五四圓	四八圓	下
									判
									等
									三
									等
									四
									等
									官
									海軍一等卒
									陸軍上等兵
									陸軍一等卒
									陸軍二等卒
									陸軍二等卒
									海軍三等卒
									海軍四等卒
									海軍五等卒

二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年	三十年	三十一	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年
一四四	一四二	一三八	一三六	一三三	一三〇	一二六	一二四	一二二	一一八	一一四	一一〇	一〇六
一三三	一三〇	一二六	一二四	一二二	一一八	一一四	一一〇	一〇六	一〇二	九九	九六	九二
一二〇	一一八	一一四	一一二	一〇八	一〇六	一〇二	一〇〇	九六	九四	九〇	八八	八四
一〇一	九九	九六	九四	九二	八九	八七	八四	八二	八〇	七七	七五	七三
九五	九三	九〇	八八	八六	八三	八一	七八	七六	七四	七二	七〇	六八
八九	八七	八四	八二	八〇	七七	七五	七三	七〇	六八	六五	六三	六一
八三	八一	七八	七六	七四	七一	六九	六六	六四	六二	五九	五七	五五
七七	七五	七二	七〇	六八	六五	六三	六〇	五八	五六	五三	五一	四九

二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年	三十年	三十一	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年
一四八	一五〇	一五四	一五六	一六〇	一六二	一六六	一六八	一七二	一七四	一七八	一八〇
一三六	一三八	一四二	一四四	一四八	一五〇	一五四	一五六	一六〇	一六二	一六六	一六八
一二四	一二六	一三〇	一三二	一三六	一三八	一四二	一四四	一四八	一五〇	一五四	一五六
一〇四	一〇六	一〇八	一一一	一一三	一二六	一二八	一二〇	一二三	一二五	一二八	一三〇
九八	一〇〇	一〇二	一〇五	一〇七	一一〇	一一二	一一四	一一七	一二九	一二二	一二四
九二	九四	九六	九九	一〇一	一〇四	一〇六	一〇八	一一一	一一三	一二六	一二八
八六	八八	九〇	九三	九五	九八	一〇〇	一〇二	一〇五	一〇七	一一〇	一一二
八〇	八二	八四	八七	八九	九二	九四	九六	九九	一〇一	一〇四	一〇六